
ハヤテのごとく！inモンハン

脱力感

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！inモンハン

【Nコード】

N9997G

【作者名】

脱力感

【あらすじ】

ハヤテのごとく！のキャラクターがモンスターハンターの世界に入ってしまうという内容です初めてなので下手な部分が多いですがよろしく願います

きっかけ(前書き)

残酷な描写がでるかもしません m () m

きっかけ

「ぬおー！ー！なぜだー！」

三千院ナギは叫んでいた

何事かとその執事の綺崎ハヤテは飛んできた

「何事ですかお嬢様！」

そう聞くと

「ハヤテ！このミラルーツが倒せんだ！もう二回も死んだし…」

（なんだそんなことか）

ハヤテは内心ほつとしていたまた誘拐でもされそうになったのかと思っていたのだ

まあ、この屋敷の中でそんなことはありえないのだがしかし、ハヤテはなやんでいた

「うーん、ミラルーツですか…」

それもそうだミラルーツとはこのモンスターハンター2ndGの中でもかなり強いモンスターなのである

「んーんもうよい！自分の力でやってやる！」
そういつて

「秘薬」を飲み

「こんがり肉」を食べ戦場にむかった

10分後…

「くそー！ー！なぜ勝てん！」 ああ〜やっぱり負けてしまったか〜ハヤテはそう思っていた

それもそうである早くに二回も負けてしまつて三回目で勝てる確率はほとんどないのである

「まあまあ落ち着いてください次はきつとかてますって！」
そうはげましたが効果無し

「このキャラクターが私の操作スピードについてきてきてないのだ！だからまけたのだ！」

そんなことまで言い出した（もうこれは何を言ってもダメそうだな）とハヤテがそうおもっていると

ピンポン

とチャイムが鳴った、お客様だと思い

「ちよつといつてきます」

と言って玄関に向かった

その途中でマリアさんにもあったので一緒にむかったそして、玄関の扉を開けると

「こんにちは、ハヤテ君、マリアさん」

そう言ってきたのは、桃色の髪をした少女の桂ヒナギクだった

「ハイ。これ忘れ物。」

そう言つてプリントをくれた

「ありがとうございます」

「せっかくきてくれたんですから上がってください。」

マリアがそう言つと

「それじゃお言葉に甘えて」そうしてみんなでナギの部屋に向かった

「ああーもう！なぜ勝てん！」

どうやらまたやつに挑戦したようだ

やはりまけたようだ

「ナギ、なんでまた学校に来なかったの？」

そうヒナギクが聞いた

「?!なぜヒナギクがいるのだ？」

「ハヤテ君の忘れ物を届けにきたからよ」

「…まあそんな事よりハヤテ！こいつに勝てん！」

「そんな事じゃない！なんで来なかったの？」

さつきより強めに聞く

「私は勉強よりゲームの方が大切なのだ！」

そう言い切り話題をゲームにする

「はあ」

ヒナギクはため息をしナギを問い詰めるのをやめた

「まあ、ミラルーツは強いですから」

そう言うと

「そんなことはわかってている！どうやったら倒せる？」

「そう言われましても」

ハヤテが困っていると

「やっぱりこのキャラクターが悪いのだ！私が実際にやったら絶対にかてるのに！」

（それは無茶なんじゃ）

と、三人が思っている

「それじゃあ私のかわりにやってみる！」

と、ゲーム機から声がきこえた

「なんだ今の声は！」

「なんですか今のは！」

「え、何今の！」

「なんなんですか！」

四人が驚いているとゲーム機の画面が光だした

「くくくうあ！」

そう四人が叫ぶと光がこの部屋を包み込んだ

その後部屋には誰もいなかった

異世界（前書き）

結構微妙ですが

よろしくお願いします

異世界

「うーん」（ここはどこだ？）

ハヤテは思った

辺りをみると、雪が積もっている木造の家、商店、鍛冶屋らしき店、どこかでみたことがある場所である

（あっ！まさか…）

そのまさかであるここはモンスターハンターの世界である

（さっきのゲームから出た光のせいかな？）

とりあえず横で眠っている三人を起こす

「起きてくださいお嬢様、マリアさん、ヒナギクさん」

「うーん」「うーん」

そう言つて三人は起きた

「なんだここは!？」

「うーん、いったいどうなつたんですか？」

「ん〜。って…ここはどこ？」質問に答える

「え〜とですね、ここはモンスターハンターの世界のようなんです

…」

そう言つと、

「え〜、ハヤテ君一体何を言っているんですか？」

「ハヤテ君！そんなことあるわけないでしょ！一体何を言ってるの

!」

（やっぱり信じてもれないか〜）

そう思っていると

「嘘ではない、ここはモンスターハンターの世界だ！」

声が聞こえた方を見ると

「!？」

そこにいたのは、黄色の髪でツインテールの少女だった。

そしてどことなくナギに似ている

(誰だろう)

そうハヤテが思っている

「お前は私が作ったでわないか！」

そう言うとそのキャラは

「そうだ！私はお前に作られたキャラクターだ。そして、この世界にお前達を連れてきたのはこの私だ！」

「なぜこんなことをした！」

ナギが強めに問い詰める

「なぜだと？そんなこと決まっている！それは、お前が『私が実際にやったら倒せる』と言っただろ、だから実際にこの世界に連れてきてやったのだ！」

そういう終わると沈黙がながれるそして、ナギに視線が集まる

「たっ…確かにそんな事は言ったが…実際にそうなるとは思わなかったのだ！」

必死に言い返す「元の世界に戻りたかったらお前達だけでミラルーツを倒すことだ！一応武器はあの家にあるから自由に使い！それじゃあな」

そう言うてナギが作ったキャラクターはどこかへ行ってしまった
後には呆然と立ち尽くすハヤテ達が残された

出発（前書き）

前回の話でぬけているところがありました
した

すいませんで

出発

「これからどうしましょう?」

「まあ、とりあえずあいつの言っていた家に行くしかないだろう」

そうして、ナギキャラの言っていた家に向かった

家の中

家の中には大きな箱があった

「確かゲームだとこの中に武器があるはずなんだが…」

そう言って箱をあけた

「はあ、期待はしていなかったがやっぱり初期の武器しかないか…」
そう言っつてナギは少し落ち込んでいる

中に入っていたのはボーンククリなどのあらかじめ入っている武器
だったのである。初期の武器なのでたいして強くない

だが、一応全種類の武器は入っている

「どの武器がいいのかしら…」

そうヒナギクが悩んでいると

「いつも正宗を使っているので太刀にしたらどうですか?」

「太刀か…」

ハヤテのアドバイスで太刀の武器の骨を取ろうとした時ある事を思
いついた

(そうだ!一回試してみよう)

そう思いヒナギクは叫んだ

「正宗!」

(さすがにこの世界にはこないんじゃないか…)

そのハヤテは思っていたが

ヒナギクの手にはいつのまにか正宗が握られていた

「え!?!」

ハヤテは驚いた

それもそうである、このモンスターハンターの世界には正宗なんて武器はないだから（あたりまえなのだが）

「まさか本当に来るとは…」

正宗を呼んだヒナギク自身も驚いている

「まあ、せつかく来たんだし、私は正宗にするわ」

ヒナギク 武器 正宗

「ん〜じゃあ私はゲームでも使ってきた片手剣にするか」

ナギ 武器 ボーンククリ

「ん〜私はなにがいいでしょう…」

マリアも悩んでいた

「遠距離武器が一人はいるといいんだけど…」

ナギがそう言う

「それじゃあ私はこのボウガンにします」

マリア 武器 猟筒

「それじゃあ僕は太剣にします」

ハヤテ 武器 ボーンブレイド

これで全員の武器が決まった

なぜだか防具は入っていないかった

「防具ぐらい入れてもいいじゃないか…」

そうナギはぼやいた

村

「確かあの村長に話せばクエストにいけるはずだ」

そう言うナギは村長に話し掛けた

「なあ、何か依頼はないか？」

「おや？みない顔だね」

「ついさっきここに着いたのだ」

「ふむ、そうかそうかどうりで。おまえさんたち新人かい？」

「まあ、そうですけど」

ハヤテが答える

「そうか、じゃあドスランポスを狩ってきてもらおうかね」

「ドスランポス？」

マリアとヒナギクは首を傾げた

「ねえハヤテ君ドスランポスって強いモンスターなの？」

ヒナギクがハヤテにきく

「いえ、それ程強くはありません。どちらかという弱いほうです」

「それじゃあ私達でも比較的らくですね」

マリアがそう言った

「まあ、最初ですから」

「よし！それじゃあドスランポスを狩りにいくぞ！それでどこにいるのだ？」

「密林じゃよ。初クエストがんばっておいで」

村長は笑顔で言った

「それじゃあドスランポスを狩りに密林へいくぞー！」

そうしてハヤテ達は密林に向かった

ランポス(前書き)

やっと少し戦闘します

ランポス

「ここが密林か」

辺り一面樹木で生い茂っている

そして、いまナギ達がいるところはベースキャンプといってアイテムを補充したり休んだりするところである

「あの〜一つ質問があるんですけど…」

そう言ったのはヒナギクだった

「ん、なんだヒナギク？」

「ドスランポスって、どういう姿をしているの？」

「?!、そうか、ヒナギクはゲームを全くしないんだっただな」

そう言っただけで説明しようとした時

「すいませんナギ、私にも教えてくれませんか？」

そう言ったのはマリアであった

マリアのゲームの腕はピカイチなのだが、自分から進んでやるわけではないのでこういう主に一人でやるゲームは知らないのである

「…わかった。まずランポスという青い鱗におおわれていて、赤いとさかの着いているちっこい恐竜のようなやつがいる。その中で大きなやつがドスランポスだ」おまかな説明だが頭の良い二人はだいたい想像できたようである

「それにしても、ここかなり広そうよね。二組にわかれて探した方が良いんじゃない？」

そうヒナギクが言った

「ん〜そうかもしれないね」

「その方が効率も良いしな」

「それでは、どうやって分けるんですか？」

「それは、普通に『グッパで分かれましょ』でしょ」

ヒナギクが言った

「えっ！ん〜…」

とナギは悩んでいた

ナギはハヤテとなんてかして一緒になりたいのであるだが、良い案が何も浮かばなかったので

「それでいい…」

渋々承諾した

（ふう、特に反論はないようね）

とヒナギクは思った

ヒナギクもあの3月3日以来ハヤテのことが好きになったのである
なので、ヒナギクもまたハヤテと一緒にになりたいのである

班の分け方をグツパにした理由は、ナギより早く決め方を決めないとナギがハヤテと一緒にいる確率が高い決め方にされると思ったからである

そして平等な決め方だからだ

「それじゃいくわよ！グツとパーで分かれま」

「……しょ」「……」

一班

ハヤテ ナギ

二班

ヒナギク マリア

（よし！ハヤテと一緒になれた）
と喜ぶナギ

（はあ、ダメだったか…）

かたやハヤテと一緒になれずに少し落ち込むヒナギク

「それじゃあ準備をするぞハヤテ！」

「わかりましたお嬢様」

そう言つてアイテムボックスに向かうハヤテ達

「私達もいきましよう」

「そうですね」

ヒナギク達のハヤテ達のあとを追つた

「あのくすいませんナギ」

「ん？今度はなんだマリア？」

「えーとですね、ボウガンの弾を持つてくるのを忘れてしまったんですけど…」

そうマリアが申し訳なさそうに言うと

「なんだそんな事か、それなら大丈夫だ。このアイテムボックスの中にボウガンの弾があつたはずだ」

そう言つて探していると

「これだ！」

そう言つて取つた物をマリアに渡した

「通常弾1v1弾数……無限!?」マリアは驚いた。なんせ弾数が無限というありえない数なのだから

「弾数無限で…」

「マリア、ここがゲームの世界という事を忘れていないか?」「あつ！そういうえばそうでしたね」

まあ、ゲームの世界なら普通だろう

そう思つてボウガンに弾をこめた

「よし！準備はできた行くぞハヤテ！」

「はい！お嬢様！」

そうしてハヤテ達は右の道へ行つた

「さて、私達はどちらに行きますか?」

そう言いマリアは二つの道を指差した

「一つはツタを昇って行く道二つ目は左側の海沿いのみち

「それじゃ左側の道で！」

ヒナギクは速答した

「なぜならヒナギクは高所恐怖症だからである

「それじゃ、私達も行きますか」

「そうですね」

そうしてヒナギク達もベースキャンプを離れた

ハヤテ・ナギ

「うーん、なかなか見つからないもんだな」

「まあ、密林は広いですから」

そう言つてドスランポスがいそうなところをあたっていた

「なあ、ハヤテ」

「何ですかお嬢様？」

「確かあいつはミラルーツを倒せば元の世界に帰れると言っていたよな？」

「確かにそう言つてましたけど…何ですか？」

「なんでつて…だって今ドスランポスだろ！ミラルーツなんてまだまだ先じゃないか！という事はあとどれだけ時間がかかるというのだー！」

「ええー！まあ、確かにそうですね…」

確かにそうですね前にも書いたが、ミラルーツとはかなり強いモンスターであるこのモンハンの世界では強いモンスターと戦うにはハンターランクというのを上げなければならない。そして、そのハンターランクを上げるには特定のクエストをクリアする必要があるのである

しかもミラルーツは最高のハンターランク6にならなければならない。しかし今ナギ達のハンターランクは最低の1であり6になるの

はまだまだ先なのである

「ん〜ん、確かにそうですが今はドスランポスを見つけてに専念しましょうそれについては村に戻ってから考えませんか？」

「まあ、確かにそうだな。ならハヤテ！早くドスランポスを見つけて村にもどるぞ！」

「はいお嬢様！」

そうして二人は密林の奥に進んだ

ヒナギク・マリア

「けっこうきれいな海ですね」

「そうですね」

そんな事を言いながら二人は歩いていた
そうすると

パキッ

後ろから枝の折れる音がした

「！？」

二人が後ろを振り替えるとそこには青い鱗で赤いとさかのランポスがいた

「あれがナギの言っていたランポスですよね？」

「多分そうだと思います、ナギが言っていた特長と一致しますし」

（確かにちっこい恐竜みたいですな〜）

マリアがそんな事を思っていると

「ギャオー」

ランポスが咆哮を上げヒナギクに向かっていった

その瞬間にヒナギクは背中にあつた正宗を正眼に構え

「これでもくらえ！」

そうして袈裟がに正宗を振り下ろしランポスの首に当たった

「ギャオー！」

そう叫んでランポスは床に倒れ動かなくなった

(ふう、急に襲ってきたからびっくりした)

ヒナギクがそう思っていると

「やっぱりヒナギクさんは強いんですね」

「いや、そんなに強くないですし、あと女の子なんですけど…」

「ふふっそうですねでもやっぱり頼りになりますね」

「まあ、ありがとうございます…」

(女の子なのに強くて頼りになるって…)

ヒナギクは少し複雑な気分になった

「そういえば、この遺体はどうするんでしょう?」

「さあ?私もこのゲームはやったことがないので」

そうしてその遺体を見ていると

姿が少しずつ透明になり消えていった

「……やっぱりゲームの世界なんですね」

「そうですね…」

二人は改めてこの世界がゲームの世界である事を実感した

「それじゃ行きましょうか」

マリアがそう言ったとき二人は後方、左右から視線を感じた

「グルル…ギャオーー!!」

「ギャオー」

「ギャオー」

「ギャオー」

「ギャオー」

さっきよりも殺気が満ちているきつと仲間が殺されたからである。

数はだいたい五体

「数が多いですね」

そう言っつてマリアは猟筒を構える

「でも、やるしかないですね」

ヒナギクも正宗を構え直す

「ギャオー!!」

咆哮と共にランポス達がヒナギク達に飛び掛かった

戦闘（前書き）

作「前回の話でもミスがありましたすみません」

ナ「お前は少しはミスをしないようにしろ」

作「すみません」

戦闘

「ギャオー」

三匹のランポスが左右、前から飛び掛かった

「っ！」

ヒナギクが後方に下がろうとした時

ドンドンドンドン

「ギャオ」

ランポスがふっ飛び地面に倒れた

「！」

ヒナギクは驚いた。こっちに向かって飛び掛かってきたランポスがいきなり吹っ飛んだからである

そうして銃声がした方を見た

「ん〜やっぱりLV1と書いてあるだけあって威力が低いですね〜」
そう言っているマリアの目はさきほどまでの優しい目ではなく鋭く獲物をかるハンターの目のようだった

（威力が低い？）

そう思つてヒナギクはさきほど打たれたランポスの方を見た

「グルル……」

ランポスはもう身を起こしていた

（それにしても、あんなに雰囲気の違いマリアさん初めて見たな）
そんな事を思っていると

「ヒ……ヒナ…ヒナギクさん！」

「ふえ！？な、何ですかマリアさん？」

「ぼーっとしないでくださいヒナギクさん、気を抜いていたらやられてしまいますよ」

「すいません、それで何ですかマリアさん」

「はい、一応作戦があります」

「作戦ですか？」

「はい、さつき私が言いましたが、私の武器は威力が低いです。ですが、ヒナギクさんの正宗は一撃でランポスを倒せる威力の高い武器ですなので、ヒナギクさんはランポスの攻撃を気にせず突っ込んで下さい」

「わかりました。で、マリアさんはどうするんですか？」

「私はヒナギクさんが攻撃しやすいように援護します」そう言っ
てマリアは弾をこめた

「わかりました」

「それじゃ行きますよヒナギクさん！」

「はい！」

そうしてヒナギクはランポスに突っ込んだ

「ギャオー！」

咆哮を上げさつき撃たれた三匹のランポスが向かってきた

「ふ〜」息を吐きヒナギクに当てないように集中する

そして

ドンッドンッドンッ

マリアは弾丸を三発発射した

「ギャオ?!」弾丸を食らったランポスが仰け反る

(さすがマリアさん正確な射撃だわ)

その隙を見逃さずに正宗を袈裟がに振り下ろす

「ギャオ」

そう叫んでランポスは沈黙した

(まず一匹)

そしてすぐに正宗の向きを変え振り上げる

「ギャア」(二匹!)

そして三匹目に切り掛かろうとした時

後ろにいた一匹のランポスが飛び掛かってきた

「!」

ヒナギクがその攻撃を避けようとした時

(「ランポスの攻撃は気にせず突っ込んで下さい」)

マリアの言葉を思い出した（ここで避けたらマリアさんを信じていないことになる！）

そうしてヒナギクは改めて三匹目のランポスに狙いを定めた
その瞬間

ドンッドンッドンッ

「ギャー！」

そうしてランポスは吹っ飛んだ、三匹目のランポスも二発の弾丸を食らったのでのけぞっている

（ありがとうマリアさん）

そして

「はあ！」

正宗を振り下ろしランポスに面を食らわせた

「ギャオ！」

（これで三匹！）

そして、残った二匹は後退りをしていた

「これならいけますねマリアさん」

「そうですね」

と、この会話のすきに二匹のランポスは大きく跳躍した

「あっ！」

ヒナギクが声を上げた

「逃がしません！」

マリアが猟筒をかまえ発砲したが

カチツカチツ

「…弾切れです」

「ええー！」ヒナギクは純粹に驚いたまさかマリアがこんなミスをするとは思わなかったからである

結局ランポスは逃げてしまった

「でも、ケガがなくて良かったです」

「でも、すいません私のミスである二匹を逃がしてしまって……」
マリアは結構落ち込んでいた

「その事はもういいです。それよりこれからどうします?」

「うーんどうしましょうか?」

二人が悩んでいるとヒナギクがひらめいた

「あの二匹を追いましょうたぶんあの二匹はリーダーのドスランプアのところに戻ったと思うんですけど」

「確かにそうかも知れませんが、どう後を追うのですか?」

「それは、」

ヒナギクが笑顔で答える

「この足跡をたどればいいんです」

地面を見てみると大きな鶏の足跡みたいのがついていた

「それじゃこの足跡をたどって行きましょう」

「そうですね」

そう言つてヒナギクは正宗を背中につけ、マリアは弾をこめてから背中につけたそして二人は足跡を走つてたどつていった

出現（前書き）

作「やっと書き上げました時間が掛かってすみませんでした」

ナ「まったくだ一体どんだけ

時間が掛かったとおもっている」

作「本当にすみません」

ナ「本当に何が『明日までには書けると思います』だ約束ぐらい守れ！」

ます

作「もう本当に反省して
ナ「他にも

な……」

マ「では第六話始まり

ます」

出現

ヒナギクとマリアがランポスと戦っている頃

ハヤテ・ナギ

「ん〜！いくら探してもランポス一匹見つからん！」

さつきからドスランポスを探しているが未だに見つからない

ここは広場みたいな場所で天上には穴が開いていて骨らしきものが散らばっている

「まあまあお嬢様、気長に

探しましょう」

そんな事を言っていたがハヤテは殺気を感じていた

（この場所は確かにドスランポスの巣のほすだけどここんなに殺気を感じるのはおかしい…）

ハヤテが感じた殺気は少なくみても7〜8

だが、ゲームの密林のなかでは敵が出る数はランゴスタ（でっかい蜂みたいな虫）などを抜いて1エリアに最高でも4〜5匹程度であるので殺気が7〜8あるのはおかしいのである

「ここにもいないではないか！一体どこにいるのだ！」

ナギがいらだったその時

「ギャオー！」

「〜！」

二人はその咆哮に驚いた。そして、咆哮のした方を見た

「なんだ、ランポスカ」

ナギがほっとしてほると

「よく周りを見てくださいお嬢様…」

「？」

そしてナギが周りをみると

「！、ありえないだろ！こんなこと」

周りには17〜8匹ぐらいのランポスがいた

「ゲームではこんな数がでることなんて無かったぞ！」

「そうなんです」

「グルル…」

ジリジリと間合いを縮めてくる

「ギャオー！」

1匹のランポスが咆哮を上げ、4匹のランポスがハヤテ達に飛び掛かった

「危ないお嬢様！」

ハヤテがナギの前に立ち背中にかけてあるボーンブレイドを構え、そしてランポスの攻撃をガードする

「っ！」

さすがのハヤテも4匹ものランポスに攻撃されたので少しのけぞってしまった

「大丈夫かハヤテ！」

「大丈夫ですお嬢様」

(けどさすがに数が多いな…)

ハヤテがそう思っていると

「ギャオー！」

再びランポスが咆哮を上げる

今度は全てのランポスが飛び掛かった

(さすがにこの数では防ぎきれない)

そうしてハヤテ素早くボーンブレイドをしまい、ナギを抱えバックステップした

「おいハヤテ！いきなりそんなことをするな！／＼／＼」ナギは顔を赤くした

「すみませんお嬢様、でも急な事でしたので…」

ハヤテはいたって冷静である

そして向きを変え後ろに走った

「ギャオー」

ランポス達は逃がすかという感じでハヤテ達を追う

ハヤテはある程度ランポス達と距離がついたところでナギを下ろした

「お嬢様はここにいてください」

そうしてハヤテはボーンブレイドを構える

「何を言っている！私だつて戦うぞ！」

ナギもボーンククリを構える

「ダメです！お嬢様には危険すぎます！」

「だが、私だつてゲームではうまかつたのだぞ！」

「これはゲームではありません！それに僕はお嬢様を危険な目にあわせたくないんです」

「ハヤテ……」

ランポス達はすぐそこまで迫っていた

「わかつた。だが条件がある」

「何ですか？」

「絶対に勝のだぞ！」

「了解しましたお嬢様！」

大きくそう言つてハヤテはランポス達に向かった

「ギャオー！」

前にいた四匹のランポスがハヤテに飛び掛かった

ハヤテはそれを左に飛び避ける

避けた瞬間にその後ろにいた五匹のランポスが飛び掛かる

「っ！」

それも左に飛んで避ける

そしてまたその後ろにいたランポスが飛び掛かる

（避けていたらキリがない）

そう思い、ハヤテは後ろに跳んだ

そして、また後ろにいた五匹のランポスが飛び掛かった

その時にハヤテはボーンブレイドでランポス達を切り落とした

「ギャオー！」

ランポス達はふっ飛び地面に倒れたがすぐに身を起こた

「一撃ではダメですか…」

さらに二匹のランポスが来た

(まだ増えるんですか!)

ハヤテが驚いた時

「うあー!」

「お嬢様?!」

そうして悲鳴を上げたナギの方を見た

そこにはランポスがナギまであと五メートルぐらいまで迫っていた

「助けてくれハヤテー!」

「お嬢様今行きます!」

「グルル…」

ナギはもう腰を抜かしていた

(ランポスがこんなに殺気だっていてこんな怖いなんて…)

ナギはもう泣く寸前だった

「お嬢様ー!」

ハヤテはランポス達が邪魔をしてナギに近づけずにいた

(早く、早く行かないと早くお嬢様のもとに…間に合ってくれ!)

そうして必殺技を使おうとした時

「ギャオ!?!」

そう叫んでナギの近くにいたランポスがふっ飛んだ

「!?!」

ハヤテとナギは驚いた

なんせいきなりランポスがふっ飛んだからである

「危なかったですね」

「本当になにをやってるのハヤテ君!」

「マ、マリア!それにヒナギク!」

「マリアさんにヒナギクさん」

ハヤテのそばにいるランポス達も二人に視線を向けている

「二人に合ったと思うたらナギが危険な目に合っているし、ハヤテ君はランポス達に囲まれているし…それにしても本当になにをやって

いるんですかハヤテ君！」

マリアが本気で怒っている

「すみません……」

「何かあつてからではおそいんですよ！」

「本当にすみません」

ハヤテは本当に落ち込んでいた

（大事な人を守れなかった一生守っていくと誓ったのに僕はなんて無力なんだ大事な人も守れないなんて……）

ハヤテがうつむきそう思っていると

「ハヤテ君！前！」

ヒナギクがそう叫んだ （前が何ですか？）

ハヤテが前を向いたとき

一匹ランポスが目の前にいた

「！」

ハヤテは腕を組んでガードするしかなかった
だが

「ギャオ！」

ランポスがマリアに撃たれてふっ飛んだ

「ハヤテ君！」

「……」

無言でマリアの方を見る

「確かにナギを危険な目にあわせてしまったのはハヤテ君です」

「……」

「ですが」

マリアの顔が優しくなる

「ここで負けてしまつてはいけません。ハヤテ君はナギにとってとても大切な人なんですから、それにハヤテ君がいたからこそナギはあんなに元気になったんですよだから、生きてくださいそして、これからもナギを守ってください！」

「！」

ハヤテが一匹のランポスが飛び掛かってきた

「ハヤテ君！危ない」 ヒナギクが叫ぶ 「！」

ハヤテはポーンブレイドをランポスに振り下ろした 「ギヤオ」
ランポスは地面に倒れ、動かなくなった

（僕はこんなところで終わるわけにはいかないんだ）

その思いでランポス達に切り掛かる

「私も戦わなくちゃ」

（良かったハヤテ君が元気になって）

そうしてヒナギクも戦闘に加わった

「やはりもう少し距離を縮めないといけませんね」

マリアも猟筒に弾を込めてランポス達のところへ向かった

二人が加わったことで形成は逆転した

マリアが発砲して隙をつくりハヤテとヒナギクがその隙に攻撃する
という作戦で半分以上のランポスが倒された

「このままいけば全員倒せそうね」

「そうですね」

「二人とも絶対に油断してはいけませんよ？特にハヤテ君！」

マリアがハヤテを睨み付けて言った

どうやらまだナギを危険に合わせたことを完全に許したわけではな
いようである

「わかっていますよマリアさん…本当にすみません」

ハヤテはまたマリアに深々と頭を下げた

その時

「ギヤオオ！」

今までのランポスより大きな咆哮が上がる

「ッ！」「ッ！」

三人は咆哮がした方を見る

そこには赤い大きなとさかがあり、ランポスより一、二まわり大き
い体をしている恐竜みたいな姿をした生き物が立っていた

「あれがドスランポスだ！」

ナギがそう叫んだ

「あれがドスランポス？本当にランポスが大きくなっただけみたいね」

ヒナギクは感心していた。「あれを倒せばこのクエス
トがクリアはずだ」

ナギがそう叫ぶ

「それじゃさつさとかたずけますか」

ヒナギクが正宗を構え直す

「そうですね」

ハヤテもボーンブレイドを構える

「それじゃいきますよ」

マリアは猟筒に弾をこめる

「ギャオオ！」

ドスランポスが咆哮を上げ三人に迫った

決着（前書き）

えゝかなりの間更新出来なくてすいませんでした たぶん次も遅くなると思いますがこれからもよろしくお願いします

決着

「ふ〜」

マリアは深く息をした

そして

ドンツドンツドンツ

三発の弾丸を発砲する

「ギャオオ！」

全て命中するが怯まずに三人に迫る

「ただ大きいだけじゃないようですね〜」

「そのようですね」

ハヤテがそう言っつてドスランポスに向かう

「ギャオオオ」

ドスランポスが咆哮をし、ハヤテに噛み付く

「っ！」

ハヤテは素早く後ろに跳び攻撃を避ける

「はあ！」

後ろにいたヒナギクが切り上げる

「ギャオオ」

ドスランポスの嘴くちばしに当たりドスランポスが仰け反る

そこにマリアが残っている弾を全て打ち込む

「ギャオオ！」

そしてドスランポスが吹っ飛ぶ

「まだみたいです〜」

マリアがそう言いながら猟筒に弾をこめる

「ゲルル…」

すぐにドスランポスは身を起こした

「なら一気にいくわよハヤテ君！」

「わかりましたヒナギクさん」

ハヤテとヒナギクがドスランポスに接近する

「ギャオ」

ドスランポスの後ろにいた五匹のランポスが二人に飛び掛かる

「ッ！」「」

ドスランポスだけに集中していた二人は反応が遅れたが

ドンツドンツドンツドンツドンツ

放たれた弾丸は全てランポス達に命中した

「二人ともまだランポスがいることを忘れないでください！」

マリアが怒った声で言う

「「す、すみません！」「」

二人は即座にマリアに謝った

「さあ、もうそろそろ終わらせましょうか？」

そい言いながら弾をこめる

「わかりました」

「そうですね」

ハヤテとヒナギクは改めて武器を構えた

「ギャオオオオ！」

ドスランポスの咆哮とともに全てのランポスが三人に向かう

「いきますよ二人とも！」

「「はい」「」

ハヤテとヒナギクはランポス達に向かう

「ギャオ」

一匹のランポスがハヤテに飛び掛かる

ドンツ

その音がした瞬間にランポスが吹っ飛ぶそして、その隙にハヤテが
ポーンブレイドで切り上げる

「ギャオ！」

ランポスはそう叫び沈黙した

「まず一匹」

ハヤテがそう言う

次のランポスがヒナギクに向かう

「ギャオ」

ランポスがそう咆哮した瞬間ヒナギクは身を屈めた

次の瞬間マリアが放っていた弾丸がランポスに命中する

「ギャオ！」

その隙にヒナギクが横薙ぎ（よこなぎ）に正宗をふりランポスを吹っ飛ばす

「ギャオ！」

ランポスはたおれた

「二匹」

今度はヒナギクが言う

三匹のランポスがハヤテとヒナギクに迫る

ハヤテはすぐにランポスを切り上げるそしてすぐさま大剣を構え直し袈裟がに振り下ろす

「ギャオア！」

ランポスは地面に倒れ沈黙する

「三匹」

ヒナギクは素早くランポスの懐に入り正宗を袈裟がに振り下ろす

「ギャオウ」

ランポスはその場で崩れ落ちた

「四匹」

最後に残ったランポスが下がろうとしたとき

ドンドンドンドンドンドンドンドン

六発の弾丸がランポスに命中する

「ギャオオ」

ランポスは吹っ飛び沈黙した

「五匹！」

最後にマリアが大きな声で言う

「ふゝ、これで残すはドスランポスだけね」

ヒナギクがそう言う

「あのドスランポスはヒナギクさんの一撃を食らっていますからかなりのダメージを受けているはずですので、もう一撃ヒナギクさんの攻撃が当たれば終わるのではないですか？」

「マリアがそう言いながら弾丸をこめる」

「そうかもしれないね」

「ハヤテは少し笑いながらマリアの考えに同意する」

「マリアさん！私はそんなに強くありません！ハヤテ君も同意しないで！」

「ヒナギクが顔を少し赤くしながら二人の考えを否定する」

「すみません、でもヒナギクさんの一撃はランポスを一撃で倒せる威力があるので……」

「ハヤテが申し訳なさそうに言う」

「グルル……」

「三人がそんな会話をしているときにドスランポスは少し後ろに下がっていた」

「もう終わらせませすよハヤテ君！ヒナギクさん！」

「マリアが猟筒を構えて言った」

「わかりました」

「ハヤテがそう言いポーンブレイドを構える」

「そうですね」

「ヒナギクも正宗を構える」

「ギヤオオオ」

「ドスランポスは大きな咆哮を上げヒナギクに飛び掛かる」

「っ！」

「ヒナギクはドスランポスの攻撃を左に避ける」

「くられ！」

「ハヤテはドスランポスが着地した瞬間に大剣を振り下ろす
だが」

「！」

「ドスランポスは足が着いた瞬間にハヤテの攻撃を右に紙一重でかわす」

そこでヒナギクはドスランポスに正宗を袈裟がに振り下ろす
だがドスランポスは体をひねりかすった程度だった
そしてすぐさま後ろに下がった

「なかなかすばしっこいわね」

ヒナギクが少し悔しそうに言う

「ゲームではあそこまで身軽ではないんですけど」

ハヤテが不思議そうにドスランポスを見ている

ドスランポスはヒナギクに攻撃されたところに傷ができていた

(ドスランポスには部位破壊ないはずなのに…)

ハヤテは少し悩んでいた

「私がドスランポスの動きを止めますのでその隙に二人は攻撃をた
たき込んでください」

マリアの目が鋭くなる

「「わかりました」」

ハヤテとヒナギクは大きく返事をした

「ギャオオオ」

ドスランポスが三人に向かって迫ってくる

「二人ともドスランポスに向かってください」

「「わかりました」」

マリアの言うとうりにドスランポスに向かって走る

二人の間合いがギリギリで攻撃が届いたのを見計らい

ドンドンドンドンドンドンドンドン

マリアは残弾を全て放つ

その弾丸は全てドスランポスの足に命中した

「ギャオ?!」

ドスランポスは足で体が支えられなくなり前に倒れる

その瞬間に

「「くらえー！」」

二人はドスランポスを同時に切り上げた

「ギャオオオオ！」

ドスランポスそつ叫び高く宙に上がった

決着（後書き）

ナ「にしても、かなり遅かったよな今回」

ヒ「まあ、

確かにね」 マ「作者さんにもいろいろあるんじゃないですかね

」

ナ「それでも遅いものは遅い！だから

ら次はもっと早く更新しろ！」

ヒ「時間があったりする

人は出来たら評価・感想をお願いします作者さんがやる気をだす

元になるので」 マ「まあ、でもそれほど早くは更新されないと思

いますけど」

作「これからもよろしく願ひし

ますm()m

後始末（前書き）

前回の話では後書きがぐちゃぐちゃになってしまいました。すいませんでした。今度からきお付けますので本当にすいませんでした。では第八話をどうぞ

後始末

ドサツ

宙に上がったドスランポスが落ちてくる

「ギヤオ…オ…オ…」

ドスランポスはそれつきり動かなくなった

「やっと終わった」

ヒナギクは緊張の糸が切れその場に座り込んだ

「お嬢様ケガはありませんか？」

ハヤテはすぐにナギのもとに駆けつけ無事を確認する

「ああ大丈夫だハヤテ」

ナギは笑顔で返す

「それにしてもやっぱりハヤテは強いな見ていて改めてそう思ったよ」

ナギはうなずきながらそう言った

「ありがとうございますお嬢様ですが…」

ハヤテはうつむいてしまう

「?どうしたハヤテ」

ナギが心配そうに聞く

「お嬢様をあんな危険な目に合わせてしまいました…本当にすみません」

ハヤテがポロポロと涙を流しながらナギに謝る

「なっ！ハヤテいやあれは私のせいでもあったしハヤテがそんなに謝る事はない」ナギはハヤテが泣いている事に慌てながらもハヤテのせいではないと言うがが

「でも本当にすみません…すみません…」

それでもハヤテは謝るのをやめない

「いやいやもういいからハヤテ」

謝るのをやめないハヤテに戸惑うナギのところに

「もうそのくらいにしといてくださいなハヤテ君、ナギが困っていますよ」

そう言ったのはマリアだった

「マリアさん…ですが僕は…」

ハヤテはさらにつつむきまた泣きそうになる

「ハヤテ君！」

「！」

マリアからの強めな声にハヤテは驚いた

「ハヤテ君、ナギももう許してくれていきますしもついいんじゃないですか」

こんどはさつきと違い優しい声でハヤテに言った

「マリアさん…ですが」

ハヤテがそう言い掛けたとき

「ハヤテ！もう私がいいと言ったらもういいんだ！だからもう謝るな！」

ナギがハヤテに向かって叫んだ

「お嬢様…」 「私はハヤテが無事でいてくれればそれでいいから／

／／／」

ナギが照れながらハヤテに言った

「…わかりましたお嬢様」

ハヤテは元の笑顔に戻った

「やっぱりハヤテには笑顔が似合うぞ」

ナギもうれしそうに言う

「あの～ハヤテ君、ナギーっ聞いてもいいですか？」

マリアがハヤテとナギに質問する

「何ですかマリアさん？」

「何だマリア？」

「あの～これからどうするんですか？」

「「えっ！」」マリアからの意外な質問に二人は戸惑った

「これからですか…」

「これからか…」

る」

「はあ……」

ヒナギクはいきなりそんなことを言われたので意味がよく分かっていないようである。ナギはそれに気付いたがヒナギクなら別に問題ないだろうと思いきやそのままた話を続ける

「はぎ取りと言うのは倒したモンスターからその素材を取ることで、そこまでナギが説明した時

「あ、なんでそんな事をするの？」

そうヒナギクが質問した

「理由か？そんな事決まっている、その素材で新たに武器や防具を作るためだ」

「今の武器ではダメなんですか？」こんどはマリアが質問する

「全然ダメだ！今の武器では威力が無さすぎる、それに防具も無ければこれからは辛いはずだ」

ナギが今までより力強く言った

「でもまあヒナギクは今の武器でも大丈夫だろ」

「そうなの？」

ヒナギクが不思議そうに言った

「大丈夫だよなハヤテ」

「まあヒナギクさんの正宗は未知数ですから……大丈夫かもしれない」

「ふん」ハヤテの意見でヒナギクは少し納得したようである

「それではあのドスランポスもはぎ取るんですか？」

マリアがハヤテとナギに質問する

「そうだが……どうはぎ取ればいいのかからなのだ」

「そうなんですゲームでは勝手にはぎ取っていたので……」

うーんと四人は悩んでいたが

「とりあえずやってみない？」

というヒナギクの意見でとりあえずやってみることになった

「にしてもどうやるんだ……」ナギはドスランポスを遺体を目の前

にして戸惑っていた

「まあとりあえずやってみましょう」

ハヤテがそう言っただけで腰にあった短刀でドスランポスをはぎ取る
すると短刀で切ったのにもかかわらずドスランポスには傷一つつか
なかった

だが、なぜか地面にはドスランポスの鱗が落ちていた

「…一応はぎ取れたんですかね？」

ハヤテが苦笑いしながら三人に聞いた

「たぶん…そうだろう」

「はぎ取ったって言えばはぎ取ったんじゃない？」

「はぎ取ったと思いますよたぶん…」

三人はそれぞれ思ったことを言った

「だが、これなら誰でもできるんじゃないか？」

そう言いナギもやってみるやはり短刀で切ったのに傷一つつかなか
ったが、ハヤテと同じようにしてこんどは鋭い爪が落ちていた

「これは簡単だな」

そうしてナギはどんどんはぎ取っていった

「私達もやりましょうか？」

「そうですね」

そうしてヒナギクとマリアもはぎ取り始めた

だが、ナギが三回目をはぎ取ろうと短刀でドスランポスを切ったとき
「？」

いくらやっても、もう素材は落ちてこなかった

「この設定はしっかりしているんだな」

やや怒っているような口調で言った

「？」

ヒナギクとマリアはナギの言った意味が分からなかった

そして、ヒナギク、マリア、ハヤテも三回目からはぎ取れなくなった

「？なんで取れなくなったのハヤテ君？」

ヒナギクがハヤテに質問する

「あゝそれはですね、ゲームでははぎ取れる回数はモンスターごとに異なっているんですよ。ドスランポスは二回まではぎ取りができるので三回目は無理だった。なのでこの世界でもそうなのではないかと」
「なるほどね」

（だからナギはあんなことを言ったのね）

ヒナギクは一人で納得していた

「それではベースキャンプに戻りましょうか」

「そうだな」

「そうしましょう」

「そうですね」

そうしてハヤテ達はベースキャンプに戻っていった

後始末（後書き）

ナ「作者はあんなことを言っていたが…どうせこの後書きもぐちゃぐちゃになるだろ」

ヒ「まあそうかもしれないけど…」

ナ「そして、また更新も遅かったし何をやっている作者！」
マ「まあまあ

ナギ、作者さんにもいろいろあるんじゃないんですか？」

ナ「そんな事知るか！なので作者！次はもっと早く更新しろ！以上！」

帰路（前書き）

何とか早めに更新出来ました
出来たらこの
くらいのペースで書いていきたいです
では第九話です

帰路

ドスランポストとの戦いを終えハヤテ達はベースキャンプに戻っていた

「それでは村に戻りましょうか？」

「そうだな」

「そうね」

「そうですね」

三人がそれぞれ返答し、ハヤテは船の準備をし始める

「それにしてもハヤテ君はなんでもできるのね」

ヒナギクがハヤテに感心していると

「当たり前だ！ハヤテに出来ないことなんか有るわけ無いのだ！」

ナギが自慢気に言った

「まあそうかもしれませんね」

ハヤテを見ながらマリアが答えた

「まあ確かに……」

ヒナギクはいろいろと考えてみたが、結局『ハヤテに出来ないことは考え付かなかった
それから15分後

「準備が出来ましたー！」

浜辺で少しのんびりしていた三人を呼ぶ

「流石ハヤテ、準備が早いな」

ナギは笑顔で言った

「ありがとうございますお嬢様」

ナギにお礼を

言いそれから

「それでは皆さん乗ってください」

そうしてハヤテ達は密林を出た

船の上

ハヤテは帆の向きを直している

「ふ〜これであと一時間ぐらいで村に着きますよ」

ハヤテは笑顔で言った

「ハヤテはやっぱりすごいな…」

ナギがそう言うつと

「うん」

ヒナギクとマリアが同時に頷いた

「ありがとうございます」

ハヤテは先程よりも笑顔で言った

「うん、なんか疲れちゃたわね〜」

ヒナギクが両腕を上には伸ばして言った

「まあ初めてあんな戦闘をしましたからね」

マリアが苦笑いしながら言った

「は〜、それにしても…本当にナギキャラ（ナギの作ったキャラクターのこと）の言っていたようにゲームの世界にいるんですね」

ヒナギクは今までこの世界がゲームの世界だと完全に信じていなかった、きつと夢かなんかだろうと思っていた

だが、実際にランポス、ドスランポスと戦ったりした時に感じた殺気や疲れはまぎれもなく本物だった。

なのでヒナギクはこの世界が夢などでは無く、本当にゲームの世界だと確信したのである

「確かにそのようなんですよね…」

マリアもこの世界がゲームの世界だと信じていなかったが、ヒナギクと同じようにしてこの世界が本当にゲームの世界ということを実感したのである

「私達は元の世界に帰れますかね？」

ヒナギクが少し不安そうにマリアにきいた

「うん…確かナギキャラの言っていた事が本当ならミラルーツを倒せば戻れるはずですけど…」

「そういえばそうでしたね」

ヒナギクはさつきよりは明るく言った

「勝てますかね私達…」

ヒナギクがマリアにきいた

「それは分かりませんが、私達は勝たなければいけませんそして元の世界に帰るんです違いますか？」

マリアは力強く、そして最後は微笑んで言った

「そうですね！やるしかありませんよ！」

（なんで私あんなにくよくよしてたんだろう）

ヒナギクはいつものように力強く言った

「これから頑張りましょうマリアさん！」

「そうですね」

（よかった元のヒナギクさんに戻って）

マリアはいつものように微笑んでいた

ヒナギクとマリアがそんな会話をしていた時

ハヤテとナギは

「なあハヤテよ」

「何ですかお嬢様？」

「いや、前に話したミラルーツのことだが」

「ああ、その話ですか僕もいろいろ考えてみましたがやはりコッコックエストをクリアしていくしかないと思うのですが」

ハヤテがそう言うとなぎは

「いやいやハヤテ、私にいい考えがあるぞ！」

ナギは自信満々に言った

「すごい自信ですねお嬢様それで、その考えとは何ですか？」

「それはな……」

ナギはハヤテに耳打ちした

「……それはうまくいくのでしょうか？」

ハヤテがとても不安そうになぎに尋ねる

「わからん！だが、やってみなければわからんだろう！」

ナギが大声で言った

「それもそうですね」

ハヤテは笑顔で言った

「そうだろう」

またナギが自信満々に言った

それから約1時間後ハヤテ達は村に着いた。

日は沈みかけ空は赤く染まっていた

帰路（後書き）

ナ「今回はわりと早かったな」

マ「そうですね」

ナ「というかいつも遅すぎなのだ！」

ヒ「なんか前にも話した気がするけど事情が有るんじゃない？」

ナ「確かに

前にも話したな…でもまあよく挫折しないで書いたな」

マ「好きでやっているからじゃない

ですか？」

ナ「それでもまあよく

続けてるよということまで作者、挫折しないように！」

交渉（前書き）

更新遅れました。すいません
付けますのでこれからもよろしく願います

今度こそ気を

交渉

ハヤテ達は村に着いた

「ん〜やつと着いた〜」

ナギが腕を上げながら船を降りたそれに続いてヒナギク、マリアも船から降りる

「少し待っていてください」

ハヤテは帆をたたんだりして船を止める準備をしている

10分後…

「それでは行きましょうか」

そうしてハヤテ達は村の中心に向かった

村

「おや、戻ってきたようだね」

村長がハヤテ達に気付いた

「ドスランポスは倒せたかい？」

村長がきくと

「当たり前だ！私たちがあんなのに負けるわけないだろう！」

ナギが大声で言いドスランポスの素材を見せる

「ふむ…確かにそうだね、それじゃあ報酬金だよ」

そう言つてナギに小さな革袋を渡した

「これからもコツコツ頑張っていくんだよ」

村長は笑顔で言った

だが

「なあ村長よ話があるんだが…」

ナギが真剣な顔で言った

「なんだい？」

村長もそれにつられ真剣な顔になる

「私達をミラルーツと戦わせてくれ！」

「！」

ナギの言葉に村長は驚きを隠せなかった

「…ミラルーツとは祖龍の事かい？」

この世界ではあまりミラルーツとは呼ばれずに祖龍と呼ぶことの方が多いのである

「ああそうだ」

「無理だよあんた達にはまだ早すぎるよ」

先程よりも真剣な顔で言った

「それでも私達は戦わなくちゃいけないんだ！」

ナギも一歩も退かずに言った

「だがねえ…」

「僕からもお願いします！僕達は出来るだけ早くミラルーツと戦いたいんです！だからお願いします！」

ハヤテが頭を下げて村長に頼む

「だが…」

「私達からもお願いします！」

ヒナギクとマリアも頭を下げて村長に頼む

「……………」

「お願いだ！」

ナギも頭を下げる

「……ふう分かったよ出来るだけ早くミラルーツと戦えるようにしてみるよ」

「えっ！…本当か！」

信じられないといった表情でナギが言った

「ああ、おまえさんたちには負けたよ」

「や…や…やったー！やったぞハヤテ！」

「やりましたね！お嬢様！」

ナギとハヤテは喜びに満ちあふれていた

「なんだかよく分からないけど良かったんですよねマリアさん」

「そうだと思いますよ。あんなに二人が喜んでるんですから」

「そうですね」

ヒナギクとマリアは二人を見て笑っていた

「だがね、一つ条件があるよ」村長が鋭い声で言った

「なんだそれは？」

ナギもその声で真剣な顔になる

「確かに出来るだけ早くミラルーツと戦えるようにすると言ったが、おまえさん達が弱いことは変わらないだろう？だから実力をつけ装備を整えるために…」

「…「…「…「…「…「…「…「…」

四人は同時に言った

「わしがこれから出す七つのクエストをクリアしたら出来るだけ早くミラルーツと戦えるようにしよう」

「…「…「…「…」

村長の意外な言葉に四人は驚いた

（…なんだたつた七つでいいのか）

ハヤテとナギはこのゲームのことを知っているので『七つのクエストをクリアしたらミラルーツ』というのがすごく楽だというように思ったが、ヒナギクとマリアは…

（…あと七回も戦わなきゃいけないのか）んですか）

とちよつとシヨツクだったこの『七つクリアしたらミラルーツ』がどんなに楽か知らないのだから

モンハンをやった事がある人ならこの楽さが分かるだろう

「ああ、そんなことなら全然OKだ！」

ナギは大声で言った

「それと、一回でも失敗したらこの話はなしだからね」

村長が冷ややかに言った

「私達が失敗する分けないだろう。なっ、ハヤテ！」

ナギがハヤテの方を見る

「そうですねお嬢様」

ハヤテは笑顔で言った

「それじゃあ明日また来なさい。一つ目のクエストを出すからね」

「ああ、分かったそれじゃあな」

「それではさようなら」

「さようなら」

「さようなら村長さん」

「ああ、さようなら」

そうしてハヤテ達は村長と別れ家に向かった

その帰り道

「それにしても、まさか本当にうまくいくとは…」

ナギはまだ信じられないな〜という感じだった

「確かにそうですね。ですがなんでもそのような方法を思いついたの

ですかお嬢様？」

そういうとナギは

「いや、だって、この世界はゲームの世界ではありえないことが起

きているだろう？だからなんとかなるかもしれない！と思ったんだ

よ」

「なるほど」

(確かにそうだ、この世界は何かおかしい…)

それはハヤテも感じていたランポスが一度に二十匹ぐらい出たり、

日が傾いたり、ヒナギクさんの話ではランポスが逃げ、その足跡を

たどってきたりということが起きているからである

「だが…」

「だが何ですか？」

「ああ、どうしてゲームではありえないことが起きているのか分からないんだよ」

「確かにそうですね…お嬢様のキャラによってゲームの世界に連れてこられたのに…」

その時

「なんだそんなことも分からないのか？」

「……！」

四人が振り向いた先にいたのはナギキャラだった

「なぜおまえがここにいる！」

ナギが強く言うと

「まあまあ落ち着け、別に私はおまえたちの様子を見に来ただけだ」

「…それでなぜこのありえないことが起きているのか言ってもらおう、お前はその原因を知っているんだらう！」

そう問い詰めると

「ああ、いいぞ別に隠すことでもないからな」

そうしてナギキャラはしゃべり始めた

「それはお前達がこの世界に来たからだ！」

「……！」

「……！」

「……？」

ハヤテとナギは驚いていたがヒナギクとマリアはありえないこと自体分かっていないので首を傾げている

まあ分かっていないのだから当たり前だろう

「なぜ私達が来たのが原因なのだ！」

「それはお前達が現実世界の住人だからだ」

「それが何の関係があるんですか」

今度はハヤテがきくナギとは違い冷静である

「ここは元々ゲームの世界だそこに私がお前達現実世界の住人を連れてきた、だからこの世界にバグが発生したのだ」

「バグだと？」

「ああそうだ、お前達が言っている『ありえないこと』のことだそれは現実世界とこのゲームの世界が少し混ざってしまったのだ」
「なるほどな」

ナギ素直にナギキャラの言ったことを信じたハヤテもそうである

(確かにそれならつじつまが合う)

ハヤテはそう思った何故ならその『ありえないこと』は確かにゲームの世界ではそうだが現実世界では有り得る事だからである

動物が集団で狩りをしたり、命の危機が迫ったら逃げ出したり足跡が残ったり、日が沈んだりと普通の事だからである

「私が知っているのはこのくらいだ。頑張ってくれよミラールツを倒すのをな」

そう言つてナギキャラは去つていった

「言われなくてもやつてやるさ！」

ナギはナギキャラの背中にむかつてそう叫んだ

交渉（後書き）

ナ「十話目だー！」

マ「それにしてもやっと二桁まで話が

出来たんですね〜」

ナ「いや〜私はてつきり

二桁いく前に挫折するかと思ってたよ」

ヒ「でもま

あよく続いて良かったじゃない」

ナ「それがよくもない」

ヒ「なんで？」

ナ「だって、この話進の遅くね！」

ヒ「そうなの？」

ナ「だってそうじゃ

ね？二桁いったのにまだ一体しか大物と呼べるものを倒してないじ

ゃん！」

ヒ「確かに……」

マ「このままだと

かなりの話数になりそうですね」 ナ「挫折するな以上！」

集会場（前書き）

更新かなり遅くなってすいません
これからな
るべく早くしようと思います
今回はなんかぐだぐだして
いて無駄に長いと思います
がよろしく願います
前回の後書き
もぐちゃぐちゃになってすいません

集会場

空はもう暗くなりかけていた

「まさか現実世界と混ざっていたとわな」

「そうですね」

「そんなにゲームと違うの？」

ヒナギクがハヤテとナギに質問する。マリアもそれにうんうんと頷く

「そんなに大きな違いはないが……うん、まあゲームを知らないヒ

ナギクとマリアにはあんまり関係ないと思うぞ」

「ふん、じゃあ大丈夫か」

その時

く~~~~

「……／／／／」

ナギが顔を赤らめていた

「あの、お嬢様？」

「べ、別にお腹などすいていないのだ！」

「まあずつと何も食べていませんでしたかね」

「だ〜か〜ら〜！」

またその時

く~~~~

「……／／／／」

今度はヒナギクが顔を赤らめている

「何か食べましょうか？」

「「うん」

「はい」

ナギとヒナギクは小さくマリアは普通に返事をした

「ですが何処で食べましょう？」

それはそうである最初は家で何か作ろうと思ったが、家にならなくても食材ないので買い出しから始めると大変時間がかかるのでやめた、それにまだキッチンも確認していないので

「うーん…てかゲームにそんなとこあつたっけ？」

「……………」

「あの…あの大きな建物は駄目なんですか？なにか食べ物のような匂いがするんですけど」

マリアが言った建物を見る

「集会場か…」

「確かに有りそうですね」

「ゲームではお酒とか飲めたしな」

「それでは行きましょうか」

「ああ」「ええ」

「はい」

三人はそれぞれ返事をした

そうしてハヤテ達は集会場に行った

集会場

「うわ…たくさん人がいる…そしてうるさい…」

あからさまにいやな顔をしてナギが言った

ナギは人がたくさんいるところがあまり好きではない

「そうですね」

ハヤテがそう言う

「でも本当たくさんいるわね」

辺りの人は酒をガンガン飲んでいたり、ばか笑いしたりしていて騒がしいそしてほとんどの席が埋まっている

「うーん、空いている席は…あっ、あの奥の席が空いていますよ」
マリアが指を差して場所を教える

「あ、本当ですね。それでは行きましょう」
そうしてハヤテ達が席に座る
ちなみに席順は

ハヤテ ヒナギク

ナギ マリア

と座っている

そしてに座ったとき

「ご注文は何にしますか？」

髪の色は赤く短い16歳ぐらいの女性の店員が聞いてきた

（（（早！）））

四人はそう思った

なんせ席に着いた瞬間と言ってもいいくらいに聞いてきたからである

「え〜っと……」

そう言っつてメニューを見るが

「……………」

メニューの紹介

ドスランポスの煮付け

ガノトトスの刺身

リオレウスのステーキ

ガレオスの肝

モスの角煮

アオキノコとマヒダケのソテー

などなど

「ハヤテ…どれがおいしいのだ？」

「いや、そんなことを言われましても…」

どれがおいしいのかなんて分かる訳もないゲームでは存在しないのだから

当たり前だがヒナギクとマリアもよく分からないのかようである

(うーん、どうしようこのまま黙っている訳にもいかないし…ん？)

ハヤテはあることに気付いた

(このメニュー、値段が書いてない…)

ハヤテはお金のことにはとても敏感になるので気付いたが、ヒナギクはメニューの料理のことを考えているようで気付いていない、ナギとマリアはそんな料理の値段など気にする訳もない

(ん…どうしよう僕以外誰も気付いてないみたいだし…)

「あの…迷っているようならこちらのオススメで決めますが、よろしいですか？」

店員がそうきくと

「うーん、そうしてもらうのがいいんじゃない？どんな料理が分からないんだし」

「まあ確かにそうかもな」

「そうですね」

ヒナギクの言う事にナギとマリアも賛成する

「あの…すみません」

「はい何でしょう？」

「料理の値段は？」

ハヤテがおそろおそろきいた

「えっ?!あなた達ハンターですよね？」

「あ、はい、そうですね」

「じゃあこの料理は全部無料ですよ」

「え！そうなんですか！」

ハヤテは思わず声が大きくなる

「はい、ここはハンターギルドの支援を受けているのでハンターさん達には無料で料理を出すんですよ。この村も守ってくれてますしね」

笑顔で店員が言った

「そうだったんですか」「それではオススメを頼む店員よ」

ナギがそう言つと

「わかりました〜少々お待ちください」

店員はそう言つて集会場の奥に行った

「なあハヤテ」

「何ですかお嬢様？」

「これから毎日朝昼晩ここで食べるのか？」

いやーな顔をしてナギが言った

「えーと…どうしましょうマリアさん」「うーん、まあそれはこの料理を食べてからでもいいんじゃないですか？」

「…じゃあ、そうする」

ナギがそう言つたとき

「おまたせしましたー！」

とても元気な声でいった

「料理ができるのも早いな…」

「」「うん…」「」

ナギの言葉に全員がうなずいた

「ここは『早さ』が売りですから」

店員が自慢げに言つ

そうして手際よく料理を並べていく

「いい匂いですね」

「味もおいしいですよ」

そうして五品全てを並び終え

「それではごゆっくりー、と言いたいんですが空いている席に座っていいですか？」

「……え？」「……」

予想外の質問に四人は驚いた

「あの～お仕事の方は？」

ハヤテがそうきくと

「ん～、まあ今からお客さんが来ることはあんまり無いので少し暇になるんですよ」

「はあ」

「なら別にいいんじゃない？」

「そうだな」

「……そうですね」

ヒナギクの意見に全員賛成する

「それじゃ失礼します」

店員はヒナギクの隣に座る

「それではいただきます」

「……いただきます」「……」

そう言って料理を食べる

「……」

「これおいしいな……」

「本当おいしい」

「あ～、それはドスランポスの煮付けです」

「うーん、ドスランポスってこんなにおいしかったのか」

そう言いながらパクパク料理を食べる

「結構楽に手に入るし、調理も簡単で便利なんですよ」

店員が笑いながら言う

「そういえば、お前は何て名前なのだ？」

ナギがそうきく

「まだ名前言ってますませんでしたっけ？私はレナと言います」

「私は三千院ナギだ」

「私は桂ヒナギクよろしくね」

「マリアと言います」

「僕は綾崎ハヤテです」

四人がそれぞれ名前を言う

「ナギさんにヒナギクさん、マリアさんハヤテさんですね」

「お前はいままでに会った客の名前をすべて覚えているのか？」

ナギが質問する

「うーんとですね、すべてとはいえませんがだいたいは覚えてますかね」

「ふーん」

「私からも質問いいですか？」

「何だ？」

「皆さんは何か目標とかあるんですか？」

「目標か？そんなこと決まっている、それは」

「それは？」

レナが興味津々にきく

「それは…ミラルーツを倒すことだ！！」

ナギが大声で言った

「ミラルーツってあの祖龍のことですか？」

レナは驚いていた

「ああそうだ」

ナギが

「皆さんもそうなんですか？」

「はいそうです」

「ええ、そうよ」

「そうですよ」

三人はまよわずに言った

「本気で倒すつもりなんですか？」

改めてレナが尋ねる

「ああ本気だ」

ナギが真剣な顔をして答える

「くっ、くくくっ、あーっはっはははは！」

「くくく！」

突然レナが笑いだしハヤテ達はびっくりした

そしてナギが尋ねる

「何がおかしいのだ！」

ナギの真剣な声でレナは笑うのをやめる

「いや〜ゴメンゴメン、まさかそんなことを言うとは思わなくて」

「そんなに変なんですか？」

ヒナギクが不思議そうに尋ねる

「いやいや変と言うよりスゴい目標だな〜と思ったただだよ〜だっ
ていままでに会ったお客さんは目標というよりは夢だって言っ
てたから」

レナが笑顔で言う

「そんなに強いんですかミラルーツって…」

ヒナギクがやや不安そうに尋ねる

「そりゃもう強いなのって、モンスターの中で一番強いとも言
われるくらいだからねー」

レナは相変わらず笑顔で答える

一方ヒナギクはため息をついた

（やっぱり楽な相手じゃないか）

やや顔が憂鬱になる

だがマリアは

（まあナギがあんなにてこずっていましたがからね〜）

とだいたい強さを把握していたようであり表情は変わらなかった

「あつもうそろそろ仕事に戻らなきゃいけないんで失礼しますね〜」

そう言っレナは席を立つ

「いろいろありがとうな」

「どういたしましてーそれではこれから頑張ってくださいー！」

そう言つてレナは店の奥に行つた

「それにしても、ミラルーツつてそんな強かつたのね…」

「はあ、とため息をついて言つた

「まあな、あいつはゲーム終盤で戦えるやつだからな」

ナギが料理を食べながら言う

「でも、倒せ無い敵ではないですから」

ハヤテが苦笑いをして言つた

「まあでも、まだまだ先の話だな」

とナギが言つた

「ですけどそのミラルーツと戦つまでも大変ですよね？」

マリアがナギに質問する

「まあそうだな、だがそこらへんは村長がかなり楽しんでくれたからなんとかなるはずだ！」

ナギが断言する

「そうですね、それではハヤテ君はどう思いますか」

「僕もそう思います、ですがそれでもけっこう辛いと思います…」

「そうですね」

マリアがそう言う

「でも、クリア出来ないわけではないんですよ？」

マリアが笑顔でハヤテにきく

「はいそうですね！」

ハヤテは元気よくこたえた

「それじゃ明日も頑張ろう！」

「……おー！」

ハヤテ達は目標を確認し一致団結した

それからハヤテ達は料理を全て食べ集会場を出た

集会場（後書き）

ナ「やっと更新したー！」ヒ「長かったわね」

ナ「本当っそ

うだ！もっとやる気をだせ！やる気を！」

マ「今回は本当そうですね」

ヒ「はあなん

か次もなりそう……」

マ「確かにそうですね」

ナ「作者ああ！次は絶対にこうなるな！以上！」

夜（前書き）

更新遅れてすいませんでした

そして、もう

更新をもっと早くすると書いても多分実現するのは不可能です

努力はしているのですが……

ですが更新が

遅くてもちゃんと続けていくのでこれからもよろしくお願いします

夜

集会場を出たハヤテに真つすぐに家に帰った

家

「疲れた〜……ふぁ」

ナギが欠伸して言った

「あのお嬢様今日はもう寝ますか？」

ハヤテがナギにそうきく

「…ああそうする」

ナギが目を擦りながら言った

「と言うか、ベットはどこだ？」

ナギがハヤテに質問する

「どこってあそこにとって……あれ？」

そう、この部屋にはベットはなかった、ゲームでは入って最初の部屋にあるのだが

「あの奥の部屋にはないの？」

ヒナギクがハヤテに尋ねる

「奥の部屋ですか」

とりあえずハヤテ達は奥の部屋に向かった

「？ゲームとちがくないかハヤテ？」

「確かに違いますよね」

ハヤテ達は奥の部屋に向かったがそこに部屋はなく廊下があった。

そして右と左にドアがあった

「んじゃまず右からな」

そう言つてナギがドアを開ける

そこにはベットが二つ並んであったそしてクローゼットなどの家具

があった

「って二つしかないではないか！」

ナギは大声で言った

「それでは左はどうでしょうか」

マリアがドアを開ける

「あら」

そこにも右の部屋と同じく二つ並んでベッドがありクローゼットなどの家具も一緒に

「ナギこっちも同じような部屋ですよ」

マリアがナギに言うと

「そうか…それではまた二組にわかるしかないな」

ナギがそう言うと

「それじゃまたグツパで」

ヒナギクが透かさず言う

ナギに考える暇を与えないためである

「…まあそうするか」

ナギが言うと

(よし！)

ヒナギクは心の中でガッツポーズをした

「んじゃ、グツパでわかれま…」

「」「」「しよ！」「」「」

結果

パー

ハヤテ

ヒナギク

グー

ナギ

マリア

(やったー！ハヤテ君と一緒にだ！)

ヒナギクは心の中で叫んだ前に一緒になれなかったのでなおさらうれしいのである

一方…

「なぜだあああ！なぜハヤテと一緒にではないのだああ！」

ナギはハヤテと一緒になれなくてわめいていた

またきつと一緒になるだろう

そう思っていたからである

「くそ！こんなの無効だ！もう一度やり直しだ！」

「そんなのダメに決まってるでしょ！」

「ナギ、あなたもちゃんとこのルールを認めただからわがまま言わないの」

「うっ……わかったよ、だけど明日、またやるぞ！」

「はあ、わかったわよ」

「わかりました」

「はあ…」

(今度こそハヤテと一緒にになるのだ！)

(またハヤテ君と一緒にの部屋になるんだから！)

(がんばってくださいね)

(なぜお嬢様とヒナギクさんはあんなに燃えているんだろう…?)
ということと部屋割り(仮)が決まった

だがやはりナギはまだ完全に納得してはいないようではあるが

「んじゃ、私はもう疲れたので寝る」

そう言つてナギは右の部屋に入つて行つた

「それじゃあ私も寝ますが…」

そしてマリアがハヤテをにらみ

「ハヤテ君に限つてそんなことはないと思いますが、ヒナギクさんにくれぐれも何もしないように！」

強い声でハヤテに言う

「そそそんな、何かするわけ無いじゃないですか、」

「ま、それもそうですわね、でもわかつてますね？」

「わかつてますつて」

「それではおやすみなさい」

「おやすみなさい」

「おやすみなさいマリアさん」

そうしてマリアも右の部屋に入つて行つた

「それじゃあ僕達も寝ますか？」

「うん」

ヒナギクは元気よく返事をした

そして二人は左の部屋に入つて行つた

左の部屋

「ふう、やつぱり今日は疲れたわね」

ベットに座つてヒナギクが言つた

「そうですね」

ハヤテももう一つのベットに座つて言つた

「それではもう寝ますか？」

「うーん、じゃあそうするわ」

そうしてハヤテが電気を消し二人は武器をベットの横に置き、それぞれのベットに入った

そこから沈黙

(うーん、せつかくふたりっきりになったのに…何を話せばいいのかわかんないよ)

ヒナギクはとにかく緊張していた。まあそれもそうである好きな人と二人つきりなのだから

(そうだ、前から気になっていたことをきこう)そして

「ハヤテ君まだ起きてる？」

「はい、起きてますよ。何ですかヒナギクさん？」「えっと…その…ハヤテ君で好きな人とかっているの？」

ヒナギクが顔を赤くして言った

「えっ！好きな人ですか？」

「そう…」

「好きな人というかまだ僕には人とお付き合いする資格が無いというか…」

「そうじゃなくて！」

「！」

「ただハヤテ君が純粹に好きな人がいるかきいてるの！」
ヒナギクが大きな声で言った

「…なら、僕には好きな人はいません」

「そう…なんだ…」

(なんかちよつと残念でちよつと安心したな)

「でも何でそんなことを聞くんですか？」

やはりヒナギクの気持ちには全く気付いていない流石はハヤテである
「何でってそれは…な、何でもいいでしょ何でも！／／／／」

顔を赤くして言った

「は、はいわかりました」

「そ、それじゃおやすみハヤテ君／／／」

「おやすみなさいヒナギクさん」

(なんかいい夢が見られそう)

(何でヒナギクさんはあんなことを聞いたんだろっ?)
そうして二人は眠りについた

夜（後書き）

ナ「前回の話で『ナギが』で終わっていたがあれは『ナギが自慢気に言った』だそうだ」

ヒ「てか、なぜ後書きでこ

のことを言うの？」

ナ「ん？ああそれはな、後書きでなにを書けばいいのかわからなくなったからだそうだ、ああそれと本当にすいませんだってさ」

マ「もっとしっかりしてほしいですね」

ナ「ということで作者、もっとしっかりそして、更新も出来るだけ早くするように以上！」

朝（前書き）

なんとか少し早めに更新出来ました。これでも遅いと思いますが

これでも限界です

次は多分いつものようにか

なり遅くなると思います。すみません

この話も結構

短いです、すみません

では第十三話です

朝

「うん…」

ヒナギクが起きると

「ヒナギクさん」

「うわ！」

目の前にはハヤテの顔があった

そして思わず体がベットから起きる

「ハ、ハヤテ君?! / / /」

「実はヒナギクさんに言わなければいけないことがあるんです!」

ハヤテが真剣な声で言う

「な、何ハヤテ君？」

「昨日僕は好きな人はいませんと言いました、ですが本当はヒナギクさんあなたが好きです!」

「え! 本当?」

「本当です! あ、でもすいません…迷惑ですよ…」

ハヤテが顔を俯かせる

「そ、そんなことないわ! だって、私も…ハ…ハヤテ君のことが…好きだから! / / / /」

顔を真っ赤にしてヒナギクが言った

「本当ですか?」

「嘘でこんなことを言うわけ無いでしょ!」

「ありがとうございます!」

その言葉を言うのと同時にハヤテがヒナギクを抱き締める

「ちょ、ちょっとハヤテ君 / / / /」

もうこれ以上無いぐらいヒナギクは顔を真っ赤にしていた

「本当にありがとうございます」

そう言ってハヤテはヒナギクから少し離れる

そして

「愛していますヒナギクさん」

そう言っつてヒナギクの唇に唇を重ねようとする

「ハ、ハヤテ君／＼／＼／」

（ハヤテ君つてこんな積極的だったんだ…）

そうして二人の唇が重なる瞬間…

「はっ！」

ヒナギクは目が覚めたそしてベットから起きる

「はあ」

（なんだ夢だったのか…）

ヒナギクが落ち込んでいると

「あっヒナギクさんおはようございます」

笑顔でハヤテが言った

「おはようハヤテ君」

ヒナギクが挨拶を返す

「さっきため息をついていましたがどうかしたんですか？」

「えっ！いやそれはその／＼」

ヒナギクの顔が赤くなる

まさか『ハヤテ君とのキスが夢だったから』などとは言えるわけ無いからである

「別にいいでしょそんなこと！／＼」

「はあ、わかりました」

（またなんかまずいことを言ったのか僕は…）

ハヤテはそのあと少し悩んだ、がまあハヤテが分かる訳もないのだが

「それでは僕はお嬢様が起きたか確認しに行きますね」

「うん、わかったわ」

そうしてハヤテは部屋を出た

そしてドアをノックする

コン コン

「おはようございますマリアさん。お嬢様は起きましたか？」

ハヤテがそうきくと

「あっハヤテ君おはようございます、ナギはまだ起きていないので起きたら知らせに行くので少し待っていてください」

マリアがそういった

「そうですかわかりました」

そう言っつてハヤテは部屋に戻った

「ヒナギクさん、まだお嬢様は寝ているそうなのでここで少し待つ

ことになりました」

「やっぱりナギはまだ寝ているのね」

ヒナギクは呆れた顔で言った

「すみません」ハヤテが申し訳ない顔をする

「別にハヤテ君が謝る必要は無いわよ」

「ありがとうございます。そういえばヒナギクさんは好きな人はいるんですか？」

「ええ！な、何でそんなことをきくの？」

ヒナギクは驚いた

まさかハヤテがそんなことをきくとは思わなかったからである

「いや、昨日僕に聞いてきたのでヒナギクはどうなんだろうと思っただけ」

「そ、そう…ええつと…」

(ここは『ハヤテ君が好き！』って言った方が…でも…)

そうしてヒナギクは

「好きな人は…いるわよ……」

ヒナギクはボソツと言った

「えっ何て言っただけですか？」

ハヤテには聞こえなかつたらしい

「別にもう言っただけじゃないでしょ？ハヤテ君が聞こえなかつたのがいけないよ」

「はあ、わかりました」

(いつか絶対気付いてもらうんだから！)

ヒナギクは改めて決意を固めた

その時

コン コン

「ハヤテ君ナギが起きたので行きますよ」「わかりました。では行きましょうヒナギクさん」

「ええ」

そうして二人は部屋を出た

朝（後書き）

ナ「一応今回はがんばったか？」

マ「まあいつ

もよりは早いですからね」

ナ「そんなことより！なぜ

今回私が出ていないのー！ヒナギクばかりではないか！」

ヒ「はあ」

マ「ずっと寝ているのがい

けないんじゃないんですかナギ？」

ナ「うっ…」

マ「次からはもう少し早く起きてくださいね？」

ナ「…わかったよ」

ヒ「なんかもう私関係ないような…それ

じゃあ次回もよろしくお願いします」 ナ「締めまでとるな！」

準備（前書き）

前回の話のハヤテのセリフで「ヒナギク」と呼び捨てにしているところがあり本当にすいませんでした。次からはもっと慎重にやるので

早く更新しました

今回はがんばろうと思ったのでなるべく早く更新しました
では14話です

準備

部屋を出たハヤテとヒナギクはナギとマリアに会った

「おはようございますお嬢様、マリアさん」

「おはようナギ、マリアさん」

「ん？ああ、おはようハヤテ、ヒナギク」

「おはようございますハヤテ君、ヒナギクさん」

四人はそれぞれ挨拶した

ナギはまだ寝呆けているが

ちなみに武器は部屋に置いてある

理由は食事に行くだけなので持つていく必要が無いからだ

「それでは行きましょうか」

ハヤテがそう言い集会場に向かった

集会場

昨日よりもお客さんが少なかった。理由は簡単である

朝食の時間には遅かったからだ

ナギが遅く起きるのは当たり前だが、今日は珍しくヒナギクが遅かったからである

「私は人が少ないほうがいいからな」

ナギは昨日来たときよりは機嫌が良かった

「それでは座りましょうか」

そしてハヤテ達は席に座った

座席は前回と同じ

そして

「ご注文はなんですか？」長い黒髪の女性の店員がきた

「相変わらず早いな」
「あら？今日はレナさんはいないんですか？」
マリアが店員にきく
「ああ、レナは基本的に夜しかいませんよ」
「そうなんですか」
「はい、それでご注文はどうしますか？」
「どうする？」
ナギがきく
「またおまかせでいいんじゃない？」
ヒナギクがそう答えた
「「そうですね」「」
「そうだな」
「それじゃ、おまかせをお願いします」
「わかりました」
そして店員は店の奥に行った
「今日は村長のクエストの一回目か」
「でも最初だからそんなには辛くないわよね？」
ヒナギクがナギに尋ねる
「多分な、だが絶対昨日のドスランポスよりは強いぞ」
ナギが断言する
「でもハヤテ君がいますからまた大丈夫ですよヒナギクさん」
マリアが優しい声で言った
「そうですね」
ヒナギクがそう言ったとき
「お待たせしました！」
元気な声で言った
そしてテーブルに料理を並べていく
そして料理を並べ終え
「それではごゆっくり」
そう言って店員は店の奥に行った

そして

「……いただきます」「」

ハヤテ達は料理を食べ始めた

「やはり旨いなここの料理は」

「やっぱり食材が良いんですね……」

「普通存在しないものだからな」

「それもそうですね」

マリアは納得したようだ

「なあハヤテ」

「なんですかお嬢様？」

「いや……昨日ヒナギクと何んあつたか？」

ナギは低い声でハヤテに言った

「な、何言っているんですかお嬢様、何もありませんよ何も！」

ハヤテは全力で否定した

「ふーん、まあ良い」

（まっハヤテがヒナギクに何かする分けないか）

ナギはそう思った

（ふう何とか機嫌をそこねなかったぞ）ハヤテは安堵していた

それからハヤテは料理を食べ終え集会場を出た

家

家に着いたハヤテ達はナギの部屋（仮）に行った

「それじゃこれから村長のところに行くか」

ナギが言った

「それじゃ五分後玄関に集合で」

「わかりました」「」

そしてハヤテとヒナギクはハヤテ、ヒナギクの部屋（仮）に戻った

ナギ・マリア

「今回はちゃんと忘れないようにしないといけませんね」

「そう言いマリアは通常弾Lv1を取る」

「準備と言つても…特に無いな」

ナギは片手剣なのでボウガンのような準備がないのである

「そうなんですか？」

「そうなのだゲームなら少しはあるのだが」

ナギがそう言った

「今回もクリアしましょうねナギ」

笑顔でマリアが言った

「そうだなマリア」

ナギも笑顔で返す

「それでは行きましょう」

「」

ナギとマリアは部屋を出た

ハヤテ・ヒナギク

「ねえハヤテ君」

「何ですかヒナギクさん」

「ハヤテ君は何でこの武器にしたの？」

「特に理由はありませんが…攻撃力が高いからですかね」そうハヤテは言った

「ふ〜んでもハヤテ君なら素手とかでも倒しちゃいそうだけど」

「それはいくら何でも無理ですよ」

「冗談よ冗談、それじゃ行きましょハヤテ君」

「はいヒナギクさん」

そうしてハヤテとヒナギクも部屋を出た

玄関

「そろつたな、それじゃ行こう！」
そしてハヤテ達は村長のところに向かった

村長

「おや、来たねおまえさん達」
「ああ、それで今回のクエストはなんだ？」
「今回は一回目だからねイヤンクックだよ」
「イヤンクックか…」
「少しきついかもしれませんがね」
「そうだな」
ハヤテとナギがそんな会話をしていたとき
マリアとヒナギクは
「「イヤンクック？」」
と首を傾げていた
「それで場所はどこなのだ？」
「今回も密林だよ」
村長がそう言ったとき
「ナギ、またなんだけどイヤンクックって何？」
ヒナギクが質問する
分からないままでは嫌なので
「ああ、それは移動しているときに話す」
ナギが言った

「それじゃクエストがんばるんだよ」

村長が優しく言った

「それじゃ行くぞハヤテ、マリア、ヒナギク！」

「はいお嬢様！」

「そうですねナギ」

「ええ」

そうしてハヤテ達は密林に向かった

準備（後書き）

ナ「今回、早いな…」 マ「そうですね」 ナ「でも
最初の頃の方が早かったんだよな」 ヒ「時間が無いから
じゃない」 ナ「いや絶対ある！断言できる
！」 マ「ま、出来るだけこのペースを守ってほ
しいですね〜」 ヒ「でも、それは無理な気
が…」 ナ「ということとで作者！これからもこ
のペースで更新するように！以上！」 ヒ「感想・評価もお願い
します」

イヤンクック（前書き）

前回は誤字が多くすいません

え〜と話が変

わかりますがアニメ『ハヤテのごとく！』自分的には原作どつりにや
っている二期の方が好きなのですが、小さなボケ等がカットされて
いて残念ですそういうところも出来ればちゃんとやってほしいです

それでは一五話です

イヤンクツク

村長にイヤンクツク討伐をうけたハヤテ達は密林に向かうため船の中にいた

船の中

「それでナギ、イヤンクツクって何？」

ヒナギクが早速ナギにきいた

うんうんとマリアもうなずく

「そういえばそういう約束だったな」

コホンと咳払いをし、ナギは説明し始めた

「イヤンクツクというのは全身が赤い鱗に覆われている大きな鳥みたいなのやつで耳が襟巻きみたいになっている、大きさをいえば昨日のドスランポスの二〜三倍ぐらいはあるはずだ」

「ふーん、だいたいわかったわ。ありがとうございますナギ」

「ありがとうございますナギ」

二人はナギにお礼を言った

「ああ。まあでも、見れば一目で分かるよ絶対な」

ナギは自信満々に言った

「そうなの？」

「そつだ絶対わかる」

そんな会話をしていると

「お嬢様密林が見えてきましたよ」

ハヤテが指を差して言った

「よし！絶対イヤンクツクを倒すぞ！」

「はい！」

「そつですね」

「ええ」
ナギの言葉に三人はそれぞれ応た
そしてハヤテ達は密林についた

密林

「相変わらず生い茂っているな……」
「まあそんな急に変わりませんよ。それに一応ゲームの世界ですし」
「それもそうだな」
ナギとハヤテがそんな会話をしていると
「ねえナギ」
「なんだヒナギク？」
「今回も二班に別れて行動するの？」
ヒナギクにとつてこの事は重要であった
ハヤテとふたりつきりになれるチャンスだからだ
当然だがヒナギクは二班に別れることを期待していた
「うーん……どうするハヤテ？」
「僕が決めてしまつてよろしいんですか？」
「ああ、今回はハヤテ、お前に任せる」
ハヤテは少し驚いた
こういう事はいつもナギが決めていたので
「わかりました。僕なら今回は別れずにこのまま一緒に行動します」
「それはどうしてですかハヤテ君？」
そう質問したのはマリアだった
「理由は昨日のドスランポスとは強さが全然違つはずだからです」
「そんなに違つうの？」
今度はヒナギクが質問した
「はい。ゲームではドスランポスを倒したらすぐイヤンクックとは

いけないんです。本当はその間に少しづつ強いモンスターと戦っていくんです。ですからドラランポスのあと次はイャンクックというのはそれだけ強さが違うということなんです」

「ふーん、大体わかったわ…」

ヒナギクはちよっぴりガツカリした

この理由では二班に別れたいという自分の意見は通らないことがわかったからである

「それじゃ決まりだな！」

このナギの一言で決まった

「それでは準備だな」

そうしてハヤテ達はアイテムボックスにむかった

ヒナギクが中を見ると小さなボールみたいな物を見つけた

「ねえナギ、このボールみたいのはなに？」

手にそれを持ちナギにきいた

「それはペイントボールだ」

「何それ？」

「それはドラランポスやイャンクックとかの大型モンスターに当たると場所がわかるまあ、発信機のようなものかな」

「そうなんだ、で、誰が投げるの？」

「ん？それはヒナギクでいいだろ今持つてるんだし」

「えっ？私？」

「別に嫌なら良いのだぞやめても」

ナギがほくそ笑みながら言った

「んっ！やるわよ！絶対成功させるんだから！」

ヒナギクは無機になり自分でやることを引き受けた

「お嬢様、マリアさん、ヒナギクさん準備はできましたか？」

「ああ」

「はい」

「出来たわ」

「それでは行きましょう」

そうしてハヤテ達はベースキャンプを出発した
ちなみに、ハヤテ達は右の海ではない道を行った

そうしてハヤテ達は少し歩き、奥にはキノコが生えている広場のよ
うな場所に着いた

そこにはランポスが三匹いた

その三匹は明らかに敵意をむき出した

「グルル…」

「戦わないといけないようですね」ハヤテがそう言いポーンブレイ
ドを構える

「そうみたいね」

ヒナギクも正宗を構える

「そのようですね」

マリアも猟筒を弾をこめ構える

「そうだな」

ナギもポーンククリを構える

「「ギャオオ！」」

二匹のランポスがハヤテ達に迫る

それにハヤテとヒナギクが向かう

「ギャオオ」

左側のランポスがハヤテに噛み付く

それをハヤテは左に飛んでよけ、ポーンブレイドを右から左にふる

「ギャオ」

その仰け反った瞬間に下から上へ切り上げる

ランポスは吹っ飛ばされ沈黙した

「ふ」

ハヤテは安堵のため息をついた

そして右側のランポスはヒナギクに飛び掛かる

「はあ！」

ヒナギクはそのランポスにタイミング良く切り上げを当てた
カウンターの効果で威力が増す

「ギ…ヤ…」

吹っ飛ばされたランポスは沈黙した

「あと一匹ね」

ヒナギクは残ったランポスの方を向く

「グルルル……」

仲間を殺され怒りが増しているようだったが

「!……」

ランポスはびくりと体を震わせハヤテ達から逃げた

「?なんで逃げたの?」

ヒナギクが疑問に思った

もちろんハヤテ、ナギ、マリアもだ

「なんで逃げたのだハヤテ?」

ナギがハヤテにきく

「え〜とですね…」

とにかくハヤテは考えた

(あんなに怒っていたのに何で逃げたんだ?僕達に勝てないと気付いたのか?いやそれはないだとすると…いや、待てよ…この世界は現実世界と少し混ざっているんだよな、現実で動物が逃げる理由…自分にとつての天敵がくる…!)

「ヒナギクさん!ペイントボールの準備をしてください!」

「えっ?まだイヤンクックはいないのに?」

その時

バサッ バサッ

と羽を飛ばたかず時に出る音が聞こえた

その音はだんだん大きくなった

そして

ズン

ハヤテ達のいる広場のような場所に降りた
それは全身が赤い鱗に覆われ、耳が襟巻のようになっていて鳥のよ
うな生物だった

イヤンクック（後書き）

ナ「前回の私のセリフで抜けていたところは「ああ」だそうだ」

ヒ「それにしても最近誤字とか多くない？なんとかしてほしいわよ！まったく」

マ「でも、そ

のかわりに更新はまあまあペースですよね」

ナ「でもいつ挫折するかわからんぞ。ということで作者！このペー
スを維持するように！以上！」

怪鳥（前書き）

モンハンの武器に『大剣』とありますがあれって「だいけん」と読むんですかそれとも「たいけん」と読むんですか？ずっと疑問です…ある友達は『たいけん』と言ったり他の友達は『だいけん』と言ったり…謎です、いまだにそれとモンハンは漢字がムズいです全体的になるのでほとんどの武器が読めません、いまだに苦惱中です。本編は今回はかなりやってしまったと思います…でもよろしくお願ひします

では第一六話です

怪鳥

「あれがイヤンクック…」

ヒナギクはイヤンクックを見ながらそう言った

（なんか想像していたのより怖くないな、むしろドスランポスの方が怖い気がするし…）

ヒナギクは素直にそう思った

「おいヒナギク！早くペイントボールを投げろ！すぐ逃げることだつてあるのだ！」

ナギがヒナギクに向かって叫んだ

そのせいでイヤンクックはハヤテ達に気付いた

「クワアア！」

羽を広げイヤンクックは咆哮を上げた

そしてすぐハヤテ達に突進してきた

「…！」

ハヤテは右側にヒナギクは左側にそれぞれ飛び込む

「ナギ！」

「つてうわ！マリア！」

マリアとつさにナギを左腕に抱え左側に飛び込む

四人とも無傷でイヤンクックの攻撃を回避する

イヤンクックはすぐに止まれずに転倒した

「危なかった…」

ハヤテはそう言ってポーンブレイドを構える

「大丈夫ですかナギ？」

「ああ、マリアのおかげで助かったよありがとう」

「いいえ、どういたしまして」

マリアはナギを抱えたままである

「ナギ、ハヤテ君のところまでイヤンクックから離れますよ」

「わかった」

そうしてナギとマリアはハヤテの所に向かった

(やっぱりイヤンクツクの方が強いわね見た目と違って…)

ヒナギクはそう思った

「って！忘れるところだった！」

ヒナギクは慌ててペイントボールをイヤンクツクに向かって投げた
ベチャ

っという音がしてイヤンクツクに見事当たった

当たったところに色がつき独特の匂いが漂う

(ふう…当たって良かった)

ヒナギクは胸を撫で下ろした

ナギに『絶対当てる！』と言ったので少しプレッシャーを感じていたのである

「ヒナギクさんまだ安心はできませんよ」

真剣な声でハヤテが言った

「わかってるわよハヤテ君」

ヒナギクは正宗を構えなおす

そしてナギとマリアが合流する。そしてナギをおろす

「無事ですかお嬢様、マリアさん」

ハヤテがとても心配そうにきく

「大丈夫だハヤテ」

「大丈夫ですよハヤテ君」

二人とも笑顔で言った

「二人とも無事で良かったです」

ハヤテはホッとした

その時

「クワアア！」

イヤンクツクが体勢を立て直し咆哮をあげる

イヤンクツクとの距離は十メートルぐらい

「マリアさん、僕とヒナギクさんで前に出るので援護をお願いします
す」

「わかりましたハヤテ君」

そう言つてマリアは猟筒を構える

「お嬢様は後ろで非難していてください。では行きますよヒナギクさん！」

「ええ…」

（何よハヤテ君、私だつて女の子なんだからもう少し心配してくれ
たつて良いじゃない！）

ヒナギクは心の中で少し怒っていた

あまりハヤテがヒナギクのことを気に掛けていないようだったから
である

（バカ！）

そう思つてヒナギクはイヤンクツクに向かう

「クワアア！」

イヤンクツクがまた突進してくる

「そう何回も当たりません」

ハヤテは右に飛んで避ける

「もう当たらないわよ！」

ヒナギクは左に避ける

「ナギ、私から離れないでください！」

「わ、わかった」

ナギはマリアの

マリアは左に避けるそしてドンッ　ドンッ

二発発泡する

二発とも命中したがあまりきいていないように見える

（やっぱリドスランポスとは強さが全然違いますね〜）そう思いな
がらマリアはイヤンクツクから離れるナギもマリアにしっかりつい
ていく

イヤンクツクはまた止まれずに転倒した

その隙にハヤテとヒナギクが一気に接近し

「くらえ！」

ハヤテがポーンブレイドを振り下ろし足に当てる

「はあ！」

ヒナギクも正宗を振り下ろし足に当てる

だがイヤクツクは何事もなかったように立ち上がった

「一撃与えたぐらいじゃダメですか……」

そうしてハヤテはバックステップしイヤクツクから距離をとる

「やっぱリドスランポスより強い……」

ヒナギクはそう思った

イヤクツクがヒナギクの方をむき、体を反る

「？何？」

「ヒナギクさん！逃げてください！」

全く意味のわからないヒナギクにハヤテが叫ぶ

「え？何で？」

わけがわからないながらもヒナギクは右に飛ぶ

その時

イヤクツクが口を開け体を前に振る

すると口から火の塊のようなものが出る

それは放物線をえがきヒナギクのすぐ左の地面に当たり

ボンツ

と音をたて火柱があがる

「キヤツ！って何なのよこれ！」

ヒナギクは今のことに驚いた

まあ当たり前だろういきなり火の塊を吐き出されたのだ知らない人

は驚いてしまっだろう、知っていても驚くはずだが

「それは『ブレス』というものです」

「『ブレス』？」

聞き覚えの無い単語にヒナギクは首をかしげる

「え」と…詳しいことはあとで話します」

ハヤテがイヤクツクの方に向き直る

「わかつたわハヤテ君」

ヒナギクもイヤンクツクの方を向く

「それと、大丈夫ですかヒナギクさん」

ハヤテが心配そうにきく

「えっ？」

「先ほどヒナギクさんの近くに『ブレス』が当たったので」

「大丈夫よハヤテ君、心配してくれてありがとう／＼」

（なんだちゃんと心配してくれてたんだ…ありがとうハヤテ君）

ヒナギクは嬉しくなった

そしてすこし顔が赤い

「クワアア！」

イヤンクツクが咆哮をあげまた体がを反らす

「またきますよヒナギクさん」

「わかってるわよハヤテ君」

「クワアアア！」

イヤンクツクがまたブレスを吐いた

怪鳥（後書き）

ナ「私の出番が少ない！なぜだ！」

マ「まあ日」

る運動もしてませんし…戦いには出しにくいんじゃないですか？」

ナ「ぐっ！た、確かにそうだが…」

ヒ「そうですね

よね。だからナギもう少し学校にも来なさい！」

ナ「学校は関係ないだろ！」

ヒ「あなたに

とっては学校に来るだけでも運動になるでしょう」

ナ「そこまで弱くはないわ！ということまで作者ももう少し私の出番を増やせ！以上！」

危機（前書き）

前回、誤字がありすいません

気を付けてい

るのですが…話が変わりますが

アニメ『ハヤテのごとく！

！』終わってしまいましたかなり悲しいです、最終回をまさかオリジナルでやるとは…それは予想外でしたがでもおもしろかったのが良かったです

第三期とかやってほしいです

では第一七話です

危機

「クワアア！」

イヤンクツクがハヤテにブレスを吐く

「そう簡単には当たりません」

ハヤテは左に飛んで避ける、イヤンクツクのブレスは地面に当たるその瞬間、ハヤテがいたところの後ろから三発の弾丸が飛んでくるそのすべてがイヤンクツクの嘴に当たる

「クワア！？」

少しだけイヤンクツクが怯む

（ありがとうマリアさん）

その隙にヒナギクが一気に接近し

「はあ！」

下からイヤンクツクの嘴に切り上げる

「！」

その勢いでイヤンクツクが反り返る

そして、ハヤテがポーンブレイドを振り下ろしイヤンクツクの左翼

（ハヤテから見て）を切る

（すごい…）

遠くで見ているナギはそう思った

イヤンクツク相手に怯まずに戦っているハヤテ達を見て

武器もはつきり言つて、ヒナギク以外は弱すぎる

それでも、ハヤテ達は戦っている

（私は…ただ見ているだけだ…何もしていない…ただの足手まといだ…）

ナギは自分を嘆いた

何も出来ない自分を

「クワアアアア！」

イヤンクツクは再び咆哮をあげる

ハヤテとヒナギクは後ろに下がった

そして、イャンクツクは突進してきた

ハヤテとヒナギクは後ろに下がったおかげでハヤテは左に、ヒナギクは右に、それぞれかわす

「ナギ右側に避けますよ」

マリアはそう言っただけで右に飛ぶ

だが、ナギその場に立ったままだった

自分を嘆いていて、マリアの言ったことを全く聞いていなかったからだ

「ナギ！」

「えっ？…！」

マリアの声でナギは我に返る

ナギの目の前には自分に向かって突進してくるイャンクツクがいた

「ナギ避けて！」

ヒナギクが叫ぶ

（もうダメだ！）

ナギはそう思って目をつぶる

ドガア！

イャンクツクの突進が当たった音がした

（あれ？痛くない…体も吹っ飛んだりしてない…）

ナギは恐る恐る目を開けた、そこにはハヤテの後ろ姿があった

ハヤテが瞬時に『疾風のごとく』を使いナギの目の前に移動し、大

剣でガードしてイヤンクツクの突進を止めたのだ

「ハ…ハヤ」

「大丈夫ですか、お嬢様？」

ハヤテは後ろを向き笑顔で言った

「だ…大丈夫だ」

「それは良かったです」

ハヤテはまた笑顔で言った

「クワア！」突進を止られたイヤンクツクは強引にハヤテをたおそうとする

するとハヤテは前を向き

「僕のとて大切なお嬢様を傷つけようとするやつは、絶対に許さない！」

ハヤテは両腕にさらに力を加た

そしてからだを左に捻り

「うおおお！」

イヤンクツクを左側に倒した

「ふう、もう大丈夫ですよ、お嬢様」

ハヤテがまた振り返り笑顔で言った

「ハヤテ…ありがとう」

ナギはハヤテに抱きついて言った

「お嬢様！？」「そして…すまん」

小さな声でナギが言った

「えっ？」

「私が…突っ立っていた…所為で…ハヤテまで…危険な目に…遭わせて」

ナギは泣きながら言った

「僕なら心配いりません、大丈夫ですよ」

「だが…」

「それに、僕は『お嬢様を守る』と言いましたし」

またハヤテは笑顔で言った

「ハヤテ…ありがとう／＼」

「いえ」

それを見ていたヒナギクは

（よ…よかったー）

安堵していた。ヒナギクにとってもナギは大切な友人の一人だからである

イヤンクツクが止まったときは何が起きたのかわからなかったが、イヤンクツクが倒れたときにハヤテがいたので理解できた

（ハヤテ君は本当にナギの事を大切に思ってるのね）

ヒナギクはそう思いながらハヤテとナギの所に向かった

そして、マリアは

（よかった…）

ヒナギクと同じく安堵していた

マリアにとってもナギはとも家族みたいに大切な人だからである

「ハヤテ君、ナギ、二人とも無事で良かったです」

「ハヤテ君、ナギ、もう心配したじゃない！」

「大丈夫だ、心配かけてすまんヒナギク」

「はいマリアさん、心配かけてすいませんヒナギクさん」

マリアとヒナギクが来たので（マリアはそんなに遠くにいなかったが）ナギはハヤテから離れる

そして四人が揃ったとき

イヤンクツクがゆっくりと体を起こした

「クワアアアア！」

今まで異常に大きな咆哮をあげた

そのイヤンクツクの口から少しだけ火のようなものが出ていた

危機（後書き）

ナ「いや〜終わったな〜アニメ」

マ「終わって

しまいましたね〜」

ナ「まっ、深夜だったしな

半年やったら長いほうだ」ヒ「そうなの？」

ナ「そうだ、

だいたい深夜アニメは1クール、三ヶ月なんだよ」

ヒ「へ〜そうなんだ」ナ「まあ、ヒナギクは深夜アニメなんか

見るわけ無いからな…アニメは終わったが、こっちはまだ当分終わ
りそうないな」マ「最初は三十話ぐらいで終わるだろう

とか思っていたら、全然終わる気配が無くなっただんですよね〜」

ナ「てことで作者！挫折するな！」

逃走（前書き）

すみません、更新遅れました。家に着いたらすぐ寝ちゃって…これからは頑張りますので

話が変わりますが、モンハ
ンまだ一人でヤマツカミ倒せません。友達にも『ダサ！』とか言われ
れます。と言われても無理なんです！時間が足りないんです！
はあ、いつかは一人で倒します。たぶん無理ですが…また戻ります
が、今回の話は、やってしまった感しかありません…なので温かい
目で見てください。お願いします

てことで、一八話です

逃走

イヤンクツクは口から少しだけ火のようなものを出していた

「なんなのあれ？」

ヒナギクがナギとハヤテにきく

「あれは怒り状態だ」

「怒り状態？」

「なんなんですかそれは？」

今度はマリアがきく

「怒り状態と言うのは、モンスターがある程度ダメージを受けるとなる状態だ。怒り状態になると、動きが激しく成ったり、攻撃力が上がったりするのだ」

ナギが説明し終わると、ヒナギクとマリアは

「「はあ」」

と溜め息を吐いた

「それって…要するに強くなるってことでしょ？」

ヒナギクがナギに力なく訊いた

「まあ、そういうことだ」

ナギが答えた

（これ以上強くなるって…勝てるのかしら私達…）

ヒナギクが少し不安になりまた溜め息を吐く

そこにハヤテが

「大丈夫ですよヒナギクさん」

ハヤテが優しく声をかける。

「ハヤテ君…」

「ヒナギクさんも僕が絶対に守ってみせます！勿論マリアさんも」
ハヤテは力強く言った

そのハヤテの言葉はヒナギクの不安を吹き飛ばした
「ありがとうハヤテ君」

ヒナギクは笑顔で言った

「ありがとうございます。それでは、行きますよヒナギクさん！」
「ええ！」

ハヤテとヒナギクの二人はイヤンクツクに向かう

「援護は任せて下さい！」

マリアは猟筒に弾を込めながら言った

（私は…もうハヤテ達に迷惑を掛けたくない）

ナギはそう思いながら、マリアの傍にしっかりと着いていた
「クワア！」

イヤンクツクが咆哮を上げ、突進する

「っ！」

ハヤテは右、ヒナギクは左にギリギリで避ける

「ナギ！右に避けますよ！」

前より大きな声で言った

さつきみたいに、また聞こえていないかもしれないからである
「わかった」

ナギはちゃんと返事をした

そして、マリアが右に跳ぶのに続きナギも右に跳ぶ
イヤンクツクはナギとマリアを通り過ぎた

（これでまた転ければ隙が出来る）

マリアはそう思った

だが、イヤンクツクは急ブレーキし、転げずにナギ達に方向転換した
「ナギ…掴まっついてください！」

マリアが強い声で言った

「こ、こうか？」

ナギがマリアの腕を両腕で掴む

「…やっぱり、背中に乗ってください」
そう言ってマリアはしゃがむ

「えー！」

「早くしてください！」

「わ、わかった!」

ナギはマリアの背中に乗った。要するにおんぶである

「しっかり掴まっけていてください」

「わかった」

そうしてマリアは立ち上がった

「クワア」

イヤンクツクがまた突進してくる

それをマリアは右に跳んでかわす

その間に

ドンッ ドンッ ドンッ

三発の弾丸を打ち込む

全てイヤンクツクの左足に当たる

すぐさま弾を込めイヤンクツクの後を追う

イヤンクツクの前にはハヤテとヒナギクがいる

(避けてるだけじゃ倒せない)

ヒナギクはそう思った

そして、ヒナギクはイヤンクツクに向かって走る

「ヒナギクさん!?!」

「ハヤテ君も来て!」

「は、はい!」

ヒナギクに言われるがままに、ハヤテもイヤンクツクに向かって走る

「私が隙を造からハヤテ君はその隙に攻撃、お願い!」

走りながら話す

「わかりました」

ハヤテはうなずいて答えた

ヒナギクの前にイヤンクツクが迫る

(今だ!)

ヒナギクはイヤンクツクの突進を右走り、すれ違うように避け、その瞬間に

「くらええ！」

ヒナギクは左から右に正宗を振る

ドガア

と音がしてイヤンクツクの左足に当たる

「クワア!？」

イヤンクツクはバランスがとれなくなり前に倒れる

その目の前にはハヤテがいる

「いけえ！ハヤテ！」

「ハヤテ君！やって下さい！」

「今よハヤテ君！」

ナギ、マリア、ヒナギクがそれぞれハヤテに叫ぶ

「これでどうだ！」

ハヤテは右下から左上に渾身の力でポーンブレイドを振り上げる

ズガア

それはイヤンクツクの胸に当たり、イヤンクツクは左側に飛んだ

「クワア！」

イヤンクツクの倒れる力とハヤテの振り上げる力がカウンターとな

り、威力が増大する

ズサアア

イヤンクツクは地面に落ちる

「終わったのか？」

ナギがハヤテに訊く

「それはまだわかりません」

そう言つてハヤテはイヤンクツクに近づく

「クワア！」

「クワア！」

イヤンクツクは咆哮と共に立ち上がった

そして直ぐに翼を羽ばたかせて、どこかに飛んでいってしまった

「逃げちゃいましたね……」

ハヤテはそう呟いた

逃走（後書き）

ナ「イヤンクツク編少し長いな」

ヒ「だって、

大きくて強そうだし…実際強いし…」 マ「ドスランポスとは比べ

ものになりませんね」 ナ「まあ確かに、実際のモンハンでも、

最初の壁みたいなものだからな」 ヒ「そんな強かったの!？」

ナ「ああ。ま、でもクリア出来るから頑張

ればな。それよりここからが大変をなのだ」 マ

「あの〜、まだイヤンクツクは倒していませんよ…」

ナ「む！そうだったな。なら作者！早く続きを書くよう

に！以上！」

追跡（前書き）

今回は早めに更新出来ました

良かったです

今日はもう眠いのでこの辺で

では一九話です

追跡

ハヤテ達は飛び立ったイヤンクツクの姿を見ている

「逃げちゃいましたね…」

ハヤテが苦笑いして言った

「でも、あとは追えるんでしょ？」

ヒナギクがハヤテに質問する

「はい。ヒナギクさんがペイントボールを当ててくれたおかげで大丈夫です」

ハヤテは笑顔で言った

「ならよかった」

(やっぱりあれ…外さなくて良かった…)

ヒナギクは一人安堵していた

「ナギ、もう降りてもいいですよ」

「ああ、わかった」

ナギはマリアの背中から降りる

「ふう、逃げたってことは大分ダメージを与えたってことですかね？」

マリアはそう言って猟筒を背負う

「まあそうだな」

ナギがそう言った後、ナギとマリアはハヤテとヒナギクに向かって歩いた

「お嬢様大丈夫でしたか？」

近くに来た途端にハヤテがナギの心配をする

やはりナギの事はいつも心配のようである

「ああ、大丈夫だハヤテ」

笑顔でナギは答えた

「ご無事で何よりです」

ハヤテも笑顔で言った

「あの〜」

「ん？なんだヒナギク？」

「どうやってイヤンクツクを追うの？ペイントボールは当てたんだけど」

「ああ、それは…」

(…そう言えば…どうするだろう…)

前にも書いたが、此処はゲームの世界と現実の世界が混ざっている
ので、ゲームでは起きる事が起きない場合もある

(まさか地図に表示されるわけないし…)

そう思いながらもナギは地図を見る

「やっぱりか…」

はあ、と、ナギは溜め息を吐いた

やはり地図にはイヤンクツクの居場所は表示されていなかった

「ハヤテはわかるか？」

今度はナギがハヤテに質問する

「え〜と…多分ですが匂いを追えばいいのかと」

「…匂い？」

ナギ、ヒナギク、マリアが同時に言った

「はい。何かこう、独特な匂いがするんです。少しですが」

そうハヤテが言ったので三人はクンクンと匂いを嗅いでみる

「なんか…するよっな、しないよっな…」

「少しはある…かな？」

「確かに少しですが有りますね」

上からナギ、ヒナギク、マリアの順番

「それでは行きましょうか」

ハヤテが前に出て言った

「そうだな」

「そうね」

「そうですね」

三人はそれぞれ返事をし

ハヤテについていった

ハヤテ達は匂いを追ってある場所に着いた

「って此処はドスランポスと戦った場所ではないか」

そう、此処はドスランポスと戦った、広場の様な所で天上の中心には穴が開いている場所である
そしてハヤテが中央を見ると

「あっ！いましたよ」

「本当か！」

「はい」

ハヤテがそう言ったのでナギも覗いてみる

「おお、いるな」

ナギがそう言ったとき

「ねえ、行かないの？」

ヒナギクがややイライラしているような感じで言った。

ハヤテ達はその場所の入口のような場所にいたので 「それじゃ行くか」

そうして、その場所に行く

イヤンクックとはまだ一五メートルぐらい離れている

ヒナギクがそこでイヤンクックを見たとき

「って寝てるじゃない！」

ヒナギクがそう言った

イヤンクックは立ったまま寝ていた

「ナギ、なんかイヤンクックの耳見たいのが閉じているみたいなんですけど」

マリアがナギにきく

「それはな、イヤンクックがかなりダメージを受けた証拠なんだ」

ナギは自慢気に言った

「じゃあもう直ぐですね、ナギ」

マリアが優しく言った

「ああ」

ナギは明るい声で言った

「ねえハヤテ君」

「何ですかヒナギクさん？」

「この寝てる状態って意気なり起きるの？」

「うーんとですね、ゲームでは攻撃すると起きますがこっちの世界

では何とも……」

「じゃあ大丈夫じゃない？基本的にはゲームと同じなんでしょ？」

「まあ、大体はそうですけど」

「じゃあきつとそうよ」

ヒナギクは笑顔で言った

「そうですね」

ハヤテも笑顔で返す

「それじゃ誰が最初に攻撃するのだ？」

ナギが二人の会話に割って入る

「一番攻撃力が高い人ですけど……」

ハヤテがそう答える

「じゃあ決まりだな」

ナギが元気に言った

「ちなみに誰ですか？」

「マリアがナギにきく」

「それは…」

「『それは？』」

「ヒナギクだ」

「『あ』」

「ハヤテとマリアはそう声を漏らした」

「ヒナギクは…」

「なんで私なのよ！」

「ヒナギクは大声で言った」

「私、女の子なのよ！なんでハヤテ君じゃないのよ！」

「ヒナギクは大声でなぜ自分なのかをナギにきく」

「いやだって、ヒナギク剣道強いし、その強い武器だってあるし…」

「と、総合するとハヤテより強いのだ！」

「ナギは断言した」

「でも…」

「ヒナギクがそう言いかけたとき」

「あの…お嬢様、ヒナギクさん」

「なんだハヤテ！」

「何ハヤテ君！」

「二人は強い声でハヤテに言った」

「あの…イヤンクツクが起きたんですけど…」

「『えっ！』」

「二人はイヤンクツクの方を見る」

「クワアア！」

「イヤンクツクは咆哮を上げていた」

「な…」

「な…」

「なぜ（なんで）起きた（の）ー！」

「二人の声はその場所に響きわたった」

追跡（後書き）

ナ「てか今回で終わらんでもないか！」

マ「まあまあ

ナギ、次の話では終わるはずですから」「ヒ「早めに更新出来たらだ
けどね」

ナ「ぬおー！なら作者！とつとつ次の話

を書け！以上！」

勇気（前書き）

やっと更新出来ました

でも次は遅くなるかもしれませんが

すいません、でも出来るだけ早く更新はします

話は変わりますが

モンハン：クシャルダオラ、余裕負けしました

風なんて関係ないぜ！

そんな気持ちで挑んだのが間違いでした

今度こそは頑張ります

ちなみにG級です

では二十話です

勇気

「クワア！」

イヤンクツクは咆哮を上げていた

「「なんで起きたの(だ)！」」

ナギとヒナギクは大声で言った

「多分、大声で話していたからではないかと…」

ハヤテが小さな声で言った

「取り敢えずお嬢様はさがっていてください」

先程とは違い、大きな声で言った

「わ、わかった」

ナギはそう言って後ろに下がる

「起きたものは仕方有りませんよね」

マリアはそう言って猟筒を構える

「そうですね」

(ハヤテ君もゲームの世界とは少し違うって言うてたし、仕方ないか)

ヒナギクはそう思いながら正宗を構える

「それではいきますよ」

ハヤテがポーンブレイドを構え言った

「ええ」

「はい」マリアとヒナギクはそれに返事をし、ハヤテとヒナギクは

イヤンクツクに接近する

「クワアアア！」

イヤンクツクは咆哮を上げ、そして体を反らす

(「(やばっ!)」)

ハヤテとヒナギクはそう思った

あんなものをまともに食らったら、一溜まりもないからである

(あのプレスって、なんだか脆そうですね…なら試してみますか)

マリアは一人そう思っていた

「クワア」

イヤンクツクが体を前に倒し、ハヤテにブレスを吐いた

「っ！」

ハヤテが左に避けようとした瞬間

ドンッ

と音がし

ブレスが弾けた

「!?!」

ハヤテには何が起こったのか理解できなかった

「ふゝ、まさか本当に出来ると思いませんでしたけど…大丈夫ですかハヤテ君？」

「マリアさんがやったんですか!?!」

ハヤテは驚いた

「そうですよ。あのブレスは脆そうだったので、衝撃を与えればその場で壊れると思ったんですよ」

マリアは猟筒を構えながら言った

「そうだったんですか」

(流石マリアさんだな、あのブレスを破壊するなんて…)

ハヤテはやっぱりマリアはすごいと改めて思った

「クワア！」

イヤンクツクは、また咆哮をし、体を反らす

「マリアさん、また出来ますか？」

「もちろんですよ」

マリアは自信満々に言った

「では行きますよヒナギクさん」

「ええ」

二人はまたイヤンクツクに接近する

「クワアア！」イヤンクツクが、今度はハヤテとヒナギク、交互に二回ブレスを吐く

その瞬間に

ドンッ ドンッ ドンッ

ドンッ

四発の弾丸が放たれる

その弾丸はイヤンクツクの吐いたブレスに命中し

バン！ バン！ バン！ バン！

と、音を立てて爆発した

（（ありがとうございます、マリアさん））

二人はそう思いながら疾走し、イヤンクツクの前に着く

「クワア！」

イヤンクツクはまたブレスを吐くために体を反らす

（ブレスに衝撃を与えれば爆発するなら…）

「ハヤテ君はそこにいて！」ヒナギクがハヤテに叫ぶ

「わかりました」

ヒナギクはジャンプしイヤンクツクの顔の高さくらいまで跳ぶ

その時に、イヤンクツクが体を前に倒し、ブレスが出る瞬間

「くらえええ！」

ヒナギクは正宗を右下から左上に切り上げる

それはイヤンクツクの口に当たる

「クワ…」

イヤンクツクが声を上げた瞬間に爆発が起こる

ドガア

「今よハヤテ君！」

「はい！」

ハヤテは両足を肩幅ぐらいに開き

ボーンブレイドを右にもつといき

「これで終わりだ！」

ハヤテは右から左にボーンブレイドを振る

イヤンクツクの胸に当たり、剣がとまる。そこから、そのまま腕の

力で振り抜く

イヤンクツクは左の壁ぎわまで吹っ飛んだ

「これで終わりましたかね？」

ハヤテがボーンブレイドを背負って言った

「多分ね」

ヒナギクも正宗を背負い言った

「ふう、やっと終わりましたか」

マリアも猟筒を背負う

「なら私が確かめる」

ナギがそう言っつてイヤンクツクに近づく

ハヤテ達も、イヤンクツクはもう倒したと思っつているのでナギを止めなかつた

その時

「クワ…ワ…ア」

イヤンクツクはゆっくりと立ち上がった

「クワ…！」

「お嬢様！」

「ナギ！」

ハヤテ、マリア、ヒナギクは一斉に走りだす

「う、わ、わ」

ナギはもう怯えていた

ランポスとは比べものにならない威圧感だつた

（ダメだ…足が震えて…動かない）

ナギは震えていた

「クワ…」

イヤンクツクがナギに気付いき、ブレスを吐こうと体を反らす

「ナギ！」

マリアはすぐに猟筒を構える、間に合うかどうかはギリギリのところだ

（そうだ、もうハヤテ達に迷惑は掛けたくない、そう決めたじゃないか！）

ナギはボーンククリを構え

「くらえ！」

ナギは最大の勇気を出しジャンプ切りをした
イヤンクツクの体に当たる

ナギは怖くて目を開けられなかった

(ど、どうだ…)

それでも、ゆっくりと目を開ける

イヤンクツクは立ったままだった

「そん…な」

ナギがそう言ったとき

「クワ…ア」

イヤンクツクはそう言って地面に崩れ落ちた

勇気（後書き）

ナ「やっと二十話だ！」

マ「長かったですね〜」

ヒ「だいたい…四ヶ月くらいたったのよね」

ナ「それで二十とは、遅いんじゃないか？」

マ「マイペースですからね〜、どうしようもないんですよ」

ナ「こらあ！作者！マイペースではなく、もっとときびきびと書け！
以上！」

ヒ「感想も宜しく願います」

成長（前書き）

すみません

これだけ間が空いたのに、これしか書いていません

本当にすみません

次はもう少しましに出来るように頑張りますのでよろしくお願いします

では二十一話です

成長

イヤンクツクはナギの攻撃を受け、その場に崩れ落ちた

「た…倒した…のか？私が…」

ナギはその場に立つたままだった

「大丈夫ですか？お嬢様！」

「大丈夫？ナギ！」

「」

ハヤテ、マリア、ヒナギクは直ぐにナギに駆け寄った

「ハヤ…ハヤテ！」

ナギはハヤテに抱きついた

「お嬢様…」

「恐かったのだ…すごく恐かったのだ…」

半泣きの状態でナギは言った

「もう大丈夫ですよ、お嬢様」

ハヤテは優しくナギの頭を撫でる

「すみません、僕がてつきりイヤンクツクを倒してると思っていました

つたばかりにお嬢様に悪い思いをさせてしまっただけ」

「べ、別にハヤテの所為では無いのだ…」

「でも、僕がこんなことを言うのもどうかと思いますが、お嬢様は
すごかったですよ」

「ほ、本当か？」

「はい、お嬢様があんなに勇敢とは思いませんでした」

「本当、まさかナギがイヤンクツクを倒しちゃうとは思わなかった
けど」

ヒナギクが少し笑って言った

「私だって、やればこのくらい出来るのだ！」

ナギは少し大きな声で言った

「でも、怪我がなくて本当に良かったです」

マリアがそう言った

「マリア、なんとか怪我をしなくて良かったよ」

「あのくお嬢様？」

「ん？なんだハヤテ？」

もうすっかりナギは泣き止んでいた

「そろそろ剥ぎ取りませんか？」

「ああ！そうだったな、それじゃそうするか」

そうしてハヤテ達はイヤンクツクを剥ぎ取る

「あら？イヤンクツクは三回剥ぎ取れるんですね」

マリアが呟いた

「まあ、体が大きいからな」

ナギが言った

「これから闘う敵ってこの位の大きさばかりなの？」

ヒナギクがナギに訊く

「そうだな、ゲームではこの大きさが基本だからな」

「やっぱりそうなんだ」

（そうだとはい少し思ってたけどね）

ヒナギクもこの世界観に慣れてきたようである

「ふう、剥ぎ取りも終わったし、戻るか」

「「そうですね」」

「そうですね」

そうしてハヤテ達はベースキャンプに戻っていった

成長（後書き）

ナ「なんとかイヤンクックを倒したよ」

マ「本当にあの時はどうなるかと思いましたよ」

ヒ「でも、ナギが無事で良かったわ」

ナ「私もなんとか倒せてよかったよ」

マ「次からはもっと注意しないとイケませんね」

ヒ「そうですね」

ナ「なんだかんだで作者！早く次を書くように！以上！」

報告（前書き）

なんとか更新しました

今回は前回よりは長いので

話が変わりますが、やっと『ハヤテのごとく!』21巻出ました
長かったです

やっぱり良かったですね

ハヤテは相変わらず勘違いばかりしているし

ナギは引き込み気味だし

全員イキイキとしていて、やっぱりハヤテいいわ〜
とか思っていました

早く続きが読みたいです

それでは第二十二話です

報告

イヤンクツクを倒したハヤテ達はベースキャンプに着いた
空はもう夜になりかけていた

「やっと着いた…」

ナギはもう疲れ果てその場に座り込む

「あの、大丈夫ですかお嬢様？」

ハヤテ苦笑いしながらナギに訊いた

「もう歩けない…村に着いたらおぶつてくれハヤテ」

ナギがそう言うと

「ナギ、船で移動している時に休めるんですからちゃんと歩いてください」

マリアがナギに強めに言った

「でもマリアさん、今日はお嬢様もがんばりましたし」

「ハヤテ君、そういうところで甘やかすからナギの体力も付かないんですよ」

「はあ…」

ハヤテとマリアがそういう会話をしているとき

「すう…」

ナギは寝てしまった

「あの、ハヤテ君、マリアさん」

「…なんですかヒナギクさん？」

二人は同時に言った

「もう、ナギ寝ちゃったんだけど…」

「…えっ!?!」

二人がナギを見ると

「すう…すう…」

ナギは気持ち良さそうに寝ていた

「はあ、寝ているんじゃないや仕方ありませんね…村に着いたらナギをお

ぶつてくれますかハヤテ君？」

「はい、わかりました」

ハヤテはそう言っつて、船の準備に取り掛かる

「やっぱり疲れちゃったんですね」

ヒナギクがマリアに話し掛ける

「まあ、元々体力の無い子ですからね」

「でも、今日はがんばりましたよねナギも」

「確かにそうですね。ナギがあんなにがんばったのは久しぶりに見た気がします」

マリアは染々と言っつた

「そうですね」

ヒナギクは笑つて言っつた

それから五分後…

「それじゃあ行きましようか」

ハヤテがナギをおぶつて言っつた

「そうですね」

「そうね」

そしてハヤテ達は船に乗つた

それから一時間後…

ハヤテ達は村の港に着いた

「うわ、もう真っ暗ね」

ヒナギクが船を降りながら言っつた

「今回は時間がかかりましたからね」

マリアもヒナギクに続いて船を降りる

「それじゃ、行きましよう」

ハヤテが船から降り、ナギをおぶってそう言った時

「ん……あれ？ハヤテ？」

ナギが目を覚ました

「起きちゃいましたかお嬢様」「私は寝ちゃったのか……で、此処は何処だ？」

「此処は村の港ですよ」

「そうか……ふあ」

まだナギは眠いようである。ナギにとって、今日はかなりの運動量だったからだろう

「一旦家に帰りましようか？」

「ああ、そうしてくれ……」

ナギは目を擦りながら言った

そうしてハヤテ達は家に向かって歩きだした

村

村に着くと

「今回はどうだったかね？」

と村長がハヤテ達に尋ねる

「なんとか倒しましたよ。これが証拠です」

そう言つてハヤテはイヤンクツクの鱗を一枚見せる

「ほお、まさか本当に倒すとはね……」

村長は少し驚いたようだった

ドスランポスの次にすぐイヤンクツクというのは、普通に考えると倒すのはかなり難しいのである

それを見事にクリアしたので素直に驚いたのである

「よく倒せたね…」

「まあ、かなり大変でしたけど」

「今回はナギががんばってくれましたから」

ヒナギクが村長に言った

「ナギ？」

村長は首を傾げて言った

「名前言ってませんでしたっけ？この子です」

ヒナギクはナギを指差す

「ん？…なんだ…ヒナギク？」

指を差されたのでナギが質問する、また寝てしまいそう感じた

「この子がイヤンクックをね」

あまり信じられなかったようである

「？…ま…いいか…ふあ…」

「それじゃ、みんなの名前も教えてもらおうかね」

「僕の名前は綾崎ハヤテです」

「私は桂ヒナギクです」

「マリアです」

三人がそれぞれの名前を言い終わる

「ふんふん…ありがとだね。それじゃ、明日また此処に来なさい次

の依頼を出すからね」

そう言つて村長は革袋を渡す

「ありがとうございます。では、また明日来ます」

ハヤテは革袋を貰つてそう言った

そして家へと向かった

家

「お嬢様、着きましたよ」

「ん…そうか…」

ハヤテはゆっくりと腰を下ろしてナギを下ろした

「ナギ、これから夕食ですけど、大丈夫ですか」

マリアがナギを心配して言った

「…今日は疲れたから…もう寝る…食事は三人で行ってくれ…」ナギは眠そうに言った

「そうですか、でもナギ、一人で大丈夫ですか？」

「……少しだけ一緒に居てくれマリア…」

「わかりました。というわけで、先に二人で行ってもらえますか？」

「はい、わかりましたマリアさん」

「わかりました」

(…って！これって二人つきりじゃない！この機会に少しでもハヤテ君の事を嫌いじゃないって思われなくちゃ！)

ヒナギクは一人で決心を固めていた

そうして、ハヤテとヒナギクは武器を置いて集会場に向かった

報告（後書き）

ナ「前回の話の空白は『大丈夫ですかナギ?』と言うマリアの台詞だそうだ。そして、すいませんだそうだ」

ヒ「相変わらずミスがあるわね」

マ「しっかりチェックしてほしいですよね」

ナ「てか、謝罪とか前書きでやれよ。なんで後書きなんだ」

ヒ「またあれじゃない?『書くことが無い』とか作者が思ったからでしょ」

マ「全く、しっかり考えてほしいですわ」

ナ「てことで作者!次からはちゃんとチェックし、謝罪は前書きでやれ!以上!」

ヒ「感想もよろしくお願いします」

食事（前書き）

最近、この話はおもしろいのか謎です
自分でもなんか変だな、とか思ったりします
でも直せません、というか無理です
他の作品を見ると、スゲー、ハヤテじゃん。俺の作品はダメだとい
つも思います
ま、それでもがんばるんですが

それでは第二十三話です

食事

ヒナギクは、ナギのことが心配だったが、機嫌は良かった。これから少しの間だがハヤテと二人で食事が出るからである

そして、ハヤテとヒナギクは集会場に着いた

此処は相変わらずたくさんのハンター達が騒いでいた

ハヤテとヒナギクは向かい合って奥の席に着く

マリアが来るので、ハヤテとヒナギクの隣の席は空けてある

そして、いつものように店員が来る

「ご注文は何ですかー！お客様！って、ハヤテさんとヒナギクさんじゃないですか！」

「レナさん！」

ハヤテとヒナギクは同時に言った

「こんばんはー、って、あれ？ナギちゃんとマリアさんはいないんですか？」

レナが首を傾げて言った

「お嬢様はもうおやすみになりました」

「はあ、ずいぶん早いね。それじゃ、マリアさんも寝ちゃったの？」

「マリアさんはお嬢様が寝るまで付き添っているんです」

「そうなんだ。じゃあ今は二人だけなんだね」

「はい」

「それじゃ、注文はどうする？またおすすめでいいのかい？」

「ヒナギクさんもそれでいいですか？」

「うん、いいわよ」

「それではお願いします」

「はい！少々お待ちくださいー！」

レナは元気にそう言っ店奥に行った

「少々つて…全然待たないわよね」
「そうですね」

ハヤテは笑って言った
その瞬間

「おまたせしました！」

レナが両手に料理を持って戻ってきた。数は四皿

（（やっぱり早！））

二人は改めてそう思った

「冷めないうちにどうぞ」

レナは手際よく料理を並べる

「「いただきます」」

手を合わせて言った

「あの」

「何ですか？」

「また隣に座って良いですか？」

「！」

ヒナギクはハヤテより敏感に反応した

「別にいいですよねヒナギクさん？」

「え?! ああ…」

（折角ハヤテ君と二人っきりに成れると思ったのに…でも、ここで断るのも失礼だし…あー！でもやっぱりハヤテ君と二人っきりに成りたいし…でも……）

ヒナギクはとてつもなく悩んでしまう

「あの…ヒナギクさん？」

「ほえ?! あ、ああ、別にいいわよ」

結局ヒナギクはオツケーした

やはりここで断るのは失礼だ! という考えが勝ったのである
だが、やはり少し落ち込んでしまう

「それじゃ失礼します」

そう言つてレナはハヤテの隣に座る

「そういえば、今日は何をやったんですか？」

レナがハヤテとヒナギクに訊く

「今日はイヤンクックと闘いました」

ハヤテが料理を食べつつ言った

「イヤンクックって、あのイヤンクック?!」

レナは驚いて大きな声で言った

「それ本当？」

「本当ですけど、何ですか？」

ヒナギクが応える

「何でって、そりゃイヤンクックはまだ早すぎなんだよ!ドスラン
ポスを倒してすぐイヤンクックなんて!」

レナはヒナギクに言う

「それは分かっていたましたが、それでもやらなければいけなかった
んです」

ハヤテは強く言った

「...」

レナは黙ってヒナギクの方も見る

そうすると、ヒナギクはコクリと頷いた

「何でそこまでしてイヤンクックを倒したかったの？」

興味津々でレナがきく

「それは、ミラールツと闘うためにイヤンクックを倒さなければい
けなかったからです」

ハヤテが答える

「でもやっぱり早すぎじゃない?あとドスランポスを倒した程度じ
ゃイヤンクックと闘えないはずだけど?」

「それは村長がイヤンクックと闘ってって言ったからです」

ヒナギクが答える

「村長が?!」またレナが驚いたようである

「そんなに驚くことなんですか？」

ヒナギクがレナに質問する

「今までにあの村長がそんな無茶なことを言った事は無いからだよ」
レナはキツパリと言った

「はあ」

（イヤンクックってそんな無茶なことだったの？確かに強かったけど、そこまでではないような…）

ヒナギクがそう思った時

「ハヤテ君、ここにいたんですね」

そう言われハヤテが振り向くと

「マリアさん」

マリアがいた

「探すのに少し手間どっちゃいました」

そう言っつてマリアはヒナギクの隣に座る

「レナさんもこんばんは」

マリアが会釈をして挨拶する

「こんばんは」

レナも会釈をして挨拶する

「いただきます」

マリアは手を合わせて言った

「マリアさん。お嬢様は寝たんですか？」

ハヤテは心配した声で言った

「大丈夫ですよハヤテ君、ナギはすぐにぐっすり寝ましたよ。たぶんよっぽど疲れてたんですね」

とマリアは言った

「そうですね」

ハヤテはホッとした

ナギがあんなに疲れているのは見たことが無かったので心配していたのである

「ところで、皆さんは何の話をしていたんですか？」

マリアが料理を食べつつ言った

「イヤンクックの事に付いて話してたんですよ」

レナがマリアに言った

「そうなんですか」

「はい。それで、話を戻すけど、よくイヤンクックに勝ったね」

「大変でしたけどなんとか倒せましたよ」

ハヤテが答える

「へへ、怪我とかはしたの？」

「なんとか無傷で倒したけど」

ヒナギクがそう言うと

「無傷で?!」

レナが身を乗り出し、ヒナギクに向かって叫ぶように言った

「そ、そうですね…」

ヒナギクはレナに圧倒され、少したじろぐ

「無傷で…」

レナはまた自分の座っている椅子に座る

（イヤンクックを無傷で？初心者のハンターでそんなことが出来るなんて…もしかしたら、この人たちホントにミラルーツを倒したりしちゃうかも…）

レナはそう思った

「すごいね、本当に」

そして、レナは素直に驚く

「ありがとうございます」

ハヤテは笑顔で言った

「もう仕事に戻らないと、それじゃ私はこれで、それではじゅっく
り」

レナは店の奥に戻って行った

「相変わらず元気ですね」

マリアがそう言った

「本当ですね。いつも明るくて、こっちまで元気をもらいますよね」
ヒナギクが言った

「あの元気をナギに少し分けてほしいですね」

マリアは、はあとため息を吐いた
「そうなるといいんですけどね」
ハヤテは苦笑いをして言った

食事（後書き）

ヒ「やっぱりこの料理はおいしいですね」

マ「そうですね、ほとんど待ちませんし」

ヒ「一体どうなっているんですかね？」

マ「どうなってるんですかね？ま、レナさんにきいたらわかると思いますけど」

ヒ「それもそうですね」

マ「次がいつになるかわかりませんが…」

ヒ「それじゃ次回もよろしくお願いします」

不安（前書き）

すいません、更新遅れました

テストがありましたので少し勉強しました

はあ、でもやっぱりヒナギクみたい毎日コツコツ勉強しないとだめですね。改めてわかりました

でも、小説はこれからもがんばりますのでよろしくお願いします

では第二十四話です

不安

それからハヤテ達は料理を食べ終え集会場を出た
そして家に着く

家

家に着き、ハヤテ達はそれぞれの部屋の前に着く

「それではおやすみなさいハヤテ君ヒナギクさん」

マリアが二人にそう言う

「はい。おやすみなさいマリアさん」

「おやすみなさいマリアさん」

二人がマリアに返す

「それとハヤテ君」

マリアがハヤテに近づく

「何ですかマリアさん？」

「昨日言ったこと、覚えてますね？」

マリアが笑顔で言った

「！」

ハヤテはその笑顔に寒気を感じた

「お、覚えてますってマリアさん！」

焦ってハヤテが返答する

「はい。わかってますよ。ただ、もう一度確かめたかっただけです」

マリアはまた笑顔で言った

「ではおやすみなさいハヤテ君」

「おやすみなさいマリアさん」

そう言ってマリアは部屋に入っていった

ふう、とハヤテは息を吐く

「？ハヤテ君、マリアさんになんて言われたの？」

ヒナギクはハヤテを心配して言った

「え？！いや…その…」

ハヤテはなかなか言わない。当たり前だ、『ヒナギクさんに対して何もしないように』と言われました、等と言ったらどうなることか

「何でもありませんよ何でも」

ハヤテは笑顔で言う

そのハヤテをヒナギクは

じつと見る

「……」

ハヤテはヒナギクの視線にたじろぐ

「……ま、言いたくないならいいけど」

ヒナギクはこれ以上詮索しなかった

これ以上詮索するとハヤテに迷惑だと思ったからである

「それじゃ私たちも寝よっか？」

「そうですね」

ハヤテ達は自分達の部屋に入る

そうして二人はそれぞれのベットに入り、ハヤテが電気を消す

「ねえ、ハヤテ君」

「何ですかヒナギクさん？」

「私達この世界に来て二日目じゃない？」

「そうなりますね」

「元の世界のみんな、心配してるのかな…」

ヒナギクは不安そうに言った

「ヒナギクさん…」

「お義母さんや、お姉ちゃん、歩、美希に泉に理沙も…」

だんだんヒナギクの声が小さく、さらに不安そうになる

「そんな不安そうに言わないでくださいヒナギクさん」

ハヤテが言った

「そんなにくよくよしているのはヒナギクさんらしくありません」
ハヤテが強く言った

「ハヤテ君…」

「確かに心配していると思います。それなら早く元の世界に戻って、笑顔で会って安心させましょう」

ハヤテはさらに強く言った

「ありがとう…ハヤテ君」

ヒナギクが少し元気に言った

「それに」

「それに、なに？」

ヒナギクが興味津々に言う

「ヒナギクさんには笑顔が一番似合いますし」

ハヤテは笑顔で言った

「バ、バカ何言ってるのよ！／＼／」

ヒナギクは顔を赤くして言った

「す、すいません、いきなりこんなことを言って」

「何で謝るのよ！」

「その…すいません…」ハヤテは申し訳なそうに言った

「はあ…もう謝らなくていいから」

ヒナギクはため息を吐く

（もう！こんなふうになるから嫌われてると思われるのに、私のバカ！はあ…）

ヒナギクは自分の言ったことを後悔する

「はい…」

ハヤテは小さく返事をする

「それじゃおやすみハヤテ君」

「おやすみなさいヒナギクさん」

そうして二人は眠りについた

不安（後書き）

ヒ「はあ、なんでもっと素直になれないんだろっ…このままじゃハヤテ君にずっと嫌われてると思われちゃう！」

マ「どうしたんですかヒナギクさん？」

ヒ「え！なんでマリアさんがここにいるんですか？」

マ「それは、作者さんが、『ヒナギク一人じゃ全然話を書けない』ということて私が出たんですよ」

ヒ「そうなんですか…」

マ「それより、ヒナギクさんは先ほど、なにを言っていたんですか？」

ヒ「え！？、あ、それはその…あっ！もう時間なのでまた次回もよろしく願います！」

マ「そんなに言いたくないんですか？」

風邪（前書き）

まず最初に、すいませんでした
こんなに更新が遅れてしまっ

実は、テストが近く勉強しなければと言うことで、なかなか執筆出
来ず…

そうしたら最近新型のインフルエンザにかかってしまっ……ダウ
ンしてましたそして、やっと状態がましになりました

はあ、でもこんなときにインフルにかからなくても……テスト…もう
オワタ＼（＾Ｏ＾）ノ

それでは第二十五話です

風邪

「うーん……」

ハヤテは目が覚める

外はまだ日が昇ってまだ少ししか経っていない、あまり明るくない横を見ると、まだヒナギクが気持ち良さそうに寝ている

「うーん……ハンバーグ……軍曹………」

と寝言を言っていた

（ハンバーグ軍曹？）

ハヤテは疑問に思ったがスルーする事にした

寝言なので気にする事もないかと思ったからである

（マリアさん起きてるかな？）

ハヤテはそう思い、静かにベットから降り、ヒナギクを起こさないように慎重にドアを開ける

そしてナギとマリアのいる部屋の前に着き、小さくノックする

「マリアさん起きていますか？」

ハヤテが小さな声で言う
すると

ガチャ

と音がしてドアが開き

「ハヤテ君、ちょうど良かった、来て下さい」

マリアはハヤテの腕をつかみ部屋の中に入る

「どうしたんですかマリアさん」

ハヤテはマリアが

「ナギが、風邪のようなんです」

マリアがそう言うとハヤテはナギを見る

ナギの顔は赤く火照っていて、息も荒かった

「大丈夫ですか、お嬢様」

ハヤテはナギに言う

「ん？ハヤテか？…まあ大丈夫だ私が風邪に等負けるものか！」
ナギは力強く言った

「そうですね。お嬢様が風邪に負けるわけ無いですね」

ハヤテは笑顔で言った

「それでは、今日はどうしましょう？お嬢様が風邪では…」

ハヤテは二人に言う

「ん〜そうですね…じゃあ、ハヤテ君とヒナギクさんだけで行くのは無理なんでしょうか？」

「僕とヒナギクさんだけですか！？」

「流石に無理ですか？」

「いや、ハヤテとヒナギクならいけるだろ、なあハヤテ」

ナギは笑顔でハヤテ言った

ハヤテなら絶対にやれる、そう信じての笑顔であった

「でも僕だけで決めるわけにもいけないので、ヒナギクさんと相談してきます」

「勝手に決めてしまつてはヒナギクさんに悪いですからね」

「確かにそうだな」

「それでは部屋に戻りますね」

そうしてハヤテは部屋に戻る

ガチャ

ハヤテはドアを開けて部屋に入る

ヒナギクは眠りから覚め、起きて、ベッドに座っていた

「おはようございますヒナギクさん。もう起きたんですね」

「おはようハヤテ君。マリアさんの部屋に行ったの？」

「あ、はいそうですね…何でわかったんですか？」

ハヤテは不思議そうに訊く

「何でって、そこぐらいしか行くところ無いし」

「それもそうですね。それで、話があるんです」

「話？」

「はい、実はお嬢様が風邪をひいてしまって」

「ナギか？大丈夫なの？」

ヒナギクは心配そうに言った

「はい大丈夫です。それにマリアさんが看病していますし」

「よかった…」

「なので今日は二人で行ってこいとお嬢様から言われました」

「え？！ハヤテ君と二人で？！」

ヒナギクは驚いた

ヒナギクはナギが風邪をひいたなら今日は倒しには行かないかと思っていたので、まさかハヤテと二人で行くとは予想外だったからだ
「それでヒナギクさんと相談しようと思ってきたんですけど、どうですかヒナギクさん」

「うーん……その、今日倒すやつは二人で倒せるの？」

「それは、わかりませんが絶対に倒せないと言うわけではないと思います」

「そっか…でも一回でも失敗したらもうダメなのよね？そう考えると…やらないほうがいいんじゃないって私は思っただけ。それに、二人だけだとより危険だし」

ヒナギクはそう言った

ヒナギクの言った事は正論である、二人でやるより四人全員でやったほうが成功する確率が高くなるのは当たり前だからだ

「確かにそうなんですけど…」

「けど、何？」

「その、お嬢様に絶対に『やれる』と言われまして…断りにくいというか、その…」

ハヤテは小さな声で言った

ヒナギクはそれを聞き

(そういう事が、ハヤテ君を困らせたくないし…仕方ないか)

「はあ、ならやっぱりやるわよ」

「え?!」

ハヤテは驚いた

「そんな事言われたんならやるって言ったの!」

「でも、本当にいいんですか? さっき二人でやるのは危険だって…」

「も…良いって言ったらいいの! 私が言ったんだから!」

「わ、わかりました! では、お嬢様に伝えてきます!」

ハヤテは直ぐにそう言うたダッシュでナギの部屋に向かった

「もう、男の子なんだから、もつとスパット決めてよねスパット…」

ヒナギクはそうぼやいた

トン トン

「入りますね、お嬢様、マリアさん」

ハヤテはドアをノックし、部屋に入る

「おおハヤテ、それでどうだった?」

「ヒナギクさんと相談してですね、その結果今日は僕とヒナギクさんで行くことにしました」

「おお、そうかそうか」

ナギは腕を組みながらうんうんと頷きながら言った

「ハヤテ君、無茶をしないようにしてくださいね? ハヤテ君だって

人なんですからね」

「それはわかってますよ」

ハヤテは元気に言った

「それではそろそろ朝食を取ってきますね」

ハヤテはそう言って部屋を出た

そして、ハヤテとヒナギクは朝食を取り終え、またナギとマリアの部屋に行く
ちなみに、集会場にはやっぱりレナはいなかった

トン トン

「ハヤテですけど」

「ヒナギクです」

ハヤテがノックし、二人がそれぞれ名前を言う

「どうぞ」

マリアが返事をする

ドアを開け、部屋に入る

「お嬢様、マリアさん。これから行って参ります」

「これから行ってきますね」

二人がそれぞれ出かけるためのあいさつをする

「がんばるのだぞ、ハヤテ、ヒナギク」ナギは笑顔で、今出せる精

一杯の声で言った

「がんばってくださいねハヤテ君、ヒナギクさん」

マリアも笑顔で言った

「はい。絶対に倒してみせます」

ハヤテは力強く言った

「うむ、期待しているからな」

ナギは出来るだけ元気に応える

「それじゃ行つてきますね」

ヒナギクが元気に言った

「ヒナギクさん、がんばって倒してきてくださいね」

「はい！任せてください！」

ヒナギクは元気に、笑顔で言った

そうして、ヒナギク、ハヤテの順番で部屋を出る

「それじゃ行つてくるね」

「絶対に倒すのだぞ…ヒナギクが負けるなんて…許さないからな」

「わかつたわナギ。絶対に倒すから！」

ヒナギクはそう言つて部屋を出る

「それでは僕も行つて参ります」

「ハヤテ君」

「何ですか？マリアさん？」

「ハヤテ君、ヒナギクさんをちゃんと守ってあげてくださいね」

マリアがハヤテに言った

「はい！お任せください！」

ハヤテはそう力強く言つて部屋を出た

二人が部屋を出るとナギは起こしていた体を直ぐにベットに倒す

「ナギ、大丈夫ですか？」

マリアが心配そうに訊く

「大丈夫だマリア…ハヤテとヒナギクだけで…これから闘いに行く

というのに…私が風邪等に負けてられないからな」

ナギはそう力強く言った

「ナギ…それじゃ、早く風邪を治しましょうね」

「うん」

ナギは静かに頷いた

部屋を出たハヤテとヒナギクは村長のところに着く

「おや来たかい」

「はい」

「おや？今日は二人だけかい？」

村長が二人に不思議そうに訊く

「そうです。実は、お嬢様が風邪をひいてしまい、それでマリアさんは看病をしているので二人はいないんです」

「んゝなるほど…では、訊くけど本当に二人でいいんだね？」

村長は真剣な声で言った

中途半端な覚悟で行ってほしくないからだ

「はい！迷いはありません！」

「はい！絶対に倒すってナギとマリアさんと約束しましたし、もう行くって決めましたから！」

二人は力強く村長に言った

「そうかい…（どえやら、本気みたいだね）では今回のクエストは、場所は砂漠、ダイミヨウザザミだよ」

「ダイミヨウザザミですか」

「ダイミヨウザザミ？」

（何かしら…うーん、でも大名って名前に付いてるくらいなんだからきつと偉い何かなんだわ！きつと！）

ヒナギクはヒナギクなりにダイミヨウザザミについて考えていた
考えはヒナギクらしい考えである

「ほれ、クーラードリンクじゃ」

村長は二人に一本ずつ渡す

「ありがとうございます」

「でもいいんですか？僕達に」

「別にいいんだよ。初めての砂漠だろ？気を付けるんだよ砂漠は危険な所だからね」

村長は笑って言った

「「ありがとうございます村長さん」」

ハヤテとヒナギクは改めてお礼を言う。こんどは頭をペコリと下げて

「いいよいいよそんなに。じゃ、がんばるってくるんだよ」

「「はい！」」

二人は力強く返事をして砂漠に向かって行った

風邪（後書き）

ヒ「まさか作者がインフルエンザにかかるとは」

マ「仕方ないですよヒナギクさん、あんなに寝てない生活をしてたんですから」

ヒ「…確かにそうですね、あんな不規則で、健康に悪い生活をしてたんですから当然かもしれませんね」

マ「そうですねよ平均睡眠時間が三時間半というのはおかしすぎます」

ヒ「それは、問題ですよね…」

マ「それでも執筆はがんばってくださいね」

ヒ・マ「では次回もよろしく願います」

砂漠（前書き）

やっと更新出来ました！

いや〜大変でした

試験前日はインフルの所為で一夜漬け…

基本的に四時まで…

死にそうでした、朝は

そんな事などがありつつ

何とか執筆出来ました

誤字、脱字があると思いますが、よろしくお願いします

では、第二十六話です

砂漠

ハヤテとヒナギクは砂漠に向かって行った

それで、村を出た瞬間に岩と砂の世界に着いたのだ
要するに砂漠

「あれ？」

「え？」

ハヤテとヒナギクは呆然としていた

まあ、当たり前だろう、いきなり一瞬で砂漠に着いたのだから

「…なんで？今まではちゃんと船とかで行ってたのに…」

ヒナギクは首を傾げて言った

「うーん…なんかいきなりゲームみたいに移動しましたね」

「そうなの？ゲームでは船とかで移動しないの？」

ヒナギクが少し驚いたように言う

「まあそうですね、村を出ると数十秒で目的地の画面になります」

「じゃあこれが普通ってこと？」

「それはまだわかりません。他の場所にも行って見ない事には何と
も…」

「そっか、それじゃこの問題は次まで待たないとダメね」

「そうなりますね」

「あと、ハヤテ君」

「何ですかヒナギクさん？」

「ここ砂漠なのよね？でもあんまり暑くないんだけど…」

「それはですね、ここがベースキャンプだからです。ですがここか
ら出たら相当暑いと思えますが」

「ベースキャンプだからって…たったそれだけでこんな変わるもの
なの？」

ヒナギクが釈然とてしなないと

「まあ、ゲームの世界ですから」

「ん〜…そうか、それもそうね」

一応納得したようだ

それからハヤテとヒナギクはアイテムボックスからアイテムを取ったりなど、準備をし終える

「それでは、行きますか」

「うん」

ハヤテとヒナギクは砂漠の奥に向かった

その頃

ナギとマリアは

「そういえば、今日は何を倒すんでしょうねナギ？」

マリアがベットで横になっているナギに言った

「うーん……まあダイミヨウザザミあたりか…そこら辺だろうな」

「ナギ、ダイミヨウザザミとは何ですか？」

「ダイミヨウザザミっていうのは…でっかいカニだなカニ」

「でっかいカニですか…強いんですか？」

「イヤンクツクよりはな…ま、ハヤテとヒナギクなら絶対倒せるかな」

ナギはそう断言した

「そうですね。でも、まさかベースキャンプから出た途端にダイミヨウザザミに会ってしまうなんて事は無いですよ〜」

マリアは笑って言った

「そりゃそうだろマリア…いくらハヤテが不幸な体質でも…流石に

ベースキャンプから出た途端にダイミヨウザザミに合ってしまうなんて事は無いだろ」

ナギも笑って言った

「そうですね」

「そうだろ」

二人は笑い合ってそんな会話をしていた

それで戻って

ハヤテとヒナギクはというと

ベースキャンプを出ると、そこは一面砂だらけの世界が広がっていた
他には小さな岩がある程度

そして、太陽はその大地を照りつけていた

「暑、暑すぎない？」

ヒナギクが力なく言った

「確かに暑いですね」

「でも、なんかハヤテ君そんな暑くなさそうな顔してるわね」

ヒナギクの言ったとおり、ハヤテはそれ程辛く無さそうだった

「まあ、百度の世界を体験しましたし、慣れてますから」

ハヤテは笑顔で言った

ちなみに、百度の世界とは単行本第十五巻をお読みください

「へ、へ、そうなんだ」

(慣れてるって、いったいどんな事をしたのかしらハヤテ君)

ヒナギクはハヤテに対する疑問が増えた

「と言うより、砂漠に制服で来ることが間違いよね。もっとしっかり着込んでこなきゃいけないのに、はあ」

ヒナギクがため息を吐いて言った

「ヒナギクさん、村長さんから貰ったクーラードリンクを飲みましたか？」

「え？ただだけど」

「それでは飲んでみてください」

「うん」ヒナギクはクーラードリンクを取出しグイッと飲んだ味はあまり無く、水のような感じだが水よりもとても冷かった

その冷たさは体中を冷やしているようだった

「ぶはっ。あれ？なんかさっきより涼しく感じるんだけど」

飲む前は汗が止まらないような暑さだったが、今はそれ程では無く、すこし暑い程度だった

「これがクーラードリンクの効果なんですよ。暑すぎる所に行くときは必ず持って行くんですよ」

「そうなんだ！って！知ってたなら最初に言っつてよね！ハヤテ君！」ヒナギクは怒り気味に言った

「す、すいませんヒナギクさん。直ぐに言わなくて」

ハヤテは全力で謝った

「次からは大事なことはちゃんと言っつてよ」

「はいわかりました」

「わかればよろしい」

「あと、あの泳いでいるのは何？」

ヒナギクが指を差していった

それは、水の中のように砂の中を背鰭を出して泳いでいる生物がいた

「あれはガレオスと言います。ガレオスは基本的に砂の中にいますが、近づくと飛び出して攻撃する事があります。そして、その攻撃にあたると麻痺することもあります」

「それってかなり危険なんじゃない」

「でもそれほど強くありませんから」

「ふーん」

そして歩きながら辺りを見渡す

砂漠の中央あたりに来たところでハヤテがヒナギクに話し掛ける

「うーん、ここには…居ないみたいですね」

「ってハヤテ君、そう言えば訊くの忘れてたんだけど」

「はい何ですか？」

「ダイミヨウザミって何？」

「あつ…す、す、すみませんヒナギクさん説明するのを忘れてしまつて」

ハヤテは慌てて謝罪する

「はあ、もういいから。それでダイミヨウザミってどういう奴なの？」

「はい、ダイミヨウザミっていうのは…」

ハヤテがそこまで言った時、砂の中から何か動く音がしたその瞬間に

「危ないヒナギクさん！」

「え！？ちよ、ハヤテ君！？」

ハヤテは跳んでヒナギク突き飛ばした

あまりのことでヒナギクは動揺している

砂に着くとヒナギクの上に少しハヤテがいる状態

なのでヒナギクの顔は真っ赤だ

「ハ、ハヤテ君意気なりにするの！／＼／＼」ヒナギクの質問の

答えはハヤテが答える前に出た

その瞬間に砂からヒナギクのいたところに角の様なものが突き出たもしヒナギクがそこにいたら串刺しになり、絶命していたかもしれない

「何あれ…」

ヒナギクは呆然てしていた

「あれがダイミヨウザザミです」

ハヤテがそう言ったのと同時に、砂の中からそれは出てきたダイミヨウザザミは大きな力二だった

でかい鋏はさみと二本の足が左右付いている
先程の角の様なものは、背中に背負っている甲羅のだった
その甲羅は何かの化石だった

「でかい力二ね…」

「一言で言えばそうですね」

そんな事を言いながら二人は起き上がる

そして、ダイミヨウザザミの方を向き武器を構える

「これで探す手間が省けて良かったわ」

「そうですね」

ハヤテは笑って返す

だが、直ぐに真剣な表情になる

「それじゃいくわよハヤテ君！」

「はい！ヒナギクさん！」

そう言って二人はダイミヨウザザミに向かっていった

砂漠（後書き）

マ「ハヤテ君とヒナギクさん大丈夫でしょうか？」

ナ「なにマリア、そんな事心配する必要なんかないさ」

マ「ふふっ、そうですね。でもナギ、よくハヤテ君とヒナギクさんの二人だけで行かせる事を提案しましたね？」

ナ「だってハヤテは私にメロメロなのだぞ？別にヒナギクと二人つきりだろうがハヤテがヒナギクを好きになるはずなんて無い決まっているだろう！」

マ「あ、あゝそうでしたね、それなら大丈夫ですね」

ナ「そうだろ？心配する必要なんかないのだ」

マ「そうですね…では次回もよろしくお願いしますね」

ナ「よろしくなのだ」

ダイミョウザザミ(前書き)

明けましておめでとございます

すいません、更新遅れてしまいました

試験が終わり、「よし書くか!」そう思ったのですが…

部活で体力をほとんど使い、家に着くと爆睡

年末は年賀状に追われ時間がとれず……

そしてやっと執筆出来ました

あとら今回はやっっちゃまった感があるので温かい目で見てください

お願いします

次はもっと早く更新出来るようにがんばります

では第二十七話です

ダイミヨウザザミ

ハヤテとヒナギクはダイミヨウザザミに向かって走る

「キシヤヤヤヤ」

ダイミヨウザザミは剣をハヤテに向かって横なぎに振る

ハヤテはそれをしゃがんでギリギリで避ける

その隙にヒナギクは自分から見てダイミヨウザザミの右側に近づき

「はあ！」

正宗を袈裟がに振り下ろしダイミヨウザザミの足に当たる

「！」

ダイミヨウザザミの体勢が少し崩れる

そしてハヤテは避けた剣にポーンブレイドを振り上げる

ガッ

つと音がして弾かれる

(ヤバイ…)

ハヤテはそう思った

だが攻撃が弾かれるのは当然の事である

その原因はハヤテにも分かっていた

それは、ポーンブレイドの切れ味が悪いからである

普通は武器を強化しているのだが、ハヤテ達は全く強化をしていないので、初期装備の武器ではもう歯が立たないのである

(でも、今さら武器を強化できるわけでもないし…これでやるしかない！)

ハヤテはそう決心し改めてポーンブレイドを構え直す「キシヤヤヤヤ」

ダイミヨウザザミは今度は剣をヒナギクに振り下ろすヒナギクはそれをバックステップで避ける

その間にハヤテが正面から近づき、ポーンブレイドを顔に振り下ろすガッ

やはり弾かれてしまう

(くっ… やっぱりダメか…)

ダイミヨウザザミはヒナギクの方を向き、両方の鉄を顔の前でクロスさせる

「ヒナギクさん！避けてください！」

「え？」

ヒナギクがそう言った瞬間

ブシャヤヤヤ

ダイミヨウザザミの口から大量の水の様なものが吐かれる

「うあ！」

ヒナギクはギリギリのところを左に跳んで避けた

(危なかった…)

ヒナギクは本当にそう思った

あの勢いからして、もし当たっていたら肋骨は折れていてもおかしくなかつたからだ

「くっ！」

ハヤテはおもいきりポーンブレイドをダイミヨウザザミの足に振り下ろす

ガッ

やはり結果は同じだった

(やっぱり切れなきや意味が無い…)

ゲーム内では、弾かれても一応ダメージはあるものの、ほとんど意味が無いのである

ハヤテの攻撃を食らって直ぐ、ダイミヨウザザミは砂の中に潜った
「ヒナギクさん！ダイミヨウザザミが出てくるまで走り続けてください！そうしないとあの攻撃が当たって串刺しになってしまうかもしれない！」

ハヤテはヒナギクに向かって叫ぶ

「わ、わかつたわ！」

ヒナギクは直ぐに起き上がって武器をしまい、走りだす

ハヤテもヒナギクとは別の方向に走りだす
そうして走りだして直ぐ、ヒナギクに向かって左から何かが飛んで
きた

「！」

ヒナギクは直ぐにバックステップをして避けた

ヒナギクに向かって飛んできたものそれは、ガレオスだった

（たしかこいつの攻撃は麻痺するってハヤテ君が言ったわね…気を
付けなくちゃ！）

ヒナギクは気を引き締めて走り出した

その時ハヤテもガレオスの攻撃を受けていた

だがハヤテはゲームをやったことがあるため、割と簡単に避けていた

（もうそろそろか…）

ハヤテはそう思った

ヒナギクとは結構離れてしまった。だいたい三十メートルぐらい

そう思った瞬間に砂の中からゴゴゴと音がした

「！」

その音が聞こえたヒナギクは前に向かって跳んだ

すると直ぐにヒナギクのいたところからあの角の様なものが突き出た

（危ない危ない）

一度経験しているのでそう簡単には当たらない

ヒナギクが起き上がるうとした時

ガレオスがヒナギクに向かって飛んでくる

「そう簡単に当たるか！」

ヒナギクは飛んできたガレオスの頭に正宗を振り下ろす

「ガッ……」

ガレオスはヒナギクの目の前で沈黙した

「ふう」

ヒナギクが息を吐き、ダイミヨウザザミが出た場所を見ると

ダイミヨウザザミはいなかった

（あれ？確かそこにいたはずなのに…）

ヒナギクがそう思った瞬間に砂の中から音がした
(ヤバッ！間に合わない！)
そう思った瞬間にヒナギクは目をつぶった

ダイミヨウザザミ(後書き)

ナ・マ「明けましておめでとございます」

ナ「てか、年明けちゃったよ！十二月のはじめに更新したのに」

マ「まあ疲れてましたからね」

ナ「でも流石にこれはないだろう…」

マ「元々予定どおりに出来たこと無いですからね」

ナ「宿題も大晦日まで終わらせるてか言ってまだ終わってないしな」

マ「今回は早く更新出来ることを宝くじで二億円当たる確立ぐらいで信じましょう」

ナ「そうだな」

ナ・マ「次回もよろしく願います」

会心（前書き）

なんとか早めに更新できました

次こそは絶対に早くしなければという思いで頑張りました

ですが、今回はとにかく短いです

そしてけっこう雑かもしれない

すいません

雑とわかつているなら直せ！

と思った人

本当にその通りなんですけどね……

すいません……

次こそはもっとがんばりますので

では第二十八話です

会心

（ヤバッ！間に合わない！）

ヒナギクは目をつぶった

ザンツ！

と砂の中から角の様なものが突き出た音がしたが

（あれ？痛く…無い？）

痛みは全く感じなかった

確かに攻撃はしたはずなのに

ゆっくりと目を開けてみると、そこには

「大丈夫ですかヒナギクさん？」

「は、ハヤテ君！？」

ヒナギクはハヤテにお姫様だっこをされていた

「ギリギリのところだ間に合ってよかったです」

ハヤテは笑顔で言った

「え！？あつ…ありがとう／＼／」

ヒナギクは顔を赤くして言った

ハヤテは自分の必殺技『疾風のごとく』を使いヒナギクを救出したのである

「ではヒナギクさん、そろそろ行きますか？」

「え、ええ／＼／／」そう言ってハヤテは優しくヒナギクをおろす

（ハヤテ君にお姫様だっこされちゃった／＼／／／）

ヒナギクはまだ顔が赤かった

「あの、ヒナギクさん大丈夫ですか？」

「え！？あつ、大丈夫大丈夫、大丈夫だから」

ヒナギク必死に言った

「キシヤヤヤヤヤ」

ダイミヨウザザミがハヤテとヒナギクに向かって来る

「ヒナギクさん、頼みがあるんですが」

「何？ハヤテ君」

「あの……」

ハヤテはヒナギクに耳打ちする

「うん。わかったわ、やってみる」

「ありがとうございます」

そんな会話をしながら二人は武器を構える

「キシヤヤヤヤヤ」ダイミヨウザザミが二人の目の前まで来て
右剣を横なぎに振る

それを身を屈めてよける

そして振り終えた剣に向かって

「はあ！」

ヒナギクは力をこめて切り上げる

ドガッ

ヒナギクの攻撃が見事に当たる

剣はその威力に耐えられず、当たった部分の殻が壊れた

「キシヤヤヤヤヤ」

ダイミヨウザザミはその痛みから後ろに下がる

「これでいいのよね？」

ヒナギクはハヤテの顔を見て言った

「はい。ありがとうございます！」

ハヤテがヒナギクに頼んだのはこのことである

ダイミヨウザザミの剣を壊して欲しいということだ

理由は簡単である

殻が壊れれば攻撃が通るからだ

「では、ここから反撃かいしです！」

「ええ！」

二人は武器をダイミヨウザザミに向けて言った

会心（後書き）

ナ「本当に今回はわりと早かったな」

マ「なぜかヤル気がでたみたいですよ」

ナ「にしても、いつになったら私の出番は来るのだろうか…」

マ「まだたったの二話じゃないですか」

ナ「うるさい！うるさい！うるさい！私はメインヒロインなんだ！ヒナギクより出番が多くなkachやいけないんだ！」

マ「はいはい。わかりましたから…まあでも次回も出番は無いですけど」

ナ「作者！さっさと私を出すために書け！」

マ「それでは次回もよろしくお願ひします」

討伐（前書き）

すみません

結構遅れました

いや、部活で疲れて疲れてしまつて……

しかも、また短いです

でも頑張りましたのでよろしくお願いします

ハヤテの二十二巻買いました

やっぱりいいですね

どんどんシリアスに突入していつて、どんどん面白くなっています
次巻が待ち遠しいです

では第二十九話です

討伐

ハヤテとヒナギクは一気にダイミヨウザザミに近づいた

「はあ！」

ヒナギクはダイミヨウザザミの左足を内側から横なぎに切る

「キシヤ?!」

ダイミヨウザザミが威力に耐えきれずに足を折る

その瞬間にハヤテは壊れている鍔に切り上げる

鍔が壊れているので弾かれることはない

「これならいけますね」

「ええ」

ヒナギクは直ぐに正宗を構え直し、今度は外側から袈裟がに切るだが、今度は足が折れることなく踏みとどまる

「キシヤヤヤヤ」

ダイミヨウザザミは足を折り曲げ空高く飛び跳ねた

「え!?!」

ヒナギクはダイミヨウザザミの意外な行動に驚いているまさか蟹がこんな大ジャンプをするとは思わなйдらう

「ヒナギクさん!早く離れてください!」

「え?」

ヒナギクが動こうとする前に体が動いた

ハヤテが手を引いたからである

「///!!!」

そのためヒナギクの顔は赤らめている

(ハヤテ君と手: つないでる)

そしてダイミヨウザザミのいた所から数メートル離れた

「このくらい離れれば大丈夫でしょう」

「え、ええ、そうね///」

そしてハヤテが手を離す

「あっ……」

思わず声に出してしまった

「どうかしましたか？」

ハヤテがヒナギクに訊く

「な、何でもないわ、何でも」

ヒナギクは必死に誤魔化した

その時、空から何か落ちてくる音がした
真上から

「ハヤテ君…これヤバくない？」

ヒナギク笑顔でハヤテに訊いた

「はい…ヤバいです」

ハヤテも笑顔で言った

「…逃げる（ましよう）！」

二人は前方に飛び込んだ

その瞬間

巨体が砂漠に落ちてきた

その衝撃で砂が舞い上がり、二人に掛かる

「大丈夫ですか…ヒナギクさん」

「な、なんとか」

ヒナギクは力なく答えた

もしあのままだったら確実に逝っていただろう

二人は何とか体を起こす

「キシヤヤヤヤヤ！」

早速ダイミヨウザザミが鉄を叩きつけて攻撃してくる

「くっ」

ハヤテは後に跳んで避ける

「何か、まだまだ元気そうね」

ヒナギクも後ろに下がり、正宗を構えて言った

「そうですね」

ハヤテは少しの間考え

「ヒナギクさん、ちょっと来て下さい」

「何？ハヤテ君？」

「あの……………」

またヒナギクに耳打ちする

「わかった、やってみるわ」

ヒナギクは力強く言った

「キシヤ」

ダイミヨウザザミは剣をクロスをさせる

ハヤテはヒナギクの少し後ろに行き

「いきますよヒナギクさん！」

「いいわよ！」

ハヤテはポーンブレイドをダイミヨウザザミに向かって投げる

「いつけえええ！」

ヒナギクはポーンブレイドの後ろを正宗で力のかぎ叩いた

要するに、バットのよう打ったのだ

ポーンブレイドは一直線にダイミヨウザザミに向かって飛んでいく

ダイミヨウザザミが剣を開いた瞬間

「キシヤヤヤヤ！」

ポーンブレイドがダイミヨウザザミの口に刺さった

「キ……………シャ……………」

ダイミヨウザザミはその場に崩れ落ちた

討伐（後書き）

ナ「やっと倒した〜」

マ「そうですね」

ナ「何か今回は全体的に雑だったような気がしたんだか…」

マ「それはきつと体力の無さの所為ですね」

ナ「ダメダメだな作者は」

マ「名前が名前ですからね」

ナ「はあ…先が思いやられるな」

マ「神はいなくても奇跡は起こりますよナギ」

ナ「…そうだな」

ナ・マ「では、次回もよろしく願いします」

砂漠の夜（前書き）

何とか更新できました

すみませんまた遅くなってしまつて

なかなか話が思いつかなくなってしまつて…

なのでまた短いです

次こそは次こそは長くと思つてはいるんですけど…

はあ…

ですが、なんだかんだで三十まできちやいました
こんなにかかるとは思いませんでした
もっと早く書く予定だったんですけど

これからも更新は遅くなると思いますが
これからもよろしく願います

では第三十話です

砂漠の夜

ダイミヨウザザミはその場で崩れ落ちた

「終わったの？」

「多分終わったと思います」

ハヤテが笑顔で答えた

「ふう、何とか倒せてよかった」

ヒナギクが体を伸ばしていった

「今回はヒナギクさんと二人だけだったので少し不安でしたが、何とかなつて良かったです」

ハヤテは笑顔で言った

「ふうん…それは私が頼りないって事かしら？」

ヒナギクが冷ややかな目をして言った

「いえ！…別にそういう事ではなくてですね、その…」

ハヤテは返答に困った

「うふう、冗談よ冗談。やっぱり私だつて不安だつたわよ」

ヒナギクは笑つて言った

「でも、ハヤテ君がいたから大丈夫つて思えたのよ」

「えっ！？」

ハヤテ驚いた

まさかヒナギクがこんなことを言うとは思わなかつたからである

ヒナギクが自分を頼りにするとわ

「えっ！？つて何ハヤテ君？」

「いえ、あの、まさかヒナギクさんがそのようなことを言うとは思わなかつたので」

「もう！私だつて女の子なんだからね！」

ヒナギクはハヤテに怒った

ハヤテには本当の自分を知ってほしい

本当の自分もつとか弱いことを

「す、すいませんヒナギクさん」
ハヤテは頭を下げて謝った。「わかればいいのよ、わかれば」
こんな事だからヒナギクはか弱い人だと思われないのである
「それじゃそろそろはぎ取りましょ」
「そうですね」そうして二人はダイミヨウザザミに向かって歩きだした

ダイミヨウザザミに着いたハヤテはポーンブレイドを抜き取る

「まさか本当にこんなことが成功するとは思いませんでした」

ハヤテは笑いながら言った成功するかも分からないでやったの？」

ヒナギクがあきれたように言った

「あはは…でもヒナギクさんなら成功してくれると信じていました
らか」

ヒナギクに向かって笑顔で言った

「ありがとう」

ヒナギクも笑顔で言った

そんなこんなで、二人は剥ぎ取り終えた

「それでは帰りましょうか？」

「ええ」

そうして村に帰る途中

「ハヤテ君、なんか寒くない？」

ヒナギクの体は震えていた

「確かにそうですね」

空は暗くなり月と星が輝いていた

都会では見ることが出来ない、とても美しい風景だった

だが、今はそれどころではない

「もう夜ですからね、砂漠は夜になるとかなり寒くなりますね」

「そうだったわね…ヘクチ！」

ヒナギクはかなり寒そうだった

まあ、当たり前だろう。夜の砂漠は、五度くらい、もしくはそれ以上寒くもなるのだから

（どうすればいいんだ、ホットドリンクなんて持ってないし）

ハヤテは考えた

そして思い出した

あの日何をしたのかを

「ハヤテ君!？」

ハヤテはヒナギクに自分が着ている執事服の上着を羽織らせた

「これで少しは暖まりますか？」

「う、うん… / / / / /」

ヒナギクは顔を赤らめる

（あつたかいな、ハヤテ君の服…）

ヒナギクは幸せな気持ちでいっぱいだった

そのまま二人は村に帰っていった

砂漠の夜（後書き）

ナ「三十話だー！」

マ「三十話ですね」

ナ「長かったな、もう七ヶ月ぐらいたつぞ」

マ「遅いですね、もっとがんばってほしいですね」

ナ「まったくだ。他の作者がどんなにがんばっているか…ほぼ毎日更新しているやつもいるというのに」

マ「まあでも、自分らしくやるのがいいんじゃないですか？」

ナ「でも、まあ挫折しなかったことは良かった事だ」

マ「これからもがんばってほしいですね」

ナ・マ「次回もよろしくお願いします」

完治（前書き）

何とか更新できました…

今回も、はぁ…短いです

すいません…

何だか書けないんです

疲労や疲労感で疲れてしまつて…

前回は誤字、脱字が多くすいませんでした
気を付けていたつもりなのですが

それと、砂漠の・五度はマイナス五度です

それからこれは自分のイメージなので実際とは違つかもしれませんが
すいませんでした

では第三十一話です

完治

「おや？戻ってきたようだね」

村長は二人を見えるとそう呟いた

ヒナギクはもうハヤテの上着は羽織っていなかった
砂漠から戻ったのでいらなくなったからだ

ヒナギクとしてはもう少し着ていたかったのだが…

「今回はどうだったかい？」

「何とかになりました、結構危なかったですけど」

ハヤテはそう言っただいミヨウザミの甲殻を見せる

「ほんとだね…それじゃ報酬だよ……」

村長はそう言いつつ革袋を渡す

「それじゃまた明日ね」

村長は笑って言った

「はい」

二人は笑顔ではっきりと言った

それから二人は家に戻って行った

「ただいま帰りました」

「ただいま」ハヤテが家のドアを開けてそう言った

そうすると、中から足音が近づいてきた

「ハヤテー！」

ナギがそう叫んでハヤテに抱きついた

「お、お嬢様！？」

ハヤテは予想外なことで驚いている

「無事に帰ってきてくれて良かったぞ」

ナギは安心した顔で言った

「心配してくれていたんですか？」

ハヤテがにこやかに言った

「ま、まあ少しくらいは心配していたぞ…やっぱりハヤテは強くて
も心配だからな…」

ナギは言った

「ありがとうございますお嬢様」

ハヤテは笑顔で言った

ヒナギクはその光景を羨ましそうに見ていた

（いいな…私もナギみたいにハヤテ君に抱きつきたいな…もし私
がそうしたら…）

「ハヤテ君！」

ヒナギクがハヤテに抱きつく

「ヒ、ヒナギクさん?!」

あまりのことにハヤテは戸惑っている

「えへへ〜ハヤテ君に抱きついちゃった」

ヒナギクは満面の笑みを浮かべて言った

「ヒナギクさん…」

ハヤテは困ったように言った

「ハヤテ君は、私に抱きつかれちゃ、嫌？」

ヒナギクは少し泣き目になりながら言った

「いえ！別にそんなことはありません！そんなことあるわけないじ

やないですか」

ハヤテはヒナギクを泣かせまいと必死に弁解する

「…本当に？」

ヒナギクが小さくか弱い声で言った

「本当です」

ハヤテは笑って言った

「良かった〜嬉しい！」

ヒナギクはより一掃強く抱きつく

「大好きだからねハヤテ君」

ヒナギクは明るい声でしっかりと言った

『つて、こんなの私じゃな——い！

こんな事が出来るわけないじゃない！

抱きついてさらにその後こゝ告白なんて…』

ヒナギクは頭を横に全力で振った

「あの…ヒナギクさん？」

「どうしたのだヒナギク？」

ハヤテとナギは不思議そうにヒナギクに言った

「え？」

それもそのはず、いきなり頭を横に全力で振られたのだ

そんな事をされたら普通はビックリするだろう

「一体何をしているんだヒナギク？」

ナギが質問してきた

(どうしよう…なんて答えよう…)

まさか『ハヤテ君に抱きつく事を考えていてこうなった』などとは言えるわけがない

「ほ、ほら！あれよあれ…筋肉痛にならないようにのストレッチよストレッチ…」

苦しい言い訳だった

「…ふん…そうか…」

一応は納得したらしい

ちゃんとは納得していないようだが

(危なかった…)

ヒナギクは心の中で安堵する

「あの、お嬢様そろそろ降りてくれませんか？」

ハヤテが苦笑いして言った

「……わかった」

不服そうにナギはハヤテから降りた

「そう言えばもう風邪は大丈夫なんですか？」

「それならもう大丈夫ですよ」

部屋から出てきたマリアが言った

「もう完治しましたから」

「良かった、それを聞いて安心しました」

ハヤテ胸を撫で下ろす

「マリアの看病がよかったからなのだ」

何故かナギが自慢げに言う

「ありがとうございますナギ」

「確かにマリアさんの看病なら早く治るのも納得かも」
ヒナギクが頷いて言った

「では食事に行きますか？」

マリアがみんなに訊く

「そうだな」

「そうですね」

「そうしましょう」

三人はそれぞれ返事をし、ハヤテとヒナギクは武器を部屋に置いてから集会場に向かった

完治（後書き）

ナ「やっと出番だー！」

マ「本当、やっと出番が来ましたね」

ナ「ダイミョウザザミが長すぎるのだ、更新の」

マ「確かにそうでしたね」

ヒ「やっと私此処に出れた」

ナ「な！ヒナギク！何で此処にいるのだ！」

ヒ「別にいいじゃない減るもんじゃないし」

ナ「私達の出番が減るわ！」

マ「落ち着いてくださいナギ」

ナ「マリア……」

マ「別にいいじゃありませんか、三人の方が話が出ますし」

ナ「……まあ私が何を言っても無駄なのは分かっているかな」

ヒ「ありがとうナギ。まあなんだかんだで」

ナ・マ・ヒ「次回もよろしくお願いしますー！」

鍋（前書き）

どうもです

なんとか最近は一週間のペースで書くことが出来ています
これからも、なんとかこのペースを維持していきたいです

そしてなんとか今回は前よりは長くなりました
これからもこのくらい書いていきたいです

では第三十二話です

ハヤテ達四人は集会場に着き、ドアを開けて中に入った
相変わらず集会場の中はハンター達で一杯だった

「…やっぱり騒がしいな…」

ナギが愚痴をもらした

ハヤテはそれを苦笑いしながら見ていた

「それにしても席は開いているのか？」

ナギがもつともな質問をする

「えーとですね……………あ、ありましたよ」

「…え!?!?!」

三人は驚いた

この入り口から、それもこの客の多さから空きを見つけるなんて、
どんだけ視力がいいんだ、と言うことになるからである

「流石ハヤテだな…」

「そうね…」ナギとヒナギクは小声で言った

それからハヤテ達は席に座った

席順は

ヒナギク ハヤテ

マリア ナギ

の順である

そしていつもどおり席に座るとすぐに来た

「いらっしやいませー!ご注文をどうぞ!って皆さんじゃないです
か」

と店員は言った

「…レナ(さん)!!」「…」

四人は同時に言った

「いやいやどうも。と言うことはご注文はおまかせでいいですか？」

「うむ。それでたのむ」

ナギが代表して言った

どうせ注文は『おまかせ』と決まっていたからだ

「はいはい了解しました！とそうだそうだ、ところで今日は何を倒したんですか？」

「今日ですか？今日はダイミョウザミを倒しました」

ハヤテが質問に答える

「おゝ…相変わらず順序が滅茶苦茶だねゝでは少々お待ちください！」

レナは元気良く答え、集会場の奥に行った

「これですぐ戻ってくるんだよな」

ナギが呟く

「そうですね」

ハヤテが言った瞬間に来た

「お待たせしましたー！今夜は鍋やるべー！」

レナは元気にそう言い、テーブルの中央に蓋をかぶせてある鍋をドーンと置いた

そして、すぐに小皿と箸をハヤテ達の前に置く

見事な早業である

「すこ…」

ヒナギクは思わず声に出してしまう

「ではでは」

そういつてレナは鍋の蓋を取った

すると白い湯気が昇った

中には茹でられ赤くなつた蟹の足が入っていた

他には野菜が色々

「おおゝ」四人は思わず歓声を上げる

「いやゝ食料庫に残っていてよかったよ」

レナが満面の笑みで言った

「だから私達に何を倒したのか訊いたんですね」
マリアが言った

「どうせなら何か関連のあるものにしようと思ひまして」

レナは笑って言った

「でもなんで蟹は四等分したようになってるんですか？」

ヒナギクがレナに訊いた

確かに鍋に入っている蟹の足は四つに切られていて入っている

普通はそのままで、ただ適当な長さに切つてあるだけで入っているのに

「あ、それはただたんに大きすぎるので切つただけです。なんせダイミヨウザザミの足ですから」

「あゝなるほど」ヒナギクは納得した

少し前、実際にそれを見たのだから

「ではどうぞ！」

「……いただきます」……

四人は手を合わせて言った

それぞれの箸で蟹を取る

「はむ……おー、うまいではないか」

「確かにおいしいですね」

「ほんと、おいしい」

「おいしいですね」

四人がそれぞれの感想を言つて食べる

「それはありがとね」

レナが言う

「また、少し此処にいてもいいかい？」

レナがハヤテ達に訊いた

「いいですよね皆さん」

ハヤテがみんなに訊いた

「別にいいぞ」

「うん」

「いいですよ」

それぞれ答える

「ということなのでどうぞ」

ハヤテが隣の椅子を引いて言った

「ありがとうございます！」

レナは元気に言っつて椅子に座る

その時、ヒナギクは目でマリアに合図をした

コクリとマリアは頷く

「あのレナさん」

「なんだいヒナギクさん？」

「あの、どうやってこんなに早く料理が作れるんですか？」

そう、皆さんは忘れているかもしれませんが、これは二十三話の後書きに言っつていたことである

実際に訊けばいいのでは？という答えにいきついたので今訊いたのである

「ずっと気になっていたんです」

「私も気になっていました」

ヒナギクに続いてマリアも訊く

「う〜ん…どうやって料理を早く作っつているかは…」

「作っつているかは…」

ヒナギクとマリアは同時に言った

「それは…」

「それは…」すこし間沈黙が流れ

「禁則事項です」

レナは人差し指立てて言っつた

「え?!」

ヒナギクとマリアは同時に言っつた

まさかこんな答え方をされるとは思っつてもいなかっつたからである
「ま、まさかこの世界でこれが出るとは…」

「そ、そうですね…」

ナギとハヤテも驚いている

ヒナギクやマリアと違い、元ネタが分かっているのではなおさらである

「願ったのか！願ってしまったのかあの御方が！」

「いやいやお嬢様、あれは空想のお話なんですから、そんなことがあるわけ無いじゃないですか」

「ではハヤテはこの世界にあれが有るとでも言うのか？」

「それも考えにくいですけど…」

二人がこんな口論をしているとき、ヒナギクとマリアは頭に？を浮かべている

それもそうである、二人は真面目さんでラノベなど読むわけが無いのだから

「おいレナ」

今度はナギがレナを呼ぶ

「なんだい？」

「なんでレナはその言葉を知っている！」

大きく強くナギは言った

「ん〜……それは」

「それは？」

「禁則事項です」

レナは笑顔で言った

それからそのことは謎のまま終わり

レナに関する謎がまた増えた

そして話題は変わり、今日の狩りの事になる

「〜ということなんです」

ハヤテが大体の事を説明し終える

「へ〜、すごいね君らは」

レナは素直に感心

「流石はハヤテだ！まさかそうやって倒すとは」

ナギはハヤテを褒める

「すごいですね〜、ハヤテ君とヒナギクさん」

マリアもにこやかに言った

「いや〜まさかまさか、そんなやり方で倒すとは…君たちは楽しいね相変わらず」

はははと笑いながらレナは言った

「その時は必死でしたから」

「私もあんなやり方で倒すとは思わなかったわよ」

ヒナギクは笑いながら言った

「それでなんですけどお嬢様」

「ん？なんだハヤテ？」

「そろそろ武器を強化しないといけないと思うのですが」

「確かに、ハヤテ君の攻撃は弾かれていたしね」

「そうなのか！？それはまずいな…」

ナギがそう言った後

「そう言えば、今は何の武器を使っているんだい？」

レナが興味本位で訊く

「今は初期の武器を使っていますが」

「は！？初期の武器！？」

レナは今まで一番大きな声を出した

「！！！！！！！！」

あまりに大きい声だったので思わず耳を塞いでしまう

「っ、は、ははははは！あっはははははは！」

「！！！！え！？！！！！」

その後直ぐに大笑いをしだしたレナを見てびつくりする四人

「い、いや、ごめんごめん、ははははは！、まさか初期の武器とは、すごい、すごいよ君たちは！」

レナは大きな声で言った

その声はとても嬉しそうで、楽しそうだった

「そ、そんなにすごいんですか？」

ヒナギクが言った

「すごいすごい、初期の武器でダイミョウザザミを倒すなんて、普通しないし、そう簡単に出来ないよ」

「そうだったんですか……」

「でも、そろそろ無理なんじゃないかな。これからはダイミョウザザミより強いやつもたくさん出るし」

レナは真剣な声で言った

「…それじゃ、そろそろ明日にでも強化するか」

ナギは言った

「はいお嬢様」

「そうですねナギ」

ハヤテとマリアが言った

「あの…私はどうなの？」

ヒナギクがみんなに言った

「ヒナギクさんも初期の武器なんでしょ？なら……」

「いや、ヒナギクは初期の武器ではない…正宗という木刀だ」

「正宗？木刀？そんな武器初めて聞いたよ。いや、ほんと、君たちは不思議で楽しいね」

レナは笑顔で言った

「それじゃ私はこのへんで、また明日もがんばってねハヤテ君、ナギちゃん、ヒナギクさん、マリアさん」

「はい、レナさんもお仕事頑張ってください」

「また明日な」

「ええ、ありがとうレナ」

「ありがとうございますレナさん」

レナは手を振って集会場の奥に戻っていった

その後、ハヤテ達は料理を食べ終え、家に戻った

鍋（後書き）

ナ「結局謎のまま終わったな」

マ「そうですね…知りたかったんですけどね」

ヒ「残念でしたよねマリアさん」

ナ「と言うか、お前たちはあんな事を話していたのか」

ヒ「あんな事では何よあんな事とは」

マ「気になったんですからいいじゃないですか」

ナ「ま、まあ別に良いのだが、そんな強く言われるとは…」

マ「もしあの秘密が解ればかなり料理が楽になったんですけど」

ヒ「いやいや、もうマリアさんは十分早いですから」

マ「そうですねか？」

ヒ「そうよねナギ？」

ナ「ああ、マリアの料理人早いし美味しいよ」

マ「そうですねか、ありがとうねナギ、ヒナギクさん」

ヒ「はい」

ナ「うむ、では次回もよろしくなのだ」

話（前書き）

毎週なんかがんばっています、最近のことですが…

それと、とうとうこの時期が来てしまいました
やつですテストです

なので、この二〜三週間は更新できません
すいません

でも、今回は頑張らなければいけないのです！
何故なら、前は『あいつ』の所為で点数がヤバイことになり、今
回失敗すると…留年…になる可能性が無いとは言いきれないので

それでは第三十三話です

話

ハヤテ達が家に着いたとき

「よし！早速グツパをやるぞ！」

ナギが元気に言った

「もうやるんですかお嬢様？」

「当たり前だ！昨日は風邪の所為で出来なかったが…今日こそはなにがなんでもやるのだ！」

ナギは力強く言った

「そう言えば『もう一回やる』って言ってたわね」

（もう忘れてると思っていたのに…はぁハヤテ君と別になっちゃうのかな…）

ヒナギクは心の中でへこんでいた

ハヤテと部屋が別になるかもしれないからだ

まあ好きな人と離れてしまいかもしれないのだからヒナギクでもへこんでしまう

「それじゃいくぞ！」

（今度こそハヤテと一緒にになるのだ！）

「グツと」

（またハヤテ君と一緒に！）「パ！」「パ！」「パ！」

結果

パー

ハヤテ

マリア

グー

ナギ

ヒナギク

「な、なにー！」

「ま、まさか…」

ナギとヒナギクはぼうぜんとする
まさか、まさかマリアがハヤテと一緒にになるとは考えもしなかった
からだ

「あら、今度はハヤテ君とですね」

「ほんとですね」

当の二人はそれほど驚いたりはしていない

「く…」

（こうなったら明日もう一回だけ、もう一回だけやるぞ！と言うか、
でもなあ…）

流石にしつこすぎるか、そう思ったナギはこれでグッパをすること
を最後と決意した
そしてヒナギクは

（はあ、とうとう離れちゃったか…ざんねん）

そんなすごくは気にしていなかった

「で、ではそろそろ寝るか…」

ナギは元気無く言った

今度こそ絶対一緒にになれる、そう思っていたからだ

その分落ち込み具合も大きい

「そうしよう」

「そうですね」

「そうですねナギ」

そう言っつて部屋のドアの前まで来る

「おやすみ…」

「おやすみハヤテ君マリアさん」

「「おやすみなさいお嬢様、ヒナギクさん」」

二人はそう言っつて部屋に入っつていった

「それでは私達も寝ましようか？」

「そうですね」

そうしてハヤテとマリアも部屋に入っつていった

ナギ・ヒナギク

「はあ…」

ナギは部屋に入るとまた溜め息を吐いた

「ま、まあ元氣出してよナギ。別にハヤテ君に会えなくなるわけじゃないんだし」

「……………うん」

ヒナギクがナギを必死に励ますがあまり効果なし

(まさか、ナギがこんなに落ち込むなんて…)

「そんなに落ち込まないで。ナギは元氣な姿が一番似合っつんだから
ヒナギクがさらに元氣づけようとする

「ヒナギク…」

「だからね？元氣出して」

ヒナギクは優しく言った

「そうだな…落ち込んでいても仕方ないな。ありがとなヒナギク」
ナギに笑顔が戻る

(良かった元気になってくれて)

ヒナギクは心の中で安心した

「それじゃ寝るか」

「そうね」

二人は電気を消し、ベットに入る

まあこのまま寝るわけが無いのだが

「なあヒナギク」

「何？ナギ」

「ヒナギクは、その…す、好きな人とかいるのか？／／／／」

「え！／／／／」

予想外の質問に思わず声を上げてしまう

「な、なんでそんなことを聞くの？／／／／」

「いや、その、あんまり二人で話してないし、せっかくだから訊こうと思っただけ」

ナギが言った

「なるほど…」

(確かに最近はナギと二人で話すことはあまり無かったから良い機会かも)

ヒナギクはそんな事を思っていると

「それで…どうなんだ？」

ナギが興味津々な声で言った

さっきの落ち込みは何処へ行ったのやら

「えと、好きな人は…」

「人は？」

「いる…かな？」

ヒナギクは笑顔で言った

「ほ／／／／で、それは誰なのだ？」

さつきよりも声が大きくなる

「誰って…／＼／＼って、言ったらナ…」

そう言い掛けヒナギクは言い止まった

ヒナギクはこう言おうとした

『言ったらナギも教えなさいよ!』

だがその質問は殆ど意味が無い。ナギが好きな人なんて今までの行動などで分かっている

ハヤテだ

そんな分かっている答えを聞いてもフェアではない

その瞬間的に思い、言い止まった

「?何て言おうとしたんだヒナギク?」

ナギが言った

「えっと…あの…その…」

ヒナギクは必死で考えた、そして出た答えは

「そ、そうだ明日は一体何と戦うのかしらね?」

話をはぐらかそうとする

「は?なんで意気なり?」

「まあ好きな人は、秘密よ秘密」

ヒナギクは元気よく言った

「は!?!なんで結局そうなるのだ!」

「それじゃもう寝るから」

「って寝るなよ!」

「おやすみナギ」

「おやすみって、そうではない!」

「すう…すう…」

「くっ…おやすみヒナギク」

ナギは笑って言った

そうして二人は眠りについた

ハヤテ・マリア

「いや、まさかマリアさんと一緒になるとは思いませんでしたよ」
ハヤテがいつものように笑って言った

「ふうん、でも、久しぶりにハヤテ君と二人で話するので私は良かったと思いますよ」

マリアが言った

「そう言えば、最近あまり二人では話してないですね」
ハヤテが言い

「あと、なんでお嬢様はあんなに落ち込んでいたんでしょうか？そんなにマリアさんと離れたくなかったのでしょうか？」

流星はハヤテである
相変わらずの発言

「さ…：…なんででしょうかね？」

（やっぱりハヤテ君は何処に来ててもハヤテ君ですね…）
落ち込んでいる原因が自分と一緒にじゃないからとはどうあっても導きだせないであろう

「それにしても、今日は大変でしたね」
ベットに座って言った

「まあ大変でしたね、やっぱり二人だけというのは思っていたより辛すぎますから」ハヤテもベットに座り、言った

「そうですね、やっぱり四人で行かないといけませんね」

「そのとうりです。これからはほんとに強いのが出てくるかもしれませんが」

「それは大変ですね…このままで大丈夫なんでしょうか？」
少し不安そうにマリアは言った

「うん…でも、武器を強化しますし、なんとかかりますよきっと」

ハヤテは明るく言った

「マリアを出来るだけ不安にさせないように

「そうですね、ハヤテ君の言う通りですね」

「マリアも笑顔で言った

「ではそろそろ寝ましようか」

「そうですね」

「ハヤテが電気を消し、二人はベットに入る

「そうでした、ハヤテ君」

「はい、なんですかマリアさん？」
「ハヤテ君は、ヒナギクさんの事が好きなんですか？」

「マリアが楽しそうに言った

「!?!? な、何でそんなこと訊くんですか？」

「ハヤテは明らかに動揺する

「マリアの質問が予想外すぎたからだ

「理由ですか？ただ単に気になっていたので。よく話していただきますし」

「マリアは自分が思っていたことを正直に言った

「そ、そうですね…」

「それで、どうなんですかハヤテ君？」

「興味津々に訊いた

「え」と…好きと言われれば好き…です…」

「ハヤテはもごもごした感じに言った

「ふん、そうですねですか」

「マリアはすごく嬉しそうだった

「…それではおやすみなさいマリアさん」

「はい、おやすみなさいハヤテ君」

「そうして二人は眠りについた

話（後書き）

ナ「まさか一緒になれないとは……」

マ「しょうがないですよ作者さんが決めたことなんですから」

ヒ「それを言うなら私だって……」

ナ「？なんだヒナギク？」

ヒ「え？いや…な、なんでも無いなんでも無い」

ナ「そうか、にしても…作者は私に恨みでもあるのか！」

マ「いや、それはないと思いますけど」

ナ「うゝゝ、作者のバカバカバーカ！」

ヒ「ナギったら」

マ「それではまた二〜三週間後に」

ナ・ヒ「よろしくお願い（なのだ）します…！」

武器（前書き）

お久しぶりです

まず最初に、すいません

相変わらず更新遅くて…

早くしようと思張っているんですが…

まあもうすぐ春休みなのでもっとがんばります！

それとテストなんです…

まあ酷かったですね

更新止めてまでがんばったのにもかかわらず平均七十にもいかない

とは…

はあ…

次こそは次こそはきつと良い点を取ります！

たぶん…

今回はなんか話がうーんという感じかも知れませんが
第三十四話です

武器

「うん…」

朝日か差してハヤテは起きた

隣を見るとマリアの姿が無かった

(どこに行ったんだろう?)

ハヤテがそう思っている

「ハヤテ君、おはようございます」

後ろから声がした

「マリアさん、おはようございます」

すこし驚いたが普通にこたえる

「それにしてもマリアさんは起きるのが早いですね」

ハヤテは素直に思ったことを言った

「まあ昨日はあんまり疲れてませんでしたからね」

マリアが言った

「もうお嬢様とヒナギクさんは起きましたかね？」

「ハヤテ君、ヒナギクさんはともかくナギが起きていると思いますか？」

マリアがあきれた顔で言った

「あゝ、そうですね…」

ハヤテは苦笑いして言った

「そう言えばハヤテ君はこの世界に詳しいんですよ」

「まあ大体の事は分かりますけど」

「それじゃハヤテ君、この世界についていろいろ教えてください」

「はい、わかりましたマリアさん」

そうしてハヤテはマリアにこの世界についての説明を始める

三十分後…

ハヤテはいろいろな説明をした

モンスターの名前や姿の特徴、ボウガンの種類と弾の種類、アイテムのこと等々いろいろと

「…と言うところですかね」

「そうですね…いろいろとありがとうございます、ハヤテ君」
笑顔でマリアは言った

「いえいえ、また分からない事があつたら言ってください」

ハヤテがしっかりと言った

「はい」

マリアは元気に言った

その時

トントン

ドアをノックする音がした

「ヒナギクですけど、起きていますか？」

ヒナギクの声だった、ノックをしたのもヒナギクだろう

「はい、起きていますよ」

「はい」

二人がそれぞれ返事をする

「それじゃ入りますね」

ガチャ

とドアを開けてた

「おはようございます、ハヤテ君、マリアさん」

ぺこりと

「おはようございますヒナギクさん」「
同時に言った

「ヒナギクさんは早いですね」

素直にマリアが言った

「まあいつもこのくらいに起きてますから」

笑いながら言った

「お嬢様は…起きてます…か？」

ハヤテは小さく言った

「ナギはまだ寝てるけど」さも当然のようにヒナギクは言った

「やっぱりそうですか」

わかっていたことだが、なんとなく落ち込むようなそんな感じがした

「もう行くのなら起こすけど？」

ヒナギクは言った

「それではお願いしますわ」

ハヤテの代わりにマリアが言った

ハヤテは甘いので起こさないで下さいなどと言わなくも無さそうなので

「それじゃ少し待っていてください」

ヒナギクは部屋に戻っていった

十分後…

ドアが開いた

「お…おはようなのだハヤテ、マリア」

まだめっちゃめっちゃ眠そうだった

目はまだうとうととしていてはつきりしていない

そして欠伸もしている

「それでは朝食を食べに行きますか」
マリアので四人は集会場に行った

そこで朝食を食べ終えた
またレナはいなかったそうな

家に着き、武器を持って外に出た
そして昨日ナギが言ったとうりに武器屋に行った

「ここだったのね」

ヒナギクが歓心したように言った

今まで見たことはあったが、何なのかは分からなかったからだ

「すいません、武器の強化をお願いします」

ハヤテが店の人であろうおじさんに訊いた

「いらっしやい、武器の強化か。ちょっと見せてくれるか」

言われた通りにハヤテ、ナギ、マリアは武器を見せる

ヒナギクは強化する必要が無いので見せなかった

「っと、全部初期の武器だな、強化するって言ってたがいつそのこ
と買い替えちまったほうが良いんじゃないのか」

おじさんが言った

「そうですね、どうしますかお嬢様？」

「まあ、ああ言ってる事だしそうするか」

ナギの一言によりおじさんの言うことにする

「ところで素材は何があるんだい？」

「素材ですか？確かドラランポスとイヤンクックとダイミョウザザ
ミがあります」

ハヤテが言った

「うーんそれじゃその青髪はレッドストライプ、そこのおちびさ

んはドスバイトダガー、そしてメイドさんはショットボウガン・白が良いんじゃないか」

的確にそれぞれに合った武器を言った

「おちび言うな！」

ナギがいち早く言った

「まあ落ち着いて下さいお嬢様。それよりも根本的な問題があるんですから」

そう、それには根本的な問題があった

「でもその武器は素材が足りませんが」

そう、素材が足りないのだ素材が無ければ武器は作れない

当たり前のことだ

「ああ、いいっていいってそれはこっちでなんとかするから」

意外な答えが返ってきた

こんなことはゲームでは絶対に有り得ないことである

「え、でも何ですか」

「だって君たちは村長に一目置かれているんだろっ？そんなすごいならなあ。このくらいしたくなるっでもんさ」

おじさんは大きな声で言った

「は、はあ」

その声に少し圧倒されてしまう

「でも、お金の方はまけないからな」

笑顔で言った

それから三十分後…

ハヤテ達は今までの報酬+売った武器のお金で武器を新調した

「本当にいいんですか」

未だに信じられないという感じである

「いいつて言っただろう」

おじさんは笑って言った

「ありがとうな」

ナギが言った

「いいつてことよおちびさん」

「おちび言っな！」

ナギが怒鳴った

「とにかくありがとうございます」「マリアがペこりとお辞儀をして
言った

「別にいいつて。それじゃがんばってこいよ」

「」「」「はい！」「」「」

四人ははつきりと言った

「来たね、今日は全員かい」

村長が言った

「お嬢様が回復しましたので」

「成る程ね…それじゃ今日のクエストは…」

「」「」「今回は…」

「森丘でリオレウスだよ」「なっ！」

「！」

「？」

三人は啞然とし

一人は首を傾げていた

武器（後書き）

ナ「お久しぶりなのだ」

マ「約一ヶ月ですかね？かかりすぎかもしれませんがね」

ヒ「でも勉強のためだったんだからしかないんじゃない」

ナ「なんだヒナギク知らないのか？この作者はな試験勉強期間中に映画見てんだぞしかもきっちり最初から最後まで！」

マ「本当、勉強するきあつたんですかね」

ヒ「…」

ナ「しかも、時間が一時からは…もう馬鹿としか言いようが無いな」

マ「もうダメですね」

ヒ「…ま…真面目にやれー！…」

ナ「そうなるよな、うんうん」

マ「それではまた次回もよろしくお願いします」

龍（前書き）

なんとか早めです

と言うより短いだけなんですけど…
すいません

それと、春休みの宿題が多すぎです！

あんなの終わるわけ無いんですよ

はあ…

これじゃなかなか執筆出来ないかもしれません…
学校のバカ…

そんなこんなで

第三十五話です

龍

「ということ、来たな森丘に」

そうハヤテ達は森丘に来ていた

ここは密林ほど木は茂っていないが、適度に生えている

そして丘と言うだけあって高く景色がよく見える

そして、ナギは少し動揺していた

ダイミヨウザザミの次にリオレウスとは予想外すぎたからである

強さに差がありすぎるからだ

それと一瞬で此処に来たので

そのことはハヤテが説明したので納得したようだが

「ここが森丘なのね…」

ヒナギクはかなり沈んだ声で言った

そう、ここは見晴らしの良いところなのである

景色がいいところなのである

高所恐怖症のヒナギクにとっては地獄なのだ

と言ってもまだ此処はベースキャンプなので、景色などはまだ見えない

「ここにあのリオレウスが居るんですね」

マリアが言った

「そうだ、そう言えばリオレウスってどんな奴なの？」

ヒナギクは二人に訊いた

「リオレウスはな…何ていうか、赤い鱗の龍だな龍」

ナギが説明する

「赤い龍ね…」

ぼちぼちわかったというような顔をした

「結構強いらしいですよ」

マリアが言った

「まあ確実にダイミヨウザミよりは強いな」
当たり前のようにナギは言った
(やっぱり楽にはいかないわね)
ヒナギクは、はあとため息を吐く
「それでは行きましようか」ハヤテが言った
アイテムボックスから応急薬などを取り、ハヤテ達は奥に進んでいった

ベースキャンプを出ると、そこには川が広がっていた、その水を飲みにアプトノスの群れがいた
それと案外この場所はあまり高いところではなかったので、ヒナギクはホツと胸を撫で下ろしていた
「うーんと…ゲームだと大体この場所にいるよな」
ナギが地図を広げ、ある場所を指差す
その場所はモンスターの巣となっている場所である
「そうですね、ではここを目指しましょう」
そういう事でハヤテ達はモンスターの巣となっている場所に向かっていった

そしてその手前のエリアにハヤテ達はいた
途中にランポスがいたが、そこは無視して逃げてきたリオレウスの戦闘の前に体力を使わないということでしたのだ
そしてこの場所、大きな岩がある
そして、見晴らしがすごくよい
遠くの景色までよく見え、最初の場所とは比べものにならないくら

いの高さである

(な…なんでここはこんなに高いのよ!)

ヒナギクは心の中で叫んでいた

そして一人ブルーになるヒナギク

「後はここを上げれば目的地だな」

そんなヒナギクを気にせずにナギは言った

そこは一メートル位の岩が三つ階段のようになっていて、その上に洞窟の入り口の様な穴が開いていた

「もう一息ですね」

マリアが言った

「何でこんなところに住んでるんでしょうかね…」

ヒナギクは暗く言った

「仕方ないですよヒナギクさん、手早く終わらせて早く帰りましょ

う」ハヤテは笑顔でヒナギクを励ます

「ハヤテ君…うん!」

ヒナギクは少し元気になる

「ほら早く行くぞハヤテ!」

ナギが岩の方に歩いていくその瞬間

「お嬢様!」

ハヤテがナギを直ぐに抱え、その場から横にジャンプした

その場所に何かが降ってきた

地面に衝撃が走る

ナギがいた場所には直径一メートル位の穴が空いていた

「あ、ありがとうハヤテ」

「無事でなによりですお嬢様」

ハヤテはナギに笑顔を向け丁寧に降ろす、その後に空を見上げる

ヒナギク、マリアも空を見る

空には赤い点の様なものがあつた

その点はすごいスピードで近づいてきた

そして四人の後ろに降りた

それは赤い鱗に被われ、左右に大きな翼を持つ龍、リオレウスだった

龍（後書き）

ナ「とうとうリオレウスか…」

マ「結構進んだんじゃないんですか」

ナ「まあな、それと結構強いし。ヒナギク、これからは本当にがんばらないとだからな」

ヒ「はあ…なんであんな、あんな高いのよ…おかしいわよあんなの…」

ナ「…まあ、がんばるかマリア」

マ「…そうですねナギ」

ナ・マ「次回もよろしく（なのだ）」

リオレウス（前書き）

まず最初に

すいませんでした！

まさか自分でもこんなに間があいてしまうとは…しかも今回は長くないし…

自分のなかでは春休み中は沢山更新するぞ！と思っていたんですが…これも自分のせいなんですけど

部活で疲れ家に着いてすぐ寝てしまったり

とある小説にはまってしまい、バカみたいに読みまくっていたり

これが一番の原因なんですが、宿題を春休みの終わる少し前から始めたのが一番ダメでしたね

全く終わりませんでした

それでも必死にやり深夜にまで毎日食い込み、それでやっと、ついこの前終わりました

なので次こそはです！

…あたたい目で見守ってください

では第三十六話です

リオレウス

「あ、あれがリオレウス……」

ヒナギクが緊張したように言った

あれは今まで戦ってきたモンスターとは違った

あれには明らかな殺意の様なものを感じる

雰囲気も何もかも違った

それでもハヤテ達は武器を構える

「グオウアアアアアア！」

「……！」

リオレウスが咆哮をあげる

空気がビリビリと震えた

さっきの雰囲気の違いは確信に変わった

ドスランポス、イヤンクック、そんなものの咆哮とは比べものにな

らない迫力だった

相手を威嚇し圧倒する

（こいつは本当にヤバい）

ハヤテはそう感じた

ゲームと現実ではあまりにも違いすぎた

ゲームでは実際の殺意など伝わってこない

『殺す』その意志がひしひしと伝わってくる

そのリオレウスが動いた

両足で力強く地面を蹴り突進してくる

ハヤテはナギを抱え右に、ヒナギクとマリアは左に跳んだ

リオレウスはハヤテ達の後ろにあった岩がに激突したドゴォー！と鈍

い音がした

岩は激突した部分に穴が空いていた

そしてハヤテ達に体を向ける

「お嬢様は少し避難してください」

ハヤテはナギを降ろし静かに言った

「……わかった」

ナギはハヤテの指示に従った

みんなに迷惑はかけたくない

だが一人だけ逃げるなんて…自分が嫌になった

役に立てない…

そんな自分が

それでもナギは大きな岩の後ろに避難した

リオレウスがハヤテにブレスを吐いた

ハヤテは右前に跳んでギリギリで避ける

そしてリオレウスに走ってく

ヒナギクも背後から接近する

その後ろからマリアはリオレウスに発砲する

その弾丸はリオレウスの背中に命中する

だがほとんど傷が付いていないように見えた

(なんて硬度なんですか)

マリアは驚きつつも弾を装填する

ハヤテがリオレウスの目の前、ヒナギクがリオレウスの直ぐ後ろま

で来たところでハヤテとヒナギクは右足に攻撃する

それでバランスを崩すが

「グオウア！」

リオレウスは翼を広げ空に飛んだ

そこからブレスを無数に吐いた

「ヤバ！」

「ちよ」

ハヤテ達は避けようとする

地面にブレスがぶつかり砂ぼこりが舞う

「ハ、ハヤテー！」

ナギは叫んだ

もしかして死んでしまったのではないかそんな不安がよぎる

「グルル…」

リオレウスは静かに、慎重に地面に降りようとしていた

地面との距離が三メートル程になったとき

不意にリオレウスの右翼に穴が空いた

穴を空けたのは三つの弾丸だった

貫通弾

通常弾よりも貫通能力を増した弾である

それによりリオレウスの翼を貫くことが出来たのだ

「グオウア!？」

予想外の出来事でリオレウスはバランスを崩し地面に落ちていく

その落下地点に二つの人影があつた

「「いつけー!」」その人影、ハヤテとヒナギクは落下するリオ

レウスに向かってハヤテは左、ヒナギクは右から横風ぎに剣を振る

った

その斬撃はリオレウスの腹に当たりリオレウスは二メートル程吹っ

飛んだ

そのころには砂ぼこりは無くなっていた

「さっきのはかなり危なかつたですね」

マリアが弾丸を装填しつつ言った

「そうですね」

ヒナギクが言った

「でも皆さん無事でよかつたです」

ハヤテは安堵したように言った

三人とも服は汚れたりしているが、体に大きな傷は無かつた

あのブレスの雨を殆ど無傷でかわしたのは、すごいと言いやう

が無い

（よ、よかった…）ナギも安堵のため息を吐いていた
だが同時に自分の惨めさが改めて込み上げてきた
（やっぱり、私は来ない方が…よかったのかな…）
ナギはじつとハヤテ達を見ていた

「グオウアアアアア！」

リオレウスが咆哮をあげ、もう立ち上がっていた

完全に血が回っていて、息は荒く、目が血走っていた
あきらかに殺意が増していた

「本番はここからみたいですな」

ハヤテは静かに言った

「グオウアアアアア！」

リオレウスが力強く地面を蹴った

リオレウス（後書き）

ナ「四月か」

マ「春ですね」

ヒ「話はあるなにシリアスなのにこんなにまったりしていいの？」

ナ「いいんだって。ここでまったりしないでいつするのだ」

マ「たまには休息も必要ですよ」

ヒ「…ま、確かにそうですね」

ナ「そーそ、いいのいいの。まあそんなこんなで次回もよろしくなのだ！」

本気（前書き）

なんとか更新出来ました

時間かかってしまいすいません

しかも、またまた短いです

なんでですかねえ

上手く書けません

長くも

それでもがんばりますのでよろしくお願いします

それで、買いました『ハヤテのごとく！』23・24巻

良かったですね

アテネ編

あんなに熱いハヤテは初めてですね

感動しました

また次回が楽しみです

では第三十七話です

本気

リオレウスはハヤテ達に突進する
速度は前より増している

殺意も

ハヤテは右前、ヒナギクは左前、マリアは右に跳んでかわす
その跳んでいるときにマリアは三発の貫通弾をリオレウスの背中に
打ち込んだ

だが、弾丸はすこし傷を与えた程度で、大きな傷にはならなかった
やはり翼と背中の鱗では硬度が違いすぎるのだ
リオレウスはそのまま突進し続け なかった
左足を力強く前に出し強引にブレーキを掛ける

そして体をハヤテ、マリアの方に向きをかえ、その左足で強引に地
面を蹴った

「な！」

「そんな」

予想外のリターンに二人は驚く
ゲームではそんな事は有り得ないのだから
その事でマリアは避けられそうになかった
苦し紛れにマリアは自分のボウガンを盾代わりにする
が、衝撃は来なかった
目の前には

ハヤテがいた

「は、ハヤテ君」

「…ま、マリアさん…早く逃げてください」

ハヤテの声には余裕が無かった

そして直ぐにマリアはリオレウスから距離を取る

「ぐ…」

ハヤテは限界だった

やはりイヤンクックとは威力が違いすぎた

あの一撃を受けただけで腕は折れそうになり、肩は外れそうになった
その時、リオレウスの口が開いた

その奥から火のようなものが見えた

(これは、死ぬ)

ハヤテは本当にそう思ったこの体勢では避ける事は不可能だった

「グオウア！」

リオレウスがブレスを吐く瞬間

「ハヤテ君から離れるー！」

ヒナギクがリオレウスの左足に正宗を袈裟に振り下ろす

リオレウスはその衝撃でバランスを崩した

リオレウスのブレスは向きがズレ、大剣の端に当たり、ハヤテは後ろに吹っ飛んだ

ヒナギクは攻撃後、直ぐにリオレウスから離れハヤテに駆け寄った
マリアもハヤテに駆け寄る

「ハヤテ君大丈夫！」

ヒナギクが心配した声で言った

「そ…それよりもリオレウスは」

ハヤテは自分で立とうとするが思うように動かなかった。そんなハヤテをヒナギクとマリアが肩を組んで支える

「グオウアアア」

リオレウスはハヤテ達に突進をしてきた

「どうしますマリアさん」

「こうなったら…」

マリアはショットボウガン・白を構え

通常弾を発射した

全ての弾丸がリオレウスの右足に命中する

やはりあまり傷は付かない

それと、そんなことでは突進は止まらない

それでもマリアは打ち続ける

「ヒナギクさんお願いします！」

マリアが叫んだ

「わかりましたマリアさん！」

ヒナギクは直ぐにマリアの言葉の意味を理解し、リオレウスに向かっていった

マリアの弾丸はヒナギクには決して当たらず、正確にリオレウスの右足に当たる

ヒナギクがリオレウスの突進を左前にギリギリで避ける

そしてすれ違いざまに正宗を横薙に振り右足に当てる

「グオウア！？」

リオレウスはそれに耐えきれずに転けた

「今のうちに逃げましょう！」

マリアが全員に言った

その声には余裕が全く無く、焦っていた
全員には勿論ナギも含まれている

その一言でハヤテ達はそのエリアから辛うじて逃げ出した

本気（後書き）

ナ「リオレウス強いな」

ヒ「強すぎよあんなの」

マ「作者さんも『ちょっと強すぎた!』って言ってましたよ」

ナ「相変わらずのバカだな作者は」

ヒ「計画性が無すぎなのよ」

マ「もつどつしよつもないですね」

ナ「でもまあ」

ナ・ヒ・マ

「次回もよろしく願います」

反撃（前書き）

どうも、かなり間が空いてしまいました
次はガンバリマス

それにしても、原作通りにやるアニメはおもしろいですがなあ
オリジナルと違ってかなりいい感じですよ

と、まあ次回もよろしくです

では第三十八話です

反撃

リオレウスのいた場所から一つ前の場所、そこにハヤテ達がいた
その場所は広く見晴らしが良かった

それとここには自ら襲ってくるモンスターがいないので安心できた
そこにハヤテを寝かせていた

「ハヤテ！大丈夫か！」

「大丈夫ハヤテ君？」

「大丈夫ですかハヤテ君」

ナギ、ヒナギク、マリアの三人がそれぞれハヤテに言った
三人とも本当にハヤテを心配していた

まさかハヤテがこんなになるとは思わなかったからだ

「だ、大丈夫ですよ。ただの打撲ですから」

ハヤテはそう笑って言ったが、実際は実際はそんな軽いものではない
かった

もしかしたら骨折しているかもしれない

「すいませんハヤテ君：私の所為でこんなことになってしまつて……」
マリアが沈んだ声で言った「気にしないで下さい……マリアさん、僕
は……大丈夫ですから。それよりもマリアさんが無事で……なによりで
す」

ハヤテは笑顔をマリアに向ける

「ハヤテ君……では治療してみます」

マリアがアイテムボックスに入っていた応急薬を取り出す

「これは飲み物なんですか？」

マリアが首を傾げる

「それはゲームでは飲み物だったぞ」

「それじゃ、飲めますかハヤテ君」

容器をハヤテに近付ける

「はい。なんとか」

マリアから容器を受け取りグビツと飲んでみる

味は、何と無く苦いような、甘いような…微妙な味だった
応急薬を全て飲み干した時、体に変化が起きた

（あれ、痛みが…引いた？）

さっきより痛みが少なくなった

不思議と体が動く

「どうだハヤテ？」

ナギが心配そうに言った

「はい大丈夫です。なんとか体も動きますし」

そういうとハヤテは立ち上がり、体を動かしてみる
痛みはあるがなんとか動く

「すごいわね、応急薬って」

ヒナギクは驚いている

普通ではこんなことは有り得ないのだから

「流石ハヤテだな、あれだけで治ってしまうとわ」

「いえいえ、応急薬がすごいですよ」

「でも、リオレウスに勝てるんでしょうか…」

マリアが言った

「まさかあんなに強いとは思わなかったわ」

「……………」

「でも勝てない相手ではないですから」

ハヤテがしっかりと言った

「ここから巻き返しましょう！」

ハヤテは力強く言った

「…そうねハヤテ君の言う通りね」

「リベンジしないとイケませんね」

ヒナギクとマリアは言った

「…そうだな」

そうしてハヤテ達はリオレウスのいた場所にまた向かった

リオレウスのいた場所に戻り、ヒナギクは岩の影からこっそり様子を見た

「あれ？いないけど…」

「ホントですか」

マリアに続き、ハヤテ、ナギも影から覗いて見る

「いませんね」

「確かに」

「それじゃ何処にいったのかしら？」

ヒナギクが言う

「まあいるとすれば、あの奥の巣か、崖のところか、森だな」

ナギが地図を広げ、指を差しながら言った

「それではまず、あの巣からですね」

マリアが目を向けて言った

そうしてハヤテ達はただいまリオレウスの巣であろう所にいる

そして壁の影からまたこっそりと様子を見た

「あの…またいないけど…」

ヒナギクが見た所には何もいなかった

ゲームではランポスがいるのだが、普通に考えるとそんな天敵の巣などにいるわけないのだから

「またか…」

「何処にいるんでしょうね」

なんとなく元気が無くなる

「ゲームでもこれが面倒臭いんだよな」

ナギの言う通りゲームでもこれが面倒臭い

一度モンスターを見失うと、一体何処にいるのか分からなくなるのだ

これで時間を無駄にくった人もいるだろう

「でも次の所にはいるかもしれないし」

ハヤテが元気づける

「まあそうだな」

ハヤテの言葉で元気が戻る

「それでは次だ！」

そして巣の奥に進んで行った

巣の外は崖だった

高さもかなりある、大体三十メートルぐらいだろう
そうなる

「…な…なかなか…たかいわね…」

ヒナギクの声は震えていた

足はガクガク震えていて、今にも泣きだしそうだ

「大丈夫ですかヒナギクさん」

ハヤテが心配して言った

「だ…だいじょうぶよ…ハヤテくん」

どう見ても大丈夫には見え無かった

「ヒナギクは戻った方がいいんじゃないか？」

ナギが言った

「そ、そんなこと…」

「ピギユアアアアア！」

ヒナギクの言葉の途中で下から動物の叫び声が聞こえた

「な、何今の…」

「皆さん下を見てください！」

わよ」

ヒナギクは無理矢理体を崖に近付ける
そして下を見る

(た…高い…！高すぎよこんなの！降りれるわけじゃないじゃない！)
ヒナギクはもう限界だった

「ヒナギクさん？大丈夫ですか」

マリアが呼び掛けてみるが、ヒナギクは相変わらずだった

「それじゃそろそろ行かなくてわな」

ナギが一人で崖を降りようとするが

(つて、こんなのヒナギクじゃなくても怖いぞ)

ナギもヒナギクと同じように体が震えだす

(まあこうなりますよね…)

はあ、とマリアはため息を吐いた

(こうなったら仕方ありませんね) マリアはナギを背負い、ヒナギクを抱え

「な、何をするのだマリア！」

「マ、マリアさん!？」

意気なりのことで二人は戸惑う

「では行つてきますハヤテ君」

マリアは笑っていた

「すいませんマリアさん…気を付けて」

「ありがとうございます。ハヤテ君も必ず成功させてくださいね」

「はい」

「では行きますよ」

「ち、ちよつと待てマリア！」

「マリアさん、まだこころのじゅんびが！」

マリアは二人の言葉を無視して崖を降りていった

反撃（後書き）

ナ「そろそろリオレウス編も終盤だな」

マ「それでもこの話はまだまだですけどね」

ヒ「まあこれからも頑張りましょう、ナギ、マリアさん」

ナ「そだな」

マ「そうですね」

ナ「では、次回もよろしくなのだ」

反撃 式（前書き）

すみません、かなり遅れました
部活の疲労とテスト期間に入ってしまったのでなかなか執筆できま
せんでした

まあ本当はなかなかうまく表現できなかつたんですよ…
この話の後半はかなりぐだぐだになってしまいました

そんなこんなで第三十九話です

反撃 式

マリアは崖の出っ張っている所をジャンプしながら降りていく
(も…もうダメ…)

ヒナギクは気絶しかける

その寸前でマリアは地面に着いた

なんとかリオレウスの後ろに降りることが出来た

「もう大丈夫ですよナギ、ヒナギクさん」

マリアが優しく言った後、丁寧に二人を下ろした

「マリア…死ぬかと思っただぞ」

「マ、マリアさん…もうこんなことしないで下さい」

ナギはちょびつと怒り気味に、ヒナギクは半泣き状態で言った

「すいません、ですが今はあれに集中しましょう」

マリアが真剣な目付きでリオレウスを見る

それにつられ、二人もリオレウスを見る

リオレウスは今、モスを食べているので警戒心が薄くなっているの

だろうか、未だに気付いていない

「そうだな」

「そうですね」

二人もリオレウスに対して真剣になる

「では行きますよ!」

三人はリオレウスに向かって行った

「グルア?」

足音が聞こえ、リオレウスは三人に気付いた

「こつちですよ！」

マリアはリオレウスの右側からボウガンを発砲する
弾丸は通常弾なので大したダメージは無い

「グルアアアアア！」

リオレウスはマリアに向きを変えブレスを放つ

マリアは右に跳びギリギリで避ける

その隙にヒナギクが一気にリオレウスの翼に近付き、正宗を振り上げる

それによりリオレウスの右翼に傷が出来た

「グルアアアア！」

リオレウスは尻尾を振りヒナギクを払おうとする

（つてヤバっ！避けられない！）

ヒナギクは正宗を斜めに構え、リオレウスの攻撃を受け流す

それでも衝撃は凄かった

体は二、三メートル後ろに飛ばされた

とっさに受け身を取り衝撃をやわらげる

（ありがとうございますヒナギクさん）

マリアはヒナギクがつけた傷に全弾打ち込む

全ての弾丸が傷に命中し、そこから傷がさらに広がった

そこへさらにヒナギクが一撃をたたき込んだ

「グルアアアアア！」

その一撃でリオレウスの右翼は使えなくなった

即ち、此処から飛んでは逃げられなくなった

（よし、何とか翼はやれたわね）

ヒナギクは直ぐにリオレウスから離れる

リオレウスはマリアに向かって突進する

マリアは弾を装填しながら左前に跳び突進をかわす

そのとき、リオレウスは直ぐに左足を前に出し体を百八十度回転させ、ブレスを放とうと口を開けた瞬間

リオレウスの目の前には一発の弾丸があった

その弾丸はリオレウスのブレスが口の中に出た瞬間命中した
弾丸が当たった衝撃でブレスは爆発した

「グルオ…アア」

リオレウスは怯み、後退する

「ナギ！今です！」

マリアの声で草に隠れていたナギがリオレウスに向かって全力で走り出す

（私だって、私だってみんなの役に立つんだ！）

ナギはシビレ罫をリオレウスの足元に設置し、起動させた

「グルア！？」

リオレウスの動きが止まる

「今よハヤテ君！」

「いけー！ー！」

ヒナギクとナギの二人がハヤテに向かって叫ぶ

ハヤテはその声を聞き、助走をつけ、崖から跳んだ

重力によりハヤテはどんどんと加速する

ハヤテはその間に大剣を後ろに構え

リオレウスに当たる瞬間に

「くらえー！」

大剣を振り下ろした

ハヤテの振り下ろした大剣がリオレウスの頭に命中する

その一撃はリオレウスの鱗を貫いた

「グルア…ア…アア…」

リオレウスの頭にはハヤテの一撃の跡が残った

「グ…ル…グリアアアアアアアアア！」

それは今までで一番大きな咆哮だった

リオレウスはすぐにその場に崩れ落ちた

「終わった…のか？」

ナギは先程の咆哮ですっかり腰が抜けてしまったのだそのため声が震えている

「はい、終わりましたよ、お嬢様」

ハヤテが笑顔でナギをに言った

ナギは改めてリオレウスを見る

リオレウスはボロボロの姿で倒れていた

そして、もう気は残っていないかった

「よ、よかった…リオレウスを倒したのだ！」

ナギは手をグーにして腕を上げた

「でも最後のあれは凄かったな」

「確かにあれは凄かったわね。ホントあれには圧倒されたわ」

「最後の最後まで凄い敵でしたね、リオレウスは」

マリアが地面に座って言った

「やっぱり飛龍は強かったですね」

ハヤテが言った

「そうだな」

と、話したところでハヤテ達はリオレウスを剥ぎ取り始めた
なかなか傷のつかなかった鱗に対して簡単に剥ぎ取れるとは、やはりゲームの世界なんだなあ、ということを改めて実感させた
剥ぎ取りを終え、村に帰っていった

反撃 式（後書き）

ナ「リオレウス倒したー！」

マ「かなり強かったですね〜」

ヒ「初めてあんな危機をかんじたかも…」

ナ「まあ飛龍だしな飛龍。龍は強いからな」

マ「でもまだ半分もいってないんですよ〜」

ナ「もう一年以上も経つんだよな」

ヒ「かなり遅いわね…」

ナ「まあでも」

ナ・マ・ヒ

「次回もよろしく願いします（なのだ）」

怪我（前書き）

なんとか更新です

遅いですよね…：わかってはいるんですけどよわかっては
でも、なかなか進まないんです…

はあ…：どうしましょ？

やる気出せと言われればそれまでまなんですけど
でも何はともあれ四十話です
これからもがんばります

怪我

ハヤテ達はリオレウスを倒し村に戻ってきた

「まさかりオレウスを倒すとわね…」

リオレウスの鱗を見せられて村長は驚いていた

いくら武器を新調したといっても、そこまで強いわけでは無い
だから失敗すると思っていた

だが、それをやってしまったのだハヤテ達は

「ふう、…それじゃ、また明日だね」

「よし、それでは家に帰るぞハヤテ」

「はい、お嬢様。ではまた明日村長さん」

ハヤテ、ヒナギク、マリアは村長におじぎをして家へと向かった

家に着いたハヤテ達は部屋に戻り武器を置きに来た

その時だった

ハヤテは意気なり体が重くなった

(あ、あれ?…意識が…)

ハヤテはベッドに倒れこんだ

「ハヤテ君!? どうしたんですか! ハヤテ君!」

その声を聞いてハヤテの意識は途絶えた

「…、ん……は…、ヤテ、… ハヤテ！」
「うーん…」

ハヤテが目を覚ますと、目の前にはナギの顔があったその後ろにはマリアとヒナギクもいた

そのナギの顔にはちよっぴり涙が浮かんでいた

よっぼど心配してくれたんだな、とハヤテは思った

「いや〜よかったよかった、なかなか目が覚めないからちよびつと焦っちまったぜ」

軽快な声がナギの後ろから聞こえた、その声で誰かはすぐにわかった

「レナさんじゃないですか！何でここにいますか！？」まさかあの店員のレナがいるとは予想外だったからである

「ん〜とね、ナギちゃん達が集会場に来たときにね、なにやら焦っていたんで事情を聞いたらハヤテさんが倒れたって言うてたもんですから、それで治療をしに来たってわけです」

レナが大体のことを説明する

「そうだったんですか、ありがとうございますレナさん」

ハヤテが体を起こそうとした、そのとき

体中に痛みが走った、特に両腕にはかなりの痛みが強い

ハヤテはその痛みで起き上がることができなかった

自分の体を見るとほとんどが包帯で巻かれていた

特に、腕の辺りはかなり重点的に

「って大丈夫？だめだよまだ動いちゃ〜。君はかなりの怪我をしているんだからね」

レナがハヤテに寄って言った

「そ、そんなにひどいんですか？」

「そりゃね、ナギちゃん達から聞いたけど、リオレウスの突進を受けとめたんだって？それにそれから崖から飛び降りて攻撃をするなんて君はホントに……おもしろいね！」

レナは意気なり笑い始めた

「でも、ここまでの無茶はいけないなあ」

さつきまでの明るい声とは違い、真剣みのある声だった

「す…すいません」

「まあ無事に帰ってこれたからいいけどね。もうそんな無茶はしちやだめだよ」

レナは指を立てて言った

「はい、わかりました」

「よしよし、それじゃ私は帰るから、じゃ〜ね」

「ありがとうございますましたレナさん」

「ありがとなレナ」「ありがとうございますレナさん」

レナは小走りで集会場に帰っていった

レナの姿が見えなくなった瞬間に三人はハヤテの方を向いた

「ハヤテ君！ホントに心配したんだからね！」「目が覚めないから凄く心配したんですよ！」

「ハヤテ！ホントにホントに心配したんだからな！」

ナギ、ヒナギク、マリアの三人はハヤテに詰め寄り言った

「す、すいません」

ハヤテは頭を下げたかったが、体が動かないのでそれすらもできない

「もう…心配かけさせるなよ…」

先程と違い弱く、泣きそうな声で言った

「はい、わかりましたお嬢様」

ハヤテは力強く言った

もう心配させないように、安心させられるように

その決意とともに

「ま、何はともあれ意識が戻ってよかったわ」

「本当にすみません…」

「もう謝んなくていいから。それで、明日はどうするの？」

ヒナギクが真面目に言った

「ハヤテ君は動けるわけありませんし、私達だけで行くしかありませんね」

それを聞きハヤテは驚く

「危険すぎますよマリアさん！全員で行ってもかなり危なかったんですから」

ハヤテは本当に心配なのだ

もしかしたら死んでしまうかもしれない、そんな不安がよぎる

「そんなに私達が信じられない？そこまで弱くは無いですけど」

ヒナギクが少しハヤテを睨む

「ですが…」

「大丈夫だよハヤテ。絶対な」

ナギはしっかりと言った

今までになく堂々と。そして、真つすぐに

「…はい、わかりました。それでは明日はがんばってください」

悩んだ末にハヤテは決断した

ナギが大丈夫と力強く言ったのだ。これを信じられない理由など無かった

「明日のことも決まったし、そろそろ寝るか」

「そうね、それじゃ…やりましょうか？」

「はい」

ナギとヒナギクから凄まじい気迫が感じられる

対して、マリアはいつも通り笑顔だ

「勝ったのがハヤテの部屋で寝る…それでいいな」

「ええ」

「はい」

（今度こそハヤテと一緒に）

（またハヤテ君と一緒に）

「最初はグー！ジャンケン…」

「…ポン！」「…」

チヨキ

ナギ

マリア

グー

ヒナギク

（や、やった！またハヤテ君と一緒にだ！）ヒナギクはテンションが跳ね上がる

それと反比例してナギのテンションはがた下がりだった
周りからもそれが察せるくらいだ

「な、ナギそこまで落ち込まなくても…」

「…それじゃあな、おやすみハヤテ」

「は、はい、おやすみなさいお嬢様」

さつき声と比べるとはあまりにも弱すぎたのでハヤテは驚いてしまう

ナギはハヤテの部屋からとぼとぼと出て行った

「それじゃハヤテ君おやすみなさい」

「はい、おやすみなさいマリアさん」

マリアもナギの後を追って部屋から出た

（悪いこと…しちゃったかな…）

罪悪感を感じてしまう

別にヒナギクの所為ではないのだが

「それじゃ私達も寝よっか？」

「そうですね」

ヒナギクもベッドに入り明かりを消す

「そう言えばヒナギクさん」

「ん？何ハヤテ君？」

「あの、どうして応急薬を飲んだのにこんなに怪我が酷くなってし

「まっただんでしょうか？」

「そこがハヤテにとつて不思議だった

あれで一応怪我は治ったはずだったのに、なぜこんなに酷くなったのかハヤテにはわからなかった

「それはレナさんが説明してくれたわ。応急薬つて一時的に怪我を治すものなんだって。だからあの時ハヤテ君が応急薬を飲んで、その状態のままちゃんと治療すればそこまで酷くはならなかったんですって。でもハヤテ君あの後攻撃したじゃない？あれが腕にかなりの衝撃をあたえたから、それでそんなことになったんだって」

「成る程、そうだったんですか」

「でもハヤテ君で、本当に体が丈夫なのね」

「へ？なんでですか？」

「レナさんがハヤテ君を治療してる時にね、『凄いね、ギリギリで骨はなんとか折れてないみたいだよ。普通ならポツキリいつてるのに、やっぱりハヤテ君はおもしろいね』って言ってたから」

「レナさんは相変わらずだったんですね」

ハヤテも笑って言った

「それじゃ明日に備えて寝ますか」

「そうね。おやすみハヤテ君」

「おやすみなさいヒナギクさん」

こうして二人は眠りについた

怪我（後書き）

マ「ナギ、そんなに落ち込まないでくださいよ」

ナ「……」

マ（これはかなり重傷ですね……）

ナ「神様は私のことが嫌いなのかな……」

マ「そ、そんなことあるわけないじゃないですか」

ナ「そうかな？」

マ「そうですよ！絶対にハヤテ君と同じ部屋になれますから」

ナ「絶対？」

マ「絶対です！」

ナ「絶対か……！。そうだ！いいことを思いついた！よし明日からだ」

マ（なんか急に元気が出てきましたね。よく分かりませんがよかったです）

ナ「よし。ではおやすみマリアー！」

マ「はい。おやすみなさいナギ」

雪山（前書き）

またこの時期です

テストです

早すぎなんです！

またこれから二週間くらい更新出来ません

前は点数がパツとしませんでしたので、頑張りたいですけどね
え…

やる気が…出ないんですね…

ハヤテみたいに起きてはいるんですけどね、別の目的で…

ダメ人間ですね…

そんなこんなで四十超えです

では、第四十一話です

雪山

朝になりヒナギクは目を覚ました

隣ではまだハヤテが寝ている。昨日の怪我や疲れの所為だろう
そのハヤテの顔をヒナギクはじーっと見ている

(…ハヤテ君って寝顔もかわいい)

自然と顔がにやける

そんな幸せを味わっていた

そんなときドアをノックする音がした

「え！？あ、はい」

少し戸惑いながらもヒナギクはドアを開ける

目の前にいたのはマリアだった

「おはようございますヒナギクさん。ハヤテ君は起きましたか？」

「おはようございますマリアさん。ハヤテ君はまだ寝ています。怪
我や疲れが酷いからだと思うんですけど」

「そうですか」

「あの、ナギの様子はどうですか？」

ヒナギクは気になっていた

まさかナギがあんなに落ち込むとは思わなかったから、そして、少
しは自分の所為なんじゃないかという罪悪感があるからだ

「ああ、それならもう大丈夫ですよ。昨日の内に元気になりました
から」

マリアは笑顔で言った

「よかった…」

ヒナギクは心の底から安心した

ナギが落ち込んでいる姿なんて見たくないからだ

ナギには元気が一番だとヒナギクは思っている

「そんなに心配してくれたんですか？」

「まあかなり落ち込んでいましたし。何より友達ですから」

嘘のない真つすぐな答えだった

「ふふっ、ヒナギクさんはいい人ですね。ずっとナギの友達でいてくださいね」

「勿論ですよマリアさん」

笑顔でヒナギクは答えた

「ん…あ、あれ？マリア〜！どこだ、マリア〜」

ナギの元気な声がした

「起きたみたいですね。それではまた、ヒナギクさん」

「はい。マリアさん」

マリアは軽くお辞儀をし、ドアを閉めて自分の部屋に戻っていった
ヒナギクは自分のベッドに座る

「う〜ん…」

「あ、おはようハヤテ君」

「おはようございますヒナギクさん」

ハヤテは自分の体を起こして言った

「ハヤテ君！そんなことして大丈夫なの！？」

ヒナギクは本気で心配した

昨日は起き上がることすらできなかったのに

「はい、昨日よりは大分良くなりましたよ。もう痛みも少なくなりましたし」

「本当に？」

「はい」笑顔でハヤテは言った

本当に痛みが少なくなっただけらしい

（流石ハヤテ君…回復スピードが早すぎ）

ヒナギクは改めてハヤテは凄いと思った

「でもやっぱり寝ててハヤテ君。レナさんだって動いちゃダメって
言ってたでしょ」

少し強めにヒナギクは言った

「でも、もうそこまで酷くないですから」

「ふ〜ん…」

ヒナギクは試しにハヤテを突いてみる
それほど強くなく、軽く触れる程度に

「ひゃあ！」

ハヤテは体をびくりと震わせる

「はあ、今日くらいは出来るだけ横にしててよね」

「はい、わかりました……」

ハヤテは大人しく従い、横になった

その時

ドアが勢い良く開いた

「ハヤテー！」 ナギが元気な声と共に部屋に入ってきた

「おはようナギ」

「おはようございますお嬢様」

「おはようハヤテ、ヒナギク」

その後ろからマリアも入ってきた

「ヒナギクさん、ハヤテ君は起きましたか？」

「マリアさん」

「おはようございますマリアさん」

「あ、おはようございますハヤテ君。それでなんですが、ハヤテ君の朝食はどうしましょう？」

「それならハヤテ君の分は持って帰ってくればいいんじゃないですか？」

「そうだな。ということだから行ってくるなハヤテ」

「いってらっしやお嬢様、ヒナギクさん、マリアさん」

「うん、ちゃんと寝ててよハヤテ君」

「行ってきます、ハヤテ君」三人は集会場に向かった

集会場は相変わらず人がたくさんいたのだが、やはりレナはいなかった

帰るときには忘れずにハヤテの分を持って帰った

家に着きハヤテがいる部屋に入る

「ただいま、ハヤテ」

「ハヤテ君、ただいま」

「おかえりなさいお嬢様、ヒナギクさん、マリアさん
ハヤテちゃんとベッドで横になっていた

「はい、ハヤテ君これ」

ヒナギクはハヤテの目の前に集会場の食事をだす

それは、長方形の木の箱だった

大きさは縦二十センチ、横十五センチくらい

要するに弁当箱だった

ハヤテはそれを起き上がり、手で受け取ろうとしたが

ヒナギクが腕を引っ込めた

「あの、ヒナギクさん？」

ヒナギクの行動にハヤテは少し戸惑う

ヒナギクはハヤテを見て

「そう言えば、腕の怪我が一番酷いのよね？」

「まあ、そうですけど…」

そのときヒナギクの頭の中が急速に働きだし、ある答えを導きだした

「そうだ、もう準備しちやいませんか？」

「は？まあそうだな…」

「それじゃあそつしましよう」

「あ、ああ」

ナギとマリアは自分達の部屋に戻った

ドアが閉まった瞬間に、ヒナギクはハヤテの隣に座る

そして弁当箱の蓋を開け、蓋についていた箸で中のおかず（お肉）を取り、ハヤテの口まで持っていった

「ハヤテ君、あ〜ん」

満面の笑みでハヤテに言った

だが、ハヤテは突然のヒナギクの行動に戸惑う

「ひ、ヒナギクさん？なんでこのようなことを？」

「だって、ハヤテ君にそんな傷ついた腕を使ってほしくないし。だからあ〜ん」

ぐいっと箸を近付ける

ハヤテはまた少し悩んだ結果、ヒナギクのお言葉に甘えることにした
それと、折角のヒナギクの行為なので

「では、いただきます」

パクツとハヤテは食べた

味は勿論美味しかった

ヒナギクはとても嬉しそうだった

「おいしい？」

「はい、とつても」

（勇気だしてよかった〜）

ヒナギクの心の中は喜びで満ちあふれていた

（これが自分の手料理だったらもつと嬉しいんだろうな）

ヒナギクはそんなことを思っていた

まあ以前に食べてもらったことはあるのだが

そして、そんなことを数回していると足音が聞こえてきた

ヒナギク直ぐに弁当箱をハヤテのベッドに置き、正宗を手を取った
それとほぼ同時にナギとマリアが入ってきた

「準備できたかヒナギク？」

「え？う、うん出来たわよ」

「それじゃ行くか」

ナギが元気良く言う

「あの、絶対に帰ってきてくださいね」

ハヤテはとても心配そうだった

「ああ、当たり前だろ！」

「うん、絶対に帰ってくるから」

「はい、わかっていますよ」

そうして三人は村長の所に向かった

「おや？三人だけかい？」

村長は驚いたようだった

「そうだ。それで今回はなんなのだ？」

「ふう、本当にやるんだね？」

「ああ、もう決めたのだ」

「はい、後悔はありません」

「…わかった。今回はね、雪山でティガレックスをやってもらおうよ」

「なっ！」

ナギは言葉を失った

まさかの相手だった

「これは銭別だよ」

村長はナギに三本のホットドリンクを渡した

「わかっているとと思うけど、本気でやらないと、死かもしれないよ？」

村長は真剣な声だった

そうして雪山に向かって行った

「涼し〜」

それが雪山に来て最初に思ったことだった
雪山と言っても、まだふもとの方である
草が茂っている

「それじゃ行くか」

「ええ」

「はい」

アイテムボックスからアイテムを取出し

三人は気を引き締めて向かった

次の場所には左側に大きい湖が広がっていた
そして、マンモスの様な生物が数頭いた

「あれは何？」

ヒナギクが指を差していった

「あれはポポといって大人しい草食動物だ。危険を感じると直ぐに
逃げ出すから危険ではない」

「それらな無視して行きましょう。倒す必要もありませんからね」

「そうだな」

「そういえば、どうやって山の上に行くの？」

「ん？それはまずあそこから入るのだ」

ナギが奥を指差す

そこには二メートルくらいの段差が二段になっていて、そこに洞窟
があった

「あれですか」

「それじゃ行きましょう」ナギ達はそこをのぼり、洞窟の中に入った

洞窟の中は外とは違い、とても寒く、周りは氷だらけの世界だった
「寒！」

「こ、こんなんじゃ凍死しちゃうわよ」

「それぐらい寒いですね」

体を震わせて言った

本当に凍死してしまうかもしれないと思ってしまつくらい寒い

「こ、ここでこれを飲むのだ」

ナギが村長にもらったものを取り出す

「わかったわ」

ヒナギク、マリアも取出しぐびつと飲んでみる

「っ！」

わかっていた

色がもうそうだったから

その赤色の飲み物は、辛かった、なかなかで

ヒナギク、マリアの二人は飲み切った

「けほつ、何これ、辛！」

「なかなかですね……」

「そ、それはホットドリンクと言って、体を温める飲み物だ」

ナギは震えて言った

「確かに……もうあんまり寒くないわ」

「さつきよりかなり楽になりましたね」

体がぽかぽかしてくる

「つて、なんでナギは飲んでないの？」

「だって、私は辛いとかダメだし……」

だんだん声が小さくなっていく

「克服する良い機会じゃないですか」

「ナギだつて凍死なんかしたくないでしょ？」

二人はナギに言う

「…そう…だな」

ナギはホットドリンクを口に近づけ

飲んだ

「ぐっ！」

吹き出しそうになるのをなんとか抑え、無理やり飲んでいく

それでなんとか飲み干した

「はあはあ…もう…飲みたくない」ナギの声は弱々しくなっていた

「ナギ偉いですよ」

マリアが笑顔で言った

「うん」

「それで次はどこに行くの？」

「ああ、ここを少し行くとな」

ナギの言う通り少し歩くと、さっきの段になっていたようなものがあった

「これを上って少し行けばティガレックスがいるかもしれない場所に着く」

「また上がるのね…」

少しブルーになるヒナギク

「まあまあ行きましようナギ、ヒナギクさん」

マリアが元気づける

今回は前よりも高いので、マリアが先にのぼり、ナギを引っ張った
ヒナギクは下を見ないように素早くのぼった

その奥は道があり、左側は崖になっていた

高さかなりあり、森丘でハヤテが飛び降りた所よりもかなり高い

「もうすぐだ」

ナギは少し変だと思った

外に出る場所にギアノスが居なかった

ちなみに、ギアノスと言うのはランポスに非常に似ていて、色が白とこい青のしましまで、口から雪玉を吐くモンスターであるでも、この世界はゲームとは違うので気にしないことにした
「この道を右に曲がった場所いるはずだ」
ナギ達はナギの言う通りに進んだ

洞窟から外に出た

外は雪が降っていてかなり積もっていた

「ここにいるかもしれないのね…」

緊張が張り詰めていく

その時

右側から何かが来た

それは白い毛に覆われていて、二本の牙が特徴の猿のような生物だった

「あれがティガレツクスなの？」

ヒナギクは名前のイメージと違いすぎたので、ナギに訊く

「いや違う。あれはドドブランゴだ！」

予想がの出現にナギは驚く

襲ってくる

三人はそう思った

だが、ドドブランゴはただ目の前を通り過ぎただけだった

「なんで襲ってこないんでしょう…」

疑問に思ったその時

ドドブランゴが何かに当たり、左側に吹っ飛んだ

三人が左側を向くと

ドドブランゴの上に、黄色い生物がのっていた

ドドブランゴの首もとに噛み付き、白い毛を赤く染めていた

ドドブランゴはもう動いていない

黄色い生物に食われていた

「なに、あれ……」

一瞬の出来事に驚くヒナギク

「あれが私達の相手、ティガレックスだ」

声が聞こえたのか、ティガレックスはナギ達の方を向いた

口元にはドドブランゴの血が付いていた

そして

「ガオアアアアアア！」

力強く咆哮した

雪山（後書き）

ヒ「えへへ／＼／」

ナ「なんか嬉しそうだなヒナギク」

ヒ「え！？そう見える？」

ナ「ああ。なんかあったのか？」

ヒ「ううん。何も無いわよ」

ナ「…まさか、ハヤテになにかしたのか」

ヒ「え！？」

ナ「その反応、なんだ！何をした！」

ヒ「…それじゃあ、また次回よろしくお願いします」

ナ「強引に終わらすな！」

ティガレックス（前書き）

テスト終わったー！

いやー、でも今回もまたヤバいつすね…
まさか数学があんなに難しいとは…数少ない得点源が撃沈するとは…
ま、終わったからいいんですけど

今回の話、また、また短いです
そして批判がきそつな予感です
温かい目で見てください
では第四十二話です

ティガレックス

「あれがティガレックス…」
その見た目は、全身は黄色い鱗に覆われており、水色のしまが入っている

虎の黒の部分が水色になつたような感じだ
前の両足には鋭い爪がはえている
ティガレックスは後ろ足に力を込める

「来るぞ！」

ナギが叫んだ瞬間だった
ティガレックスがナギ達に飛び掛かった
ヒナギクは左に、マリアはナギを抱え右に跳んでよける

ナギのおかげで直ぐに攻撃に反応出来たが、ギリギリだった
今までの敵の中で群を抜いて早かった
ヒナギクは直ぐ正宗を手取る

マリアもショットボウガン白を構える
ナギもドスバイトダガーを構える
ティガレックスは交互に見る

そして、ナギ達に突進する
ナギは左、マリアは右に跳んでよける
その跳んでいる間に三発の通常弾を発射する

すべての弾丸はティガレックスの腹に命中する
が、効いている様子はない
(やはり手強いですね…)

マリアがボウガンに弾丸を装填する
その時

「マリア！まだ油断するな！」
ナギが必死になって叫んだ

マリアはティガレックスが突進した方向を見ると

ティガレックスが迫っていた

ティガレックスは直ぐに方向転換してマリアに向かったのだ

「くっ！」

マリアは左に跳んで避けるが、
ギリギリで足に擦れてしまう

「ぐっ……」

それほど深くはないが傷が出来てしまった

ティガレックスは突進を止る

そして、また後ろ足に力を込めているようだ

「こんな隙がないじゃない」

「いや、突進がおわった後に動きが少し止まる。そこを狙うしかない」

「そんなこと言われても……」

「ガオアアアアア！」

ティガレックスがヒナギクに飛び掛かる

ヒナギクは右側に飛び込んで避ける

（あんなこと言われても近付けないわよ）

ヒナギクは正直そう思った

飛び掛かった後にも隙はできる

しかし、距離が出来てしまい近づく前に次の行動に出てしまう

その上、動きが速い

これではなかなか強い一撃を与えられない

（それでも、やるしかないか）

ヒナギクは正宗を強く握り直す

ティガレックスがヒナギクに突進する

ヒナギクは右前に跳ぶ

スレスレの所で突進をかわした

そして、すれ違いざまに正宗を横雑に振る

ヒナギクの一撃はティガレックスの左前足に命中するが、ヒナギクの腕にかなりの衝撃が走る

「ぐっ！…」

思わず声が漏れる

だが怯んではいられない

直ぐにティガレックスの動きを追おうとする

が

ティガレックスは急ブレーキをし、ヒナギクの側で止まっていた

そして、その場で回転した

ヒナギクの目の前にはティガレックスの尻尾があった

「やば…」

ヒナギクは直ぐに正宗を盾にする

尻尾がヒナギクの脇腹を直撃する

「がはっ…」

ヒナギクは五メートル程吹っ飛ばされた

「ヒ、ヒナギク！」

「ヒナギクさん！」

ナギとマリアは思わず叫んだ

吹っ飛ばされたヒナギクはゆっくりと立ち上がった

だが、決して大丈夫とは言えなかった

立っているのがやっと、と言う感じだ

口からは多少の血が流れている

「よかった…」

ナギは安堵してしまう

（ヤバイ…体が思ったように、動かない…）

ヒナギクはなんとか意識を保つ

ティガレックスはこちらを向いてはいなく、ナギの方を向いていた

「ナギ！危ない！」

ヒナギクが必死に叫んだ

ナギがティガレックスを見ると、飛び掛かる寸前だった

ナギは直ぐに右側に飛び込むが、完全に避けられず足に攻撃が当たる

「がああああああ！」

あまりの痛みにナギは絶叫する

「ガルル……」

ティガレックスはナギにゆっくりと近づいていく

「ナギ！」

二人は同時に叫ぶ

マリアは直ぐにナギの所に向かうが、距離があり間に合いそうに無かった

ヒナギクもナギの所に向かおうとするが、体が言うことを聞かず、動かない

（ナ……ナギを、助けなきゃ……いけないの……に……）

そこでヒナギクの意識は途切れた

（や、し、死ぬ……）

ナギは死を感じた

（いや……だ、死に……たくない、助けて……）

ナギの目から涙が零れる

「ガオアアア！」

ティガレックスが前足を振り下ろす

（ハヤテー！）

（あれ？……攻撃がこない？）

ナギが思ったとき

「ガオアアアアアア！」

ティガレックスの叫びが聞こえた

これは今まで敵を圧倒するための声ではなく、痛みには耐え切れず叫んでしまう声だった

ナギが恐る恐る目を開けると、そこには

悶えるティガレックスがいた

「大丈夫ですかナギ？」

マリアが心配した声で言っつてナギを抱き締める

「ああ…なぜかな」

ナギは不思議に思っていたが

その理由が分かった

「な〜んで後ろ向けてるかね〜。だから切られちゃうんだよ？」

あのいつもの明るい声がティガレックスの後ろからした

「ま、まさか…」

ティガレックスがナギの前から少し動き、後ろが見えた

そこにはいつもの集合場の制服ではなく、白銀の鎧を纏い、漆黒の

太刀を持っている

「レナ（さん）?!」

二人は同時に叫んだ

「ん？おおー！ナギちゃん！マリアさん！」

レナは笑顔で、いつものように元気に言った

ティガレックス（後書き）

ナ「ティガレックス強すぎ！勝てないっての！」

マ「……………」

ヒ「ナギの言う通りよ！まさか一撃でやられるなんて思わなかったわよ」

マ「……………」

ナ「だよなヒナギク！って、なんで黙っているのだマリア？」

マ「…なんか私、活躍してないんですよ…はあ…」

ナ「そ、そんなこと気にするなマリア、な、なあヒナギク」

ヒ「そ、そうですよ。マリアさんは今までがんばっていたじゃないですか！だから、そんなに落ち込まないでください」

マ「ナギ、ヒナギクさん…そうですね、ありがとございます」

ナ「では次回もよろしくなのだ！」

レナ（前書き）

やっと書けました…

なかなか体力が無かったんですよ、いやホントに
体を動かしまくった後に部活

マジ体力無くなりますから

その所為で家に着いたら直ぐ意識が無くなるんですよ
なので遅くなりましたすいません

最後の方はなんかグダグダかもしれません

それでは四十三話です

レナ

そこにはいつものレナではなく、兜は被っていない、全身が白銀の鎧に被われていた

そして、武器は漆黒の太刀。よく見ると刃のところが少し赤みを帯びている

そしてそのレナの横には先程までティガレックスに付いていた尻尾があった

レナがたった一撃で切断したのだ

そのレナがナギとマリアの二人に近付いて行った

「まさかこんなところで会うとは思わなかったよ」

レナはいつもの元気な口調だった

この声で、やっぱりこの人はレナなんだと二人は改めて思う

「そんなことよりレナ！後ろ！」

ナギが必死に叫ぶ

後ろではティガレックスが体勢を整えていた

「うーん？」

レナはそんなことより、という感じで二人を見ていた

「そっか…大変だったね」

レナはポンとナギ頭に手を置いた

「え？」

ナギはよく分からなかった

何故この状況でそんなに落ち着いていられるのかと

「ガオアアアアア」

ティガレックスが三人に前足を振り下ろす

「っ！」

ナギとマリアは思わず目をつぶってしまふ

だが、二人に痛みは無かった

二人が目を開けると、レナに両腕で抱えられ、ティガレックスから

三メートル程離れていた

「やっぱり危なかったわ」

ふう、とレナがため息をした

二人は驚いた

あの数秒の内にナギとマリアを抱え、ここまで距離を取ったのだ
普通はこんなこと出来ない

「そう言えば、ヒナギクさんはどうしたの？」

「ヒナギクは、ティガレックスの攻撃をまともに食らって、そして
らあそこらへんに吹っ飛んで……！」

ナギはヒナギクが吹っ飛ばされた所を指差していたが、そこには立
っていたヒナギクではなく、倒れていたヒナギクがいた

「ヒナギク！」

「ヒナギクさん！」

二人はヒナギクに呼び掛けるが反応が無い

「そ、そんな……」

ナギから力が無くなる

マリアも愕然とする

「……………」

レナはティガレックスからさらに距離をとり、二人を下ろした

そして、漆黒の太刀を鞘から引き抜いた

「…下がって二人とも」

真剣な声だった

いつもの声ではなく

しっかりとした

「レナ？」

「ここは私に任せて」「で、でも」

「大丈夫だよ。それと、友達がこんなに傷つけられたのに、助けな
いわけ無いでしょ」

レナは力強くそう言った

「レナ……」

「レナさん……」

「ガオアアアアアア！」

ティガレックスが力強く咆哮をした

そして、その両前足が赤く充血していた

怒りが頂点に達したのだ

そのティガレックスにレナは走っていった

「ガオアアアアアア！」

ティガレックスがレナに飛び掛かる

怒る以前よりも速い

「奇遇だねティガレックス、私も丁度……」

レナが太刀を下に構え、体勢を低くし、一気にティガレックスに迫り、ティガレックスの飛び掛かりをかわし、腹が見えたときに

「怒りが頂点に達したところだ！」レナが太刀を振り上げる

ティガレックスの鱗は何の防御にもならず、引き裂かれる

「ガオアアア！」

ティガレックスは着地に失敗し地面に転げる

レナは直ぐにティガレックスとの距離を詰める

「ガルル」

ティガレックスも直ぐに起き上がり、レナに左前足を振り下ろす

レナは右側に跳びそれを避け、太刀で一線する

爪が威力に耐え切れずに碎け散る

ティガレックスは怯まず体を回転させ、尻尾を当てようとする
だが

レナに向かってきた尻尾がティガレックスの体から無くなった

「ガ……」

ティガレックスが叫ぼうとした

その瞬間

レナは目の前にいた

そして、

「終わりだ」

レナは太刀を袈裟がに振り下ろした

「アアア…」

ティガレツクスはその場に力なく崩れ落ちた

「すごい…」

レナの戦いを見てナギはそう呟いた

圧倒的、あのティガレツクスが一方的にやられたのだ
たった一人の人間に

あの笑顔で話していた人に

「レナさんて、こんなに強かったんですね」

マリアも驚く

予想外すぎる強さだった

レナは太刀を鞘に収め、ヒナギクに駆け寄った

雪の中からヒナギクを抱え上げ、ナギとマリアの元に戻る

「レナ、ヒナギクは、ヒナギクは大丈夫なのか」

ナギは目を潤ませレナに言った

「うん、大丈夫だよ。今は気絶してるだけだからね。でも…」

「でも!?!」

ズイツとレナに寄る

「なはは、そんなに寄られるとな〜…」 「でもなんなのだレナ!」

「ヒナギクさんはどうかしたんですか!」

二人とも真剣な声だった

「ま、まあ脇腹がちよろつと危険かな〜ってぐらいだよ。けど思っ
てたより酷くないみたいだから安心して大丈夫だよ」

レナは笑顔で言った

「よ、よかった」

「ホツとしましたわ」

「いや、よくない、よくないよナギちゃん！マリアさん！」

レナが元気に、大きな声で言った

もうすっかり元の口調である

「な、なんなのだ」

こんな風に返されるとは思っていなかったので少し驚く

「だって君たちも怪我、してるじゃないか」

「あ……」

ヒナギクばかり心配していて、自分のことをすっかり忘れていた

「ほらほら、まずはナギちゃん！横になった横になった！」

元気に明るくレナは言った

そして、ナギを横にし、足の傷が見えるようにする

レナは包帯を取り出して、それをナギの足に巻いていく

「いつつ！」

少々ナギは涙目になる

「やっぱ痛いよね〜でも、そこは我慢だよ！」

そんなこんなでナギに包帯が巻き終わる

「ふ〜、それじゃ次はマリアさんだよ」

ナギと同じようにマリアにも包帯を巻く

でも、ナギより傷は小さいので割と早く終わった

「これでよしっ」と

「ありがとうなレナ」

「ありがとうございますレナさん」

「どういたしまして」

レナは笑顔で言った

「んじゃ、そろそろ帰るよ〜」

「いや、その前にティガレックスをはぎ取る」

ナギが立とうとしたとき、足に痛みが走る

「〜！」

その痛みで立てず、地面に座り込んでしまう

「まだ立つちゃダメだよ。ナギちゃんの傷は少しばかり深いんだからね」

そう言つてレナはヒナギクを背中におぶり、ナギの肩を抱える

「私も手伝いますよレナさん」

マリヤも反対のナギの肩を抱える

「ありがとなレナ、マリヤ」

そして、ナギ達はティガレックスをはぎ取つた

そしてそののまま下山する

その途中、ナギが疑問に思つていたことを話す

「レナつて一体何者なのだ？」

そう思つのは当たり前だろう

ただの店員だと思つていたら、ティガレックスを圧倒する程の力を持つハンターだったのだから

「何者つて言われてもねえ…私は集會場で働くハンターかな。つて言つてなかつたっけ？」

「いやいや初耳だつぞ。それとハンターランクは何なのだ？」

「それは九だよ」

さらりとレナは言つた

「き、九！？本当か！？」

「うん、本当本当。やつぱりね楽しじゃなかつたわ。後半は楽なもんなんてありやしなかつたしね」

あつはつはと笑いながらレナは言つた

「だからあんなに強かつたのか…」

「それじゃあレナさんも依頼できたんですか？」

「んにや違うよ。私はただ食材を獲りに来ただけさ。ティガレックスの肉が少ないからつて」

「「え?!」」

二人は同時に言つた

まさかそんな理由とは思つていなかったからだ
「食材のために」

「ティガレックスを倒したんですか」

「そだよ？まあいつもやってたしね。食材は大体私の産地直送さ
！」

レナは元気に言った

そして楽しそうに

「マジでか！」

「おう、おおマジさ。だから集会場の料理はうまいのさ！」

「レナさんはすごいんですね」

「あはは、そんなすごいくないって。照れるじゃないか」

レナは笑って言った

そんな会話をしながらナギ達は村に帰った

レナ（後書き）

ナ「レナ強すぎだろ」

マ「まさかあんなに強いとは思いませんでした…」

レ「二人で何を話してるんだい？」

ナ・マ「レナ（さん）…！」

レ「ども〜」

ナ「何故ここにもいるのだ？」

レ「なんかね？作者が会話に詰まるからって」

マ「また作者さんは…」

ナ「相変わらずだな」

レ「それで、何話してたの？」

ナ「レナは強いな、と話してたよ」

レ「いや〜大したことないんだけどな〜」

マ「とても心強かったですよ」

レ「ありがと、ナギちゃん、マリアさん」

ナ「まあ、次回もよろしくなのだ！」

治療（前書き）

なんとかかですネ

時間かかりました

毎日疲れてしまいました

もうこれからもこのペースですネ

だいたい週一くらいです

今回は、レナのキャラが少し壊れたかもしれません
まあそんなこんなで四十四話です

治療

ナギ達は村に帰ってきた

ヒナギクまだ意識を失っていて、レナに背負われている

「戻って来たね」

村長が言った

「ああ、ほらこの通り、ティガレックスは倒したぞ一応……」

ナギがティガレックスの鱗を見せる

「確かに、本物だけど……レナ、おまえさんは手伝ったのかい？」

村長はレナに目線を移す

「手伝った、と言うか私はただ仕事をしただけだよ」

レナはいつも通りに言った

「成る程ね、それでもあんた達はかなり苦労したみたいだね」

村長はナギ達を見ていった

ナギは両足全体に包帯が巻いてあり、一人で歩くのはまだ辛そうだ

マリアも同じく包帯が巻いてある

ヒナギクにいたっては強い衝撃を受けて気絶している

みんなボロボロだった

「レナがいなかったらかなり危なかったんじゃないかい？」

「確かに、そうだった……」

もしレナがいなかったら本当に危なかった、死んでいただろう

「それでも次もやるのかい？」

村長は真剣に言った

これは本当に大切な事だ

人の命が掛かっているのだから

「……」

ナギは悩んだ

今回のティガレックスで自分達で出来るか不安になった

それでも

「ああ、もちろんだ！」

ナギは力強く答えた

どんなに辛くても、無理だと思っても、それでも、やらなくては
いけないのだ

「…そうかい…じゃあまた明日ね」

村長は言った

「また明日な村長」

「さようなら村長さん」

「じゃーねー村長」

そうしてナギ達は家に向かった

家へのドアを開ける

すると奥から足音が近づいてきた

「おかえりなさいお嬢様、マリアさん、ヒナギクさん」

ハヤテだった

どうやら怪我はほとんど治ってしまったらしい

驚異的すぎる回復力だ

「ただいまハヤテ」

「ただいまハヤテ君」

「おじやまするよ、ハヤテ君」

三人はそれぞれ言った

「レナさん！？なんで来てるんですか？それにその格好…」

ハヤテはレナが来たことに驚いたが、さらにその格好にも驚く
そのレナを見ていると、その背中にヒナギクがいるのがわかった

「ヒナギクさん！？どうしたんですか！」

そう言つてナギを見る

そのナギも足に大きな傷を負つたのか包帯が巻いてあつた
そしてマリアもナギ程ではないが包帯が巻いてある

「お嬢様、大丈夫だったんですか！」

思わず声が大きくなる

「そう大声をだすなハヤテ。私とマリアは大丈夫だ。ヒナギクも気を失つてるだけだ」

「そうですか」

ハヤテは少し安心した

「あの、ヒナギクさんはどこに寝かせればいいんだい？」

レナが言った

「そうか、こつちだレナ」

四人はハヤテが寝ていた部に行き、ヒナギクのベッドにヒナギクを寝かした

そしてレナが治療をするために服を脱がして怪我の具合を確認する
ヒナギクの脇腹は真っ赤に腫れていた

そこにレナは手を触れる

(ふう、やっぱり骨は折れてないみたいだね)

レナ是最悪の結果でなく安堵する

そして薬草を磨り潰した物を塗つていき、その上から包帯を巻いて
いった

その後ちゃんと服をもとに着せる

「これでよし」と

「ありがとうレナ」

ナギがお礼を言う

「うん、やっぱり骨は折れてなかったから、そこまで心配しなくて大丈夫だよ」

レナが笑顔で言った

「ヒナギクさんの事まで本当にありがとうございます」

マリアが頭を下げる

「いいですって、大事な友達ですから」

レナは素直にそう言った

本当に友達思いな人である

因みに、ハヤテはちゃんと部屋の外にいる

こんな様子を見せる訳にはいけないからだ

ドアをノックする音がする

「もう大丈夫ですか？」

ハヤテが訊く

「大丈夫だぞ〜」

ハヤテが部屋に入る

「まだ意識は戻らないのか？」

ナギは心配して言った

「もうそろそろ起きてもいいんだけどなあ」

レナは、うーんと首をかしげる

「そういえば、なんでレナさんが一緒なんですか？」

ハヤテは最初の疑問をナギに言った

「それはな、私達が危なかったところをレナが助けてくれたからだ」

「すごく強かったんですよレナさん。ティガレックスと言うモンス

ターをあつという間に倒したんです」

二人かレナの事色々話す

「そうだったんですか！」

またハヤテは驚いた

まさかレナがハンターで、その上ハンターランクが最高の九だなんて

「私達も最初は驚いたよ」

うんうん、とナギは頷く

「レナさん、今日はありがとうございました」

ハヤテが頭を下げてレナにお礼を言う

「そんな頭を下げないでよハヤテ君、私はただ友達として当たり前の事をしただけだよ」

レナはハヤテの行動に少し戸惑ってしまっ

「……………う、…ん…」

ヒナギクが目を覚ました

（あれ…確か私、ティガレックスの攻撃を受けて…それでナギが…
ナギ、…ナギ！）

ヒナギクは急いで体を起こす
だが

周りは雪景色ではなく、ティガレックスもいない

ここはハヤテ君と私の部屋でみんながいた

「あれ？」

思わず声が出る

今の状況が理解出来なかった

「ヒナギク！」

ガバツつとナギがヒナギクに抱きつく

「ナギ！、よかった…無事でよかった…」

思わず涙が流れる

「ヒナギクさん、意識が戻ってよかったですわ」

「心配しましたヒナギクさん」

ハヤテとマリアはヒナギクの意識が戻って安心した

「ハヤテ君、マリアさん」

「よかったよかった、なかなか意識が戻らなくて心配しちゃったよ」

「レナさん！？どうしてここにいますか？！」

ハヤテと同じ反応をした

驚くのは無理もない、レナが来たときにはみんな驚いたのだから

「それはな…」

ナギはハヤテと同じ説明をヒナギクにもする

「レナさんが助けてくれたの!？」

やはりヒナギクは驚いた

「みんな無事でよかったよ」

レナは笑顔で言った

「そだ、そろそろ仕事に戻らないといけないから」

レナはハヤテの部屋から出ようとする

「レナさん、ありがとうございます」

ヒナギクがお礼を言う

「うん、じゃーね」

レナは手を振って部屋から出た

「そうだ、ハヤテ君はもう大丈夫なの？」

「はい、おかげさまですっかり治りました」

ハヤテは笑顔で言った

「ヒナギクさんは大丈夫なんですか？」

「え? まあ大丈夫だ…」

そう言い掛けたとき

「!!!!!!」

ヒナギクの脇腹から痛みが走る

ティガレックスの一撃の傷が治っている訳もなかった

「そう言えばレナが言ってたな、脇腹が少し危ないって」

ナギが言った

「今日は寝ていてくださいヒナギクさん」

「うん、わかった」

ヒナギクは大人しくベッドで横になる

「で、夕食はどうするんだ？」

「ハヤテ君みたいにヒナギクさんはお弁当でいいんじゃないですか?」

「そうだな」

と、二人で意見をまとめる

「それじゃ行くぞハヤテ」

「はい、お嬢様。それでは行ってきますねヒナギクさん」

「うん、行ってらっしゃいナギ、ハヤテ君、マリアさん」

そうしてハヤテ達は集会場に向かった

集会場に着いたハヤテ達はいつも通りに席に座る

そしていつも通りにあの人が来た

「どもー！ご注文はいつも通りおすすめでいいですかー？」

いつもの調子でレナが来た

もう鎧姿ではなく、ここの制服である

「やっぱ早いな〜…」

ナギが呟く

「はいそれをお願いします」

ハヤテがレナに受け答えする

「じゃあちよろっとお待ちください」

と言ってレナは集会場の奥に行く

「それにしても…」

「おまちどおさまでした！」

ナギが言い掛けたときにレナが来た

有り得ない早さである

「今回はこれだよ！」

レナが持ってきた料理は

「ティガレックスのステーキさ！」

レナが大きく明るい声で言った

レナの出した皿の上には一センチはあるだろうかと言つぐべらいの厚さのステーキがのつている
要するに、とにかくでかい

「でか！」

「大きいですね」

「ほんとですね」

三人はその大きさに驚く

「おいしいから直ぐ食べれちゃうって
と言いながら席に座る

因みに席は

ナギ レナ

ハヤテ マリア

である

「『いただきます』」

手を合わせて言った

ナギがナイフで切ろうとするが

「？、ナイフで、切れない？」

ティガレックスのステーキは固かった

普通の肉の比ではない

「ああー！戦うときだけでなく、食べるときも苦労させおつて！」

ナギカ一杯ナイフでステーキを切った

そうするとステーキは切れたが、力を入れすぎたために皿にまでナイフがあたる

「てこずらせおつて」

切ったステーキをフォークで刺し食べる

(やっぱり硬いな…！)

ステーキを噛み切ったとき、その中にあった旨味が弾けた

確かに肉自体は硬いがパサパサと言うわけではなく、肉汁がしつかりとつまっていた

「うま…」

思わず声が出る

「ほんとですね」

「旨味がすごいですね」

「でしょでしょ！肉は硬いけどおいしさは本物さ」

レナのテンションが上がる

「この肉はさっきのティガレックスのやつなのか？」

ナギが食べながら言った

「んにゃ違うよ。これは食料庫に残ってた奴だよ。今日のは、今運んでるんじゃないかな？」

「今？」

「うん今。運ぶ人と狩る人に分けてるんだよ。その方が楽だからね」

「ふ〜ん」

「そだ、ねえ、ヒナギクさんが今居ないから言いたいんだけど…」

レナの声が少し小さくなる

三人はレナに耳を傾ける

「ヒナギクさんて、意外と胸ちっちゃいんだね」

レナはいつもの調子で言った

三人の食べる手が止まる

「いやほんと意外だったんだよね〜、だってヒナギクさんて私から見ても綺麗でかわいいし…それでさっき治療したときに見たら、まさかのぺったんことは、あはははは！」

レナの笑いは止まらない

テンションがもう止まらない

「あれはホントに胸なのか？って言うぐらいぺったんこなんだもん！真っ平ら！あはははは！」

周りで騒いでいるハンター達にも負けなくらいの大声で笑った

「そこまで言うか…」

ナギは自分の胸を触ってみる

厚みなど殆ど無い、ヒナギクと似たようなものだ

「くそ……イソフラボンボン……」

ナギは一人で沈む

「レナさん、そこまで言わなくても…」

マリアがレナを止めに入る

「ははははは！ふう、そうだね、ちょっと笑いすぎたよ」

「あはは…」

ハヤテは苦笑いするしかなかった

「ごめんごめん一人で喋っちゃって、それじゃ私は仕事に戻るから

ごゆっくり」

レナは店の奥に戻っていった

「まさかレナさんがあんな話をするとは…」

「かなりおかしかかったんでしょうね」

また食べながらハヤテとマリアは話した

「ナギ？どうしました？」食べていないナギにマリアが訊いた

「マリアよ…私はまだ大丈夫か？」

「え？」

意気なりで最初はなんのことだかわからなかったが、前のレナの話

などを直ぐに結び付け、マリアはナギの言いたい事がわかった

「大丈夫ですよナギ、むしろこれからですよ」

マリアは暖かい笑みを浮かべて言った

「マリア…ありがとう」

そしてナギは元気を取り戻し、食べ始めた

そしてハヤテ達は料理を食べ終え、家に帰っていった

治療（後書き）

ナ「絶対ヒナギクには負けんのだ！」

マ「その意気ですよナギ！」

ナ「イソフラボンボン…絶対大きくなってみせるのだ！」

レ「別にナギちゃんも普通だよ、そこまで気にすることないって」

ナ「そうかな…」

レ「そうだよ！だってヒナギクさんはもう…成長しないでしょ！あははー！」

マ「またレナさんが…」

ナ「歯止めが効かなくなる前に、次回もよろしくなのだ」

散歩（前書き）

なんとか更新できました〜

次回もこれくらいで更新出来たらと思っています

普通はしないといけないんですけどね…

なかなか…

まあこれからも頑張りますのでよろしくお願いします

それと、全然関係ないんですけど、八月六日の『サマーウォーズ』

みんな見てくださいね〜

おもしろいので〜

それでは四十五話です

散歩

ハヤテ達は集会場から帰ってきた

それで、ヒナギクがいる部屋に行く

「ただいま」

「「ただいま帰りました」」

と言ったが反応が無かった

それで近くに行行って見てみると

「すう…すう…」

ヒナギクは寝ていた

たぶん、疲れがたまっていたのだろう

「寝ちゃっていますねヒナギクさん」

「そうですね」

ハヤテとマリアが言った

ハヤテは持って帰ってきた弁当を近くのテーブルに置く

「そうですね、ナギ、ハヤテ君、一応言っておきますけど、ヒナギク

にはレナさんの事は言わないでくださいよ」

二人にズイツと迫ってマリアは言った

「わ、わかったよマリア」

「わかりましたマリアさん」

マリアの迫力に二人は少し驚く

二人もあれは流石に言っではまずいとは思ってはいたが

「それならいいんですけどね…」

「それでは寝るか」

「そうですね」

それでナギは自分の部屋に戻る、それにマリアも続く

「それじゃ寝るかな」

ハヤテはベッドに横になろうとした

その時

「私も一緒に寝るぞー！」

ナギが勢い良く入ってきた

ベッドを持ってきて

「な……」

ハヤテは驚いた

まさかナギがこんなことをするとは思わなかったからだ

「すいませんねハヤテ君」

マリアがベッドの後ろから言った

ナギだけではベッドを運ぶことは不可能なのでマリアがちゃんと手
伝っていたのだ

そうして、

ハヤテの部屋にはベッドが四つになった

因みに、ベッドを運んでいるときにヒナギクは起きなかった

「それではおやすみハヤテ」

「おやすみなさいハヤテ君」

「はい、おやすみなさいお嬢様、マリアさん」

明かりを消して三人は眠った

ベッドの並び順は

マリア ナギ ハヤテ ヒナギク

である

（よし、このままマリアが寝るまで起きてハヤテと二人で話すのだ
！）

ナギはそう思っていた

だが、

「すう、すう」

あまりの疲労のため直ぐに寝てしまった

「今日は本当に大変だったんですねマリアさん」

マリアに聞こえるくらいの小さなこえでハヤテは言った

「そうですね。命の危機を感じましたからね」
さらっと凄いことを言う

「だから、明日はちゃんと守ってくださいよハヤテ君」
マリアは笑顔で言った

「はい、マリアさん」

ハヤテはしつかりと言った

「ふふっ、頼りにしてますよ」

「はい、任せてください」

「それじゃおやすみなさいハヤテ君」

「おやすみなさいマリアさん」

そうしてハヤテとマリアも眠りに就いた

「うっ…ん」

ヒナギクは一番早く目を覚ました

いつもの習慣と早めに寝てしまったことで早く起きたのだ

（そう言えば昨日は寝ちゃったんだっただな）

取り敢えずベッドから起きる

痛みはもう無くなっていた

と言ってもまだ完全に治ったとは思えないが

（…なぜナギとマリアさんがこの部屋に？）不思議に思ったが、ナギがこうしたんだらうと適当に考える

横を見るとまだハヤテがすやすやと寝ていた

（やっぱりハヤテ君…かわいい／＼／＼）

かった

集会場の後ろには集会場の左側から行けた

そこには門の様なものがあり、それをくぐると小さな小屋があった
(誰か住んでるのかしら)

そんなことを思いつつ、さらに奥に進む

するとなにやら岩に囲まれた、闘技場の様な所だった

(は、こんな所があったのね)

感心しつつ辺りを見渡す

と、その時

後ろから声がした

「お前は何者だ！勝手に我が訓練所に入り込んで！」

ヒナギクは後ろを振り向く

そこには赤い防具を着ている男がいた

「あ、すいません勝手に入ってしまった。私は…」

「そうかお前は盗人だな！なら成敗しなくてわな」

「いや違います！私は…」

「盗人の話など聞く気はない！」

その男は何やらレバーの様なものを引いた

すると、闘技場の様なものの入口が塞がれる

そして、

奥の柵が開きモンスターが出てきた

「はははは！盗人め！ここでお前は終わりだ！」

「だーから！私は盗人じゃありません！」

「ふん、そんなこと信じられるわけないだろ！」

どうやら聞く耳持たずのようだ

(…もう…どうしてこんなことに…)

ヒナギクはため息を吐く

「やってしまえ！」

男が命令するとモンスターが向かってきた

男はちゃんと柵の外側にいるので安全な所にいる
そのモンスターは全身が真っ白で、目が無く、首が長く、うねうね
している、何とも気持ちの悪いモンスターだった

(気持ち悪…)

ヒナギクは見た瞬間にそう思った

「武器を持たぬお前に勝ち目は無いわ！大人しく自首しろ！」男は
大声で言う

(なんか言ってることが違うような…)

さっきは倒すようなことを言っていたのに、今度は自首を勧める
どっちがしたいのやら

「もうやるしかないわね…正宗ー！」

ヒナギクが叫ぶと正宗が現れる

それを見た男は驚いた

「木刀が現れた！？だがそんな武器ごときではフルフルは倒せんは
！」

相変わらず大きな声だ

「フルフルって言うのねこのモンスター…」

フルフルは顔を仰げ反らせる

ヒナギクは直観的に危険と察知し、右側に走る

フルフルが青白い玉を三つ吐いた

その玉は地面の上を進んでいき壁に激突した

壁には凹が少し出来ていた

「あれは…電気？」

「はははは！そうだ！フルフルの電気はかなりの威力だ！あたりで
もしたら一発で死ぬかもな」

男は笑って言った

(これは油断できないわね)

ヒナギクは気を引き締め、一気にフルフルに接近する

「ギユワァァ！」

フルフルはヒナギクに向かって飛び掛かってきた

ヒナギクはとつさに右側に跳び、それを避ける

フルフルが地面に着地した瞬間に正宗を袈裟がに振り下ろす

ヒナギクの攻撃はフルフルの足に命中する

フルフルはそれに耐えられず転けてしまう

(これならいける！)

ヒナギクはそう思い、一気に畳み掛けようとする
が

「ギユワアアア！」正宗が当たる瞬間にフルフルの体から電気が発
生した

もし正宗が当たっていたらヒナギクは感電し、気絶、もしくは死ん
でいたかもしれない

少しだけフルフルから距離を取る

(うかつに近づくと感電、離れすぎるとブレス、なかなか面倒ね)

ヒナギクは正宗を構え直す

フルフルは放電をやめ、起き上がる

「ギユワアアアア！」

フルフルは咆哮をした

すると、フルフルの口から煙のようなものが出ていた

「お前はフルフルを怒らせたようだな！」

「は！？ たった一撃で！？」

確かに怒っている様に見えなくもないような

「ギユワアアア」

フルフルは放電しつつ飛び掛かった

ヒナギクは左側に跳んで避ける

フルフルは素早くヒナギクの方を向き、ブレスを吐く

ブレスの数は五つに増えていたが、ヒナギクはブレスの間を通過して
避ける

そして、またフルフルの横に回ろうとして走るが

目の前にフルフルの顔があった

見るとフルフルの首がかなり伸びていたのだ

(なんなのこいつ……ってヤバッ避けられな……)

フルフルの顔がヒナギクの腹に当たる

「がっ……」

その攻撃でヒナギクは三メートル程吹っ飛んだ

「ギユワアアア」

フルフルは首を元に戻し、ヒナギクに向かってゆっくりと迫る

「ぐ……げほっ……」

(っっ…傷がひどくなっちゃうじゃない)

ヒナギクは脇腹を押さえつつ立ち上がる

「はははは！これで私の勝ちだな盗人！」

「だから！…違っつて言ってるのに……」

ヒナギクはもう大きな声で否定するのをやめた

もう何を言っても無駄だと思ったからだ

「それにしても盗人。そんな体なのによくやった方だ」

男は笑いながら言う

「そんな体でな！そんな細く、成長していない体でな！」

「！」

ヒナギクが男の言葉に反応する

「せ、成長していないって…どういう意味ですか？」

ヒナギクが男に訊く

男はさらっと応えた

「そんなのそのちっちゃな胸に決まっているだろう！」

「！」

ヒナギクは体をふるふると震わせる

「ちっちゃい……」

「そうだちっちゃな胸だ！そろそろ終わりにしてやれフルフル！」

「ギユワアアア！」

フルフルはヒナギクに向かって飛び掛かろうと足に力を込める

「ちっちゃい…ちっちゃい言うな……！」

ヒナギクの怒りが爆発した

ヒナギクは先程とは比べものにならない早さでフルフルに迫った
そして

「これから成長するのよー！ー！ー！」

そう叫びながら正宗をフルフルの頭に振り下ろす

フルフルは放電する暇も、避ける暇もなくその攻撃をくらった

「ギユワアア…アア…」

フルフルはその場に倒れた

死んだわけではなく気絶しただけだった

本当に気絶したため、ゲームの様に何秒かで復活はしない

「はあ、はあ…」

「な、なんとという強さだ…」

男は驚いた

たった一撃でフルフルが気絶させられるとは思っていなかったからだ

「すごいなお前…」

「そんなことより、早く此処から出してくれない？」

「あ、ああ、わかった」

男はレバーを引いて柵を上げる

「あの！」

「な、なんだ」

ヒナギクが迫っていたので男はたじろいでしまう

「私、盗人じゃないですから！」

「わわ、わかった、わかりした、信じます！」

「そう、ならいいわ」

ヒナギクは男に迫るのをやめる

「あの、すみませんでした！」

男は頭を下げて謝った

「うん、分かればよろしい。もうむやみにモンスターを出しちゃだ

めよ？」

「はい！わかりました！」

そうしてヒナギクはこの場所から出た

空は前よりも明るくなっていた

(そろそろ帰ろうかな)

そう思いヒナギクは家に向かって歩いた

(結局あそこってなんだったのかしら?)

こうしてヒナギクの散歩は終わったのだった

散歩（後書き）

ナ「やっと後半ぐらいになったよな」

マ「そうですね。半分くらい終わりましたからね」

ナ「作者は早くティガレックス戦を早く書きたかったらしい」

ヒ「私達は大変だったけどね」

ナ「そうだったな」

マ「まあこれからも頑張りましょうね、ナギ、ヒナギクさん」

ナ「もちろんだ！」

ヒ「はい！」

ナ「それでは次回もよろしくなのだ！」

再び雪山（前書き）

まず最初に、すみませんでした！m（――）m

こんなに間が空いてしまって…

最初は夏休みの宿題がヤバイので書かなくなってしまったんですが、次は部活、テスト、部活、テストとなってしまうて……
本当にすいませんでした

次もいつになるかわかりませんが、よろしく願いします

再び雪山

散歩をし終えたヒナギクは家に帰ってきた

(散歩をしてきただけなのに、なんでこんなことに…)

はあ、とため息を吐いて部屋に入る

「あ、ヒナギクおはよう」

「おはようございますヒナギクさん」

「ヒナギクさん、おはようございます」

ハヤテ達はみんな起きていた

「おはよう、ナギ、ハヤテ君、マリアさん」

「起きたらヒナギクさんが居なくてびっくりしましたよ」

「ほんとだぞヒナギク！心配したんだぞ！」

「ごめんねハヤテ君、ナギ」

「でも、何もなくて良かったですわ」

「ごめんなさい、マリアさん」

「よし、それじゃあ朝ご飯を食べに行くぞ」

ナギの一声によりハヤテ達は集会場に向かった

集会場はいつも通りの光景だった

相変わらずである

そして、ハヤテが席を見付けて座る、すると

「ご注文をお伺いします」

黒髪のロングストレートの店員が来た

相変わらずの早さだ

「おまかせでお願いします」

「わかりました。少々お待ちください」

店員はお辞儀をして、奥に行った

「やっぱりレナはいなかったな」

「また食材を獲りに行ってるんでしょうね」

「レナさんは凄いですね」

「ホントですね」

そんな会話をしていると

「お待たせ致しました」

先程の店員が戻ってきた

手際よく料理を並べていく

「それではごゆっくり」

店員はお辞儀をして奥に戻っていった

「あの店員は礼儀正しいよな」

「レナさんがあだからね」

ヒナギクは苦笑いして言った

「確かに……」

「それじゃあ食べましょう。いただきます」

「……いただきます」

四人は手を合わせて言った

そして、半分ほど食べ終えた頃

「そだ、そう言えばヒナギクは朝なにをしていたのだ？」

料理を食べながらナギは言った

「朝は散歩をしてたわ。それでねナギ、そのときこの集会場の左側の所に行ったんだけど……あそこってなに！？意気なりモンスターを出されて大変だったんだけど！」

ヒナギクはその事について説明した

意気なりモンスターを出されて大変だったこと、そこに居た人がとてもムカつく奴だった事など

「……って！ホント大変だったのよ！」

ヒナギクの説明を聞き終わったとき

ハヤテ、ナギ、マリアは同じ事を思った

（（レナさんと同じ様なことを言っている！！）（）

あのとときのレナと

「みんなどうしたの？そんなに驚いたの？」

ヒナギクは首を傾げる

「そ、それは大変だったなヒナギク」

「ホントですね」

「？それであそこってなんなのナギ？」

「あ、ああ、あそこは訓練所だ」

「「訓練所？」」

ヒナギクだけでなくマリアも疑問系の声で言った

「そうだ。そこで武器の使い方を学んだり、モンスターとの実戦形

式の訓練もできる所だ」

「そんな所があったんですね」

マリアが感心して言った

「だからモンスターが出てきたのね」

はあとヒナギクはため息を吐く

「もう二度と行きたくないわ……」

ヒナギクのテンションが下がる

「行く予定もありませんから大丈夫ですよヒナギクさん」

「ハヤテ君、そうよね、もう行かないわよね」

ヒナギクに元気が戻る

そんな感じでハヤテ達は食事を終えて集会場を出た

集会場をでたハヤテ達は、武器を持って村長のところに来た

「今日は全員かい」

村長がハヤテ達を見て言った

「今日のはなんなのだ？」

「今日はまた雪山だよ。そこでクシャルダオラを倒してもらおうよ」

「とうとう古龍か……」

ナギが難しい顔をする

それを見て、ヒナギクとマリアは古龍と言っものが楽ではないと察する

「厳しくなってきましたね」

「だがやるぞ！ハヤテ」

「はい、お嬢様」

「気をつけてね」

そうしてハヤテ達は雪山に向かった

「さ、寒ーい！」

ナギは雪山で叫んでいた

ハヤテ達が今いる所はティガレックスと戦った場所である

「た、確かに…それに、こんなに吹雪いてたっけ？」

ヒナギクが言った

前回来たときは雪は降っていたものの、吹雪いてはいなかった
「ホットドリンクも飲んだというのに……」

ナギが震えて言った

「でも、これではあまり先まで見えませんね……」

ボウガンを使うマリアにとっては良くない天気だ

「うう…早く探して、とつとと帰るのだ」

ナギが前進する

ハヤテ達もそれに続いていく

その時

「ギャガオアアア！」

どこからともなく咆哮が聞こえた

「！どこだ！？」

「くっ、この吹雪きではよく分かりません」

ハヤテ達はクシャルダオラを探すが姿が見えない

いつ来ても良いように武器を構える

一秒、三秒、五秒と過ぎていく

「……」

誰も一言も話さず、敵に集中する

一瞬音がした

風を切るような

すぐ後だ

ハヤテの頭上の吹雪きに穴が開いた

「ハヤテ君！」

それに気付いたヒナギクがハヤテを突き飛ばす

ハヤテがいた位置は地面が抉れ、穴が出来た

「ありがとうございます、ヒナギクさん」

「どういたしまして」

ハヤテとヒナギクは直ぐに起き上がり、攻撃があつた方を向く

そこから凄いスピードで何かが降りてきた

それは地面に当たり、雪煙りが上がる

雪煙りが無くなり、姿が見えてくる

「あれがクシャルダオラ……」

クシャルダオラは四つ足で、全身が鋼に覆われているようだった

全身の光沢が美しく、鋼の翼はそこらの剣より鋭そうだった

「ギャガオアアアア！」

クシャルダオラが咆哮をあげる

戦いの始まりだ

再び雪山（後書き）

ナ「遅すぎだー！」

マ「これはやりすぎですよね」

ヒ「はあ、まさかこんなにかかるとはね」

マ「八月から随分経ちましたね、もう冬ですか？」

ナ「こら！作者！次はもっと早く書くのだぞ！」

ヒ「読者の皆様、本当にすみませんでした」

マ「次回もいつになるか分かりませんが、よろしくお願いします」

クシャルダオラ（前書き）

すいません、遅れました…m(――)m

何かと疲れてしまつて…続きも思い浮かばなくて…

それでも、がんばりますのでよろしくお願いします

クシャルダオラ

「ギャガオアアア！」

クシャルダオラは咆哮をあげる

するとその周りの吹雪が無くなる

正確には吹雪きがクシャルダオラを避けているような感じだ
クシャルダオラが直ぐに動く

二本の後ろ足で地面を蹴り、距離を一気に縮め、前足をハヤテに振り下ろす

ハヤテは後ろに下がり攻撃をかわす

その隙にマリアがボウガンを撃つ、が

その弾丸はクシャルダオラに当たらず、跳ね返って来た

「えっ？」

マリアは驚きを隠せなかった

撃った弾丸が跳ね返るとは思ってもいなかったから

その跳ね返った弾丸は撃ったマリアだけでなく、ハヤテ、ナギの方向にも向かってしまう

「うわ！」

「くっ、」

ナギは飛び込んで、マリアとハヤテは横に跳んで避ける

「大丈夫ですか、ハヤテ君、ナギ」

「大丈夫ですよマリアさん」

「大丈夫だマリア……」

ナギは直ぐに起き上がり言った

クシャルダオラがハヤテを向いている隙にヒナギクが横から正宗を振り下ろす

だが、正宗はクシャルダオラに当たる寸前で止まってしまっ

（な、何で！？）

何も見えないのに、壁など無いのに攻撃が止まってしまっ

その出来事にヒナギクは驚き戸惑う

そして、距離を取るため後ろに下がる

「ギャガオアア」

クシャルダオラが咆哮をあげると、クシャルダオラを囲むように雪煙りが上がった

「これじゃ攻撃が見えないじゃない…」

「そうですね…」

ハヤテ達はただ雪煙りが無くなるのを待つ

そして、音がした瞬間に、雪煙りの一部が晴れた、正確には無くなつたのだ

それ、は吹雪きも無くしていた

そこだけ吹雪きに穴が空いている様な感じだ

それはナギに向かって進む

ナギはそれを盾を構えて防ぐ

(ぐっ！、威力が強すぎる…)

ナギがそう思った瞬間

ナギが吹っ飛んだ

「かはっ…」

「お嬢様！」

「「ナギ！」」

十メートル程ナギは吹っ飛んだ

地面に雪が積もっていたおかげで、着地のときのダメージが少なかった

「んぐ…」

ナギが体を起こそうとしたとき、体が動かなかった

自分の体を見てみると

左半身が凍っていた

(ぐっ、体が動かない…)

「ガギヤアアア！」

クシャルダオラがナギに向かって飛び出す

「させるか！」

ハヤテがクシャルダオラの腹を切り上げる、が
また当たる寸前で剣が止まる

「ぐっ！」

力を込めるが剣は動かない

そこに

「はあっ！」

ヒナギク反対側から更に切り上げる

二人の攻撃が一ヶ所に炸裂する

それはクシャルダオラの壁をぶち破った

「ギャガアア!？」

クシャルダオラは腹に攻撃が当たり、後ろに吹っ飛ぶ

「ありがとうございますヒナギクさん」

「ええ、それよりも…」

ヒナギクは正宗を構え直す

クシャルダオラはゆっくりと起き上がる

切られた腹からは血は流れだして

いなかった

ただ傷が付いているだけだった

「ギャガアア！」

クシャルダオラは咆哮を上げ、前方に何かを放つ

そこだけポツカリ吹雪が無いので避けるのはそれほど難しくない

ハヤテとヒナギクは横に避けようとするが

気付いたのだ

後ろには動けないナギがいることに

ヒナギクがハヤテにそれを言おうとしたとき

ヒナギクは横につき飛ばされていた

「えっ?…」

ヒナギクは一瞬理解できなかつた

そしてハヤテにクシャルダオラが放ったものが当たる

ハヤテは大剣を盾にするが、右側が凍り付けになる

「ハヤテ君！」

ヒナギクは思わず叫ぶ

「だ、大丈夫です」

「大丈夫なわけじゃない！そんな状態で！」

「ヒナギクさん…それより…」

ハヤテは目で合図する

ヒナギクが見るとクシャルダオラが突進してきていた

「ヤバイ…」

（攻撃は防げないし、攻撃しても当たらない…どうすればいいのよ！）

ヒナギクがそう思った時だった

「全員目をつぶれー！」

その言葉の通りに全員目をつぶった

次の瞬間

世界が一瞬、光に包まれる

「な、何が起こったの…」

目を開けると、クシャルダオラが悶えていた

先ほどの光で目をやられたらしい

「ヒナギク！今のうちに逃げるぞ！」

手を引いたのは

ナギだった

「マリアはハヤテを頼む」

「え、ええ、わかったわ」

マリアは慎重にハヤテを運ぶ

「ナギ！体は大丈夫なの！？」

「大丈夫だ、それより今は逃げるぞ！」

ナギの言う通り、今は逃げるしかなかった

クシャルダオラ（後書き）

ナ「あゝ、やらかしたな」

マ「予想通りでしたけどね」

ヒ「最近は、まあ、…ね」

ナ「これからもこんな感じで更新するんじゃないか？」

マ「可能性大ですね」

ヒ「それでも読んでくれる方、これからも」

ナ・マ・ヒ

「よろしくお願いします」

作戦（前書き）

なんとか更新出来ました
でも短いです…

……だー！

なかなか進まないー！

どうしたら上手く書けるのか…

はあ…

まあ、これからも頑張ります…

作戦

「はあ、はあ……」

ハヤテ達はなんとかクシャルダオラから逃げ切れた

「なんとか逃げ切れたわね」

「危ない……所だったな……」

ナギが息を切らせながら言った

「でも、何で動けるの？凍ってたはずなのに……」

不思議に思っていたことをヒナギクは訊いた

どう頑張ったって治るはず無いことなのだから

「それはこれを使ったからだ」

ナギがビンを見せる

氷解剤

凍った体を治す薬だ

「よく持ってたわね、そんな物」

「支給品にあったものだからな。だか、後一つしかないんだ……」

「丁度いいわ。早くハヤテ君に使ってあげて」

「わかった」

ナギはハヤテの凍った所に氷解剤を塗っていく

すると、凍っていた所がみるみる溶けていった

「ありがとうございます、お嬢様」

「お前もあまり無茶をするなよ」

「ははっ、すみません」

「それと、ありがとな……守ってくれて……」

ナギが照れながら言った

「はい」

ハヤテは笑顔で言った

「あの、これからどうするんですか？」

マリアが言った

「こちらの攻撃はあまり効果が無いみたいですけど…」
マリアが不安そうに言った

攻撃が当たらないなんて、今まで無かったことだから
「確かに…あれはかなり強いですかね」

ヒナギクもマリアと同じ気持ちだ

「大丈夫だ！一つだけ策がある！」ナギは自身たっぷりに言った

「本当ですか！？ナギ？」

「本当なの！？ナギ？」

二人が同時に言った

「ああ！本当だ」

「どんな作戦なの？」

「それはこれを使うんだ」

みんなにびしつと玉を見せる

「何、それ？」

ヒナギクが首を傾げて言った

「これは閃光玉だ。前に一瞬強い光があっただろ？それはこれを使
ったからなのだ」

「成る程…」

「ゲームでも便利なアイテムでした」

「それを使ったとしても、敵が目を眩ませるのは少しの間…その短
時間で倒せるんでしょうか…」

マリアがナギに訊く

そんな事は絶対無理だ、そうマリアは思っていた

ナギの答えは

違った

「別にその間に倒すとは言っていないぞマリア」

「え？」

「そうなのナギ？」

マリアだけでなくヒナギクも驚く

「ああ、私たちがその短い間にやることはただ一つ！奴の角を折る

ことだ！」

ナギは力強く叫んだ

「なんで角？」

ヒナギクが訊く

「あの角さえ折ればあいつが出している風を無くすことが出来るのだ」

「出来るのだから……クシャルダオラの周りのやつって風だったの！？」

ヒナギクは叫んでしまった

「言って無かったか？」

「言っていないわよ（ですよ）！」

ヒナギクとマリアが同時に言った

「あゝ、ごめん」

「まあ、いいけど。それで、作戦はそれで全部？」

「具体的には私が閃光玉を投げる、そしたらハヤテとヒナギクが角に向かって全力で攻撃する。マリアは二人が近づいている間に少しでも角にダメージを与えるんだ」

「わかったわ」

「わかりました」

三人はそれぞれ返事をする

「あと、因みに一発勝負だから。閃光玉が一つしかないからナギが最後に付け加えた

「……そういう大事な事は始めに言っただよ（ください）」
そんな感じでナギの作戦が始まった

作戦（後書き）

ナ「いや、クシャルダオラ…長かったな」

ヒ「いや、まだ終わってないからね」

ナ「それでも、もうすぐ終わりそうな所まで来たじゃん？やっとな」

マ「まだまだ終わりには程遠いですけどね…」

ナ「まあ、構図ぐらいは考えているみたいだからな。いつかは終わるだろ」

ヒ「気が遠くなる話ね…」

ナ「そんなこんなで、これからも」

ナ・ヒ・マ

「よろしく願います」

鋼龍（前書き）

いよっしや更新！

なんとか今月中にいけました

出来たらこのペースですね、維持できたらいいですね

これからも頑張ります

ハヤテ達がクシャルダオラがいた場所に戻ってくる
そこには、まだクシャルダオラがいた

「グルル…」

どうやらハヤテ達を探しているようだった

「ところで、角って四本くらいあるけどどれにするのハヤテ君？」

「そうですねえ…あの一番右端のですね」

「うん、わかったわ」

ヒナギクは頷いて言った

「よし、ではいくぞ！」

「ええ」

「はい」

「了解」

それぞれが返事をした後、ハヤテとヒナギクはクシャルダオラに向
かって全力で走る

「

クシャルダオラが二人に反応し、こちらを向いたとき

「いつけえええ！」

ナギが力一杯閃光玉を投げる

閃光玉はハヤテとヒナギクの後ろで爆発した

そして、強い光が周囲を覆った

ナギとマリアは直ぐに目をつぶる

ハヤテとヒナギクはそのまま走り続ける

「ギャガオアア」

クシャルダオラは作戦どつりに目を眩ませていた

その間にマリアは発砲する

その全てが小さな角に当たり、ダメージを与えていく

（後は頼みますよハヤテ君、ヒナギクさん）

マリアは二人に託す

そして、クシャルダオラにたどり着く

「いきますよ、ヒナギクさん！」

「ええ！」

二人は剣を上にあげ

「「いつけえええ！」」

一気に振り下ろした

二つの剣は見事にクシャルダオラの角に当たる

そして

バキィ と音を立てて折れた

「よし！」

「やった！」

二人は少し安心した、一回しかチャンスが無いこの作戦が成功したことに

「やったぞマリア！」

「やりましたねナギ！」

二人も成功したことに喜ぶ

だが、戦いが終わったわけではない

「ガルル」

クシャルダオラは眩ませていた目が治り、体勢を整える

「戦いはこれからですね」

「そうね」

ハヤテとヒナギクは武器を構える

「私達も行くぞマリア」

「はい、ナギ」

ナギとマリアもクシャルダオラに向かう

「ギャガオアアア！」

クシャルダオラは咆哮をあげ、ブレスを放つ

ハヤテは左、ヒナギクは右に跳びかわす

そして、ハヤテは一気に近づき前脚に大剣を振り下ろす

だが、クシャルダオラの体は固く、切り込めない
クシャルダオラは体を回し、尻尾で攻撃する

ハヤテは大剣を盾にするが威力に耐え切れずに吹っ飛ばす
その際にヒナギクが腹に正宗を振り下ろす

だが、クシャルダオラはそれを飛んで避ける

「くっ！」

ヒナギクが見上げると、クシャルダオラは頭を仰け反らせていた

(あの行動は…ブレスの前兆)

ヒナギクは直ぐにクシャルダオラから距離をとる

そんな時に、ナギとマリアが到着する

「大丈夫か、ヒナギク？」

ナギが心配そうに訊く

「ナギ、それよりあれ」

ヒナギクがクシャルダオラを指す

それをナギとマリアが見る

「ヤバいな、あれ」

「危険な感じしかしませんね」

そう言ったあと

「ギヤガオアアア！」

クシャルダオラはブレスを放った

それは先程までのとは違い、ずつと風が出ている、扇風機の様だった
それから逃れるためにナギ達は走った

「これっていつおさまるの！」

走りながらヒナギクは言った

「だいたい…十秒くらいだった…気がする」

「だいたいって、随分曖昧ですね、ナギ」

マリアは余裕そうだが、ナギは苦しそうだ

(こうなるなら…もう少し運動…しとけば…良かった)

そんなことを思っていた

だが、後悔すでに遅し

ナギが後ろを振り替えると、雪があつたところは地面が抉^{えぐ}れていて、雪は上に吹っ飛んでいた

(ぬおおお！これはホントにヤバイー！)

ナギは死ぬもの狂いで走る

その速さはいつもナギからは想像も出来ない速さだ

(ナギってこんなに速かつたけ？)

ヒナギクにはそんな疑問が浮かぶ

(何でこんなに速く走れるんでしょう？)

マリアもヒナギクと同じようなことを思う間に、ナギが二人を抜いて、先頭を走る

その時

「これ以上お嬢様達に手を出すなー！」

声とほぼ同時にクシャルダオラが地面に叩きつけられた

地面に叩きつけられたクシャルダオラはなんとか立ち上がり、後ろを振り替える

後ろにいたのは

「ハヤテ！」

「ハヤテ君！」

ハヤテは『疾風のごとく』を使い、上空から一気に加速し、その一撃をたたき込んだのだ

「みなさん無事ですか？」

「ああ、それより…」

「ギヤガオアアアアアア！」

ナギの言葉を遮り咆哮をあげ、ハヤテに突進する
もうクシャルダオラは完全にキレていた

ハヤテもクシャルダオラに向かう

最初にクシャルダオラが右前脚を振り下ろす

ハヤテは右に跳びそれをかわす

そして、

力を全身に込め

疾風のごとく

ハヤテはクシャルダオラの顔面に突っ込み、大剣を振り上げる

「ギャガオ!？」

クシャルダオラの顎が切り裂かれる

ハヤテは更に地面を蹴り、クシャルダオラの懐に突っ込む

「いけえええ！」

ハヤテは大剣を体に突き刺す

大剣は完全にクシャルダオラの体に貫通していた

「ギャ…ガオ…ア」

クシャルダオラは前脚を振り下ろすために、前脚を上げる

だが、それが振り下ろされることはなく、力なく地面に崩れ落ちた

「お、終わりましたよー」

ハヤテが大剣を抜き、ナギ達に手を振った

「本当か!？」

「良かった」

「流石ハヤテ君ですね」

三人はハヤテの所に向かっていく

「今回も強敵だったな」

「そうですね、最初はかなり焦りましたよ」

ハヤテが苦笑いし、はぎ取りながら言った

「本当よ、ナギとハヤテ君が凍った時は本当に心配したんだからね」

ヒナギクは少し強めに言った

「すいません、ヒナギクさん」

「まあ、私を守ってくれたことは…ありがとう／＼」

ちよつと赤くして言った

「当然ですよ。ヒナギクさんは大切な人なんですから」

ハヤテは笑顔で言った

「ハ、ハヤテ君／＼」

ヒナギクはもう少し赤くなる

「ふん！」

「いたっ！」

ナギがハヤテに肘打ちをする

「なにするんですかお嬢様」

「何でもない。ハヤテのバーカ！」

ナギは不機嫌になってしまう

（あらあら、相変わらずですね、ハヤテ君もナギもヒナギクさんも）
そんな光景を見てマリアは笑っていた

鋼龍（後書き）

ナ「いよっしゃ勝ったああああ！」

マ「強敵でしたね」

ヒ「結構大変だったわね」

ナ「よし！これでまたクリアに前進だな」

マ「あと二回…頑張りましょう」

ヒ「終わりが見えてきましたわね」

ナ「一気にいくぞー！」

ヒ・マ「おーー！」

黄金（前書き）

地震ヤバイ…

命の危機を感じました…

本当に危険で何をしたらいいのか…という感じでした

地震対策はちゃんとした方がいいと言ったのが身に染みました

黄金

ハヤテ達はなんとかクシャルダオラを倒して村に戻ってきた

「まさか倒すとはね…」

村長は驚いていた

「結構苦労したかな」

「そうかい…それじゃまた明日ね」

「ああ」

「わかりました」

ヒナギクとマリアは会釈をして村長と別れた

ハヤテ達は家に戻らず、そのまま集会場に向かった

中に入ると、相変わらずであった

そして空いている席に座る

「いらっしやいませ。ご注文お決まりでしょうか？ああ、ハヤテさん達じゃないですか」

そう言ったのは朝に会った、黒髪の長い女性だった

「はい、そうですけど…なんでそんなに驚いているんですか？」

「知らないんですか？最近ちょっとずつ話題になっているんですよ？すごい早さで難題をクリアしているとかで」

笑顔で言った

「そうなんですか」

「知らなかったな…」

そんな有名になるとは思っていなかったの、ハヤテとナギは驚いている

「知りませんでしたね、マリアさん」

「まあ、他の人とあまり話しませんからね」

「確かにそうですね」

ヒナギクとマリアはあまり気にしていない様だった

「私はミュと言います。よろしくお願いします」

ミュはお辞儀をして言った

「こちらこそよろしくお願いします」

「よろしくな」

「よろしくね、ミュさん」

「よろしくお願いします、ミュさん」

それぞれがあいさつをする

「朝見たときはもしかして思ったんですけど、何かと朝は時間が無いので話せなかつたんですよ」

「朝は忙しいですからね」

「…そう言えばレナはいないのか？」

ナギが辺りを見回して言った

「ああ、レナさんなら…」

ミュが言おうとした時

「だから私はあなた達のチームには入らないって言ってるでしょ！」

レナの声が後ろから聞こえた

「わかつたから、そんなに大きな声を出すなって」

それを宥める男がいた

その男は黄金の鎧を纏まとっていた

それは、見事な光沢を放っていて、とても美しい

それと、その男は金髪で、顔も整っている

「あの人は誰ですか？」ハヤテがミュに訊く

「あの人は最近頭角を表している三人組チームのリーダー、シユンです」

「そんなに強いのか？」

「若い世代の中では一番の実力を持っていますね」

「そんなすごい人がレナさんをスカウトするって事は、やっぱりレナさんの強さは本物って事ですね」

ヒナギクがミュに言った

「それはもう…この集会場の中でも群を抜いていますからね」

ミュが誇らしげに言った

「確かに、レナさんはとても強かったですからね」

マリアも頷く

そしてレナとの会話に耳を傾ける

「用が済んだんならもう帰って」

レナはそう言い放った

「わかったよ、でも諦めないからな。それに、次に来た時はきっと仲間になってもらえるさ」シユンは自身たっぷり言った

「いくぞおまえら」

「ういっす」

「了解」

シユンは仲間を連れて、集会場から出た

「ふんっ」

レナは機嫌を損ねたまま集会場の奥に戻っていった

「いつもあんな感じなのか？」

ナギがミュに訊く

「まあ、いつも断っていますけど、最後にああ言ったのは初めてです
ね」

「最後？」

「『次に来たときは仲間になってもらえるさ』って。多分悔しいから言っただけだと思いますけど」

ミユ呆れたように言った

「あっ！？ご注文…どうしますか？」

どうやらすっかり忘れていた様で、苦笑いしながら言った

「おすすめで頼む」

「わかりました。少々お待ちください」

ペコリとお辞儀をしてミユは奥に行った

「意外と性格は堅くなかったな」

ナギが思っていた事を言った

「確かに親しみやすかったわね。明るかったし」

ヒナギクが言う

「仕事をしているだけの印象だけで判断してはいけないという事ですね」

マリアが言った

「全くだな」

と、そんな会話をしている内に

「お待たせしました」

ミユが料理を運んできた

「おすすめはこれです」

出されたのは

「肉じゃが…か？」

「はい、そうです」

ミユは笑顔で言った

肉じゃが、そして、真っ白なご飯なんとも家庭的なものが出てきた

「それでは」

「…いただきます」「…」

両手を合わせて言った

ナギがばくつと肉じゃがを食べる

「うまい。相変わらずの味だな」

「確かにおいしいですね」

「うん。おいしい」

「おいしいですね」

「パクパクと料理を食べていく」

「それは何よりです。クシャルダオラの肉は固いので柔らかくする
のが大変なんですよ」

「そうなのか」

「そう言いながら肉じゃがを食べる」

「そう言えば、もう今の武器じゃ辛いよな……」

「ナギがため息をついて言った」

「明日武器を作ってもらいますか？」

「ん……素材足りるかな？」

「それは何とも言い難いですね」

「苦笑いしてハヤテは言った」

「そつだ！」

「パンと手をたたいてミュガ言った」

「私の家に来ませんか？素材が余っているのでそれを使ってください
い！」

「ミュは大きな声で元気よく言った」

「いいのか！？って、ミュもハンターだったのか！？」

「そうなの！？」

「ナギ達はミュの言葉に驚く」

「あれ？言つてませんでしたか？」

「言つとらんわ！」

「ナギがつっこむ」

「「ミュさんもかなり強いんですか？」」

「ヒナギクがミュに訊く」

「まあ、一応ハンターランクは7ですけど……実際は上位しかできま
せんね。レナさんの助けで7になったので」

「は〜…強いんだなミユも」

「…?」

ナギは強さがわかるので納得するが、ヒナギクはハンターランクと
言われてもよくわからない

「要するに、一人でもクシャルダオラなどを倒せてしまっくらの
強さです」

ハヤテがヒナギクに説明する

「それって凄いことよね」

「はい。本当に凄いです」

「ここで働いてる人はみんなそのくらいなのかしら…」

「もし、そうだとしたらこの村は安全ですね」

「確かにそうね」

ヒナギクは笑って言った

「私はもうすぐ仕事が終わるので、食べ終わったら外で待っていて
ください」

「わかった」

「…「わかりました」「」」

「それではごゆっくり」

ペコリと頭を下げてミユは集会場の奥に戻っていった

黄金（後書き）

ナ「マジヤバイ…」

ヒ「怖かった…」

マ「ここはそこまで被害が出ていませんけど…凄まじかったですね」

ナ「ここはきつと来ないだろう、とか思ってたのがいけなかったな」

ヒ「確かにそうね」

マ「地震対策はちゃんと」

ナ・ヒ・マ

「お願いします」

ヒ「余震にも気を付けて下さいね」

過去（前書き）

すみませんm（——）m

なんか話が全く浮かばなくて…

更新はこれからも不定期になると思います…

なんとか完結できるようにがんばります

過去

ミユの家にハヤテ達はやってきた
ミユの家は木造で、それ程大きくはないが、小さくも無い大きさだ
った

「まあ、入ってください」

ミユがハヤテ達を家のなかへ誘う

「お邪魔します」

「私一人ですから気を遣わなくていいですよ」

ミユが言った

ハヤテ達は中に入り、部屋を見た瞬間に驚いた

「すご……」

「凄い量ね」

部屋の中には武器がそこら一带に置いてあった。武器だけでなく、
防具も沢山置いてあった

「これ、全部ミユが全部つくったのか!？」

ナギは興奮していた

沢山の武器・防具、これを見てテンションが上がらないわけが無か
った

「まあ、いろんな人に協力してもらったんですけどね」

アハハ、と笑いながらミユは言った

「そうそう、あの箱の中に素材があるから持って行っていいですよ」

ミユが箱に指を差す

ハヤテ達は箱を開けてみると、そこには鱗やら、皮やら、牙やらが
いろいろと入っていた

「本当にありがとうミユ!」

ナギは笑顔で言った

「いいっていいって、素材だってちゃんと使ってくれた方がいいで
しょうし」

「本当にありがとうございます」

ハヤテが改めて言った

「別にそこまでお礼を言われるようなことじゃないと思うけどね」

ミユは笑顔で言った

「ミユさんも強いハンターですよね」

ヒナギクが回りを見ながら言った

数々の武器・防具、これを見てそう思わない人はいないのでないか

「ありがとう。でも集会場でも言ったけどレナには全然かなわないんですよ」

ミユは頭を掻きながら言った

「レナはいつからハンターだったのだ？」

「うーん、いつからねえ…小さい頃からハンターだったから……」

6、7才かな？」

「早!？」

「お父さんがハンターだったから自然とね」

「そう言えば…君たちはレナの小さい頃の事を知っているの？」

「いや全く」

ナギがキツパリと否定する

今までそのような話は聞いたことが無かった

「ん〜、…じゃあ君たちにも話しておこうかな、レナの事を。仲もいいみたいだしね。長くなるから、適当に座ってください」

先程までの明るい雰囲気ではなく、真剣な顔つきになり話し始めるハヤテ達は近くにある木で出来た椅子に座る

「昔の話し…」

レナのお父さんは凄腕のハンターだった

この村一番の実力で、ギルドにも評価されるほどその実力は本物だ

った

そんな父親をレナは尊敬していた

父親は憧れであり、目標だった

程なくしてレナはハンターになった。そのレナに父親は戦い方を教え込んだ

レナは父親の才能をしつかりと受け継いでいた。レナはみるみる実力を付けていき、10年も経つと父親と同じクエストに行けるまでに成長した

父親も、村のみんなもその事を嬉しく思っていた

あの親子に勝てるものはいない、そう思われるほどだった

ある日、父親とレナはあるクエストに行った

あの親子なら心配はない、誰もがそう思っていた。ギルドでさえもだが、現実はそのはならなかった

村に戻ってきたのはレナ一人だけだった

レナは村に着いた途端に、涙を流した

もうどうにも止まらなかった

レナは泣いた

これ以上に無いくらい、人生に流す涙の量くらい泣いた

なんとか話せるようになると、父親が死んだことを話した

自分を庇い、自分の代わりに死んだのだと

その日から、レナは自分から集会場のクエストを受けることをしなくなった

そして、少しでも心配なクエストに仲間が行くところになると必ずと言っていい程レナも一緒に行った

もう、誰かを失うようなことをしたくない、そんな思いからだった

と、いうことがあったんですよ」

ミユはひとしきり話し終えると、体を上にぐぐっと伸ばす長い話で意外と疲れたのだ

「そんな過去が…」

「……」

かなり重い空気になってしまい、会話に詰まる

「あゝ、…うん。でも気にしないで今までどつりに振る舞ってくださいね」

慌てたようにミユが言った

思っていたより気まづくなってしまった

どうにかこの状況を打破しようと考えるが何も思い浮かばない

「…だからあの時、異常に怒っていたんですね…」

「あの時って、ティガレックスのことか？」

「はい」

「確かに、戦っていたときのレナさんは周りに人を寄せ付けない迫力と言うか、驚異のようなものがありましたね」

ハヤテ、ナギ、マリアはミユの話に納得する

実際にそのレナを見たのだから

だが、一人実感の無い人がいた

(レナさんがそんなに怒るなんて…ちょっと想像できないな…)

ヒナギクだけ、その時は気絶していたのでレナのことを見ていなかったのだ

「まあ、これからもレナと仲良くしてくださいね」

「はい、もちろんです」

ハヤテ達は迷いなく答えた

「今日はありがとなミユ」

「うん、これからも頑張ってくださいね」

「ああ！」

そうしてハヤテ達は家に帰った

過去（後書き）

ナ「ちよう久しぶりだな」

ヒ「そうね」

マ「でもあと少しですから」

ナ「これからが勝負だな」

ヒ「完結する事を祈りましょう」

ナ・マ・ヒ

「「これからもよろしくお願いします」

装備（前書き）

遅れましたm(_____)m

なんとかそこそこの量だと思います

次は…

もっと遅くなるかもしれません…

早く更新できるように善処します…

装備

ハヤテ達はミユの家から戻ってきた家に着くとミユから貰った素材をアイテムボックスの中に入れるすかすかだった中身が埋まっっていく

「これで明日、早速強化だ」

「そうですねお嬢様」

ナギはうーんと体を上に伸ばす

「今日はもう寝るぞ〜」

言った直後に大きな欠伸をする

今日も相当疲れたようだ

普段から全く運動をしていないことを考えると、かなり頑張っていると言える

ナギは寝室に着くとベッドにダイブする

ハヤテ達はそれぞれのベッドに座る

「それではおやすみなのだ...」

ナギはすぐ眠りにおちた

「それじゃあ私たちも寝ましょうか？」

「そうですね」

「おやすみなさい、マリアさん、ヒナギクさん」

「おやすみハヤテ君、マリアさん」

「おやすみなさいハヤテ君、ヒナギクさん」

それぞれあいさつをし、灯りを消してベッドに横になった

次の日

「うーん……」

ナギが目を覚ますと

ベッドには誰もいなかった

（あれ？どうして誰も居ないのだ？）

理由は簡単だった。単純に起きた時間が遅く、ハヤテ達は早い。ナギが寝ている部屋で話しているわけにもいかないのでもどこかに行っただのだ

「……………かああ……」

大きな欠伸をするナギ

まだ眠り足りないようだった

「ん……」

横を見るとハヤテの寝ていたベッド

「……………」

この部屋には今誰も居ない

（まあ、少しくらい……）

ナギはゆっくりとハヤテのベッドに近づくと

「ここでハヤテが寝てるんだよな……」

ナギはハヤテのベッドにダイブする

そしてハヤテの枕をギュッと抱き締める

「えへへ、ハヤテの匂いだ〜／＼／」

ベッドの上をゴロゴロするナギ

その顔は幸せに満ちていた

ずっとこうしていたい

ナギはそう思う

その矢先、部屋のドアが開かれた

「うおおおお！」

ナギは音のしたその瞬間すぐに起き上がり枕をベッドに叩きつける
「はあ、はあ、」

「…いつたい何をしていたんですかお嬢様？」

ハヤテは唾然としていた

部屋に入ったら意気なり自分のベッドに枕を叩きつけいるナギを見たら、それはそうなるだろう

その前の行動も見えていたのだが

「いや、あの、…これはだな…」

（マズい…まさかこんなに早く帰ってくるとは予想外だ…何か、何かいい言い訳を…）

ぼけていたナギの頭がフル回転する

因みに、ハヤテ達はのんびり辺りをぶらぶらしていたので早く帰って来てはいない

それだけナギは寝ていたのだ

そのナギは何故か鋭い視線を感じていた

（ハヤテ君のベッドで…！！）

ヒナギクがそんな視線をナギに送っていた

（私もしたことないのに…！…って、何を考えてるの私は！）

ヒナギクは我に返り、自分の考えていたことに顔を真っ赤にしてしまふ

（二人ともかわいいですわね〜）

マリアは一人この状況を楽しんでいた

（っ！きた！無理があるがこれしかない！）

「む、虫がいたからそれをやっつけていたのだ！」

苦しい言い訳だった

「とてもそうには…いたのだ！」

ナギはハヤテの声を遮って言った

もう必死だった。ナギはここで負けたら何かが終わる気がした

「はあ…」

ハヤテは一応納得したようだ

「よ、よし。それでは朝食に行くぞ！」

この話は終わりと云わんばかりに大声で言った

「そうですね」

「ではいくぞ！」

そうしてナギ達は集会場に向かった

ハヤテ達は集会場で朝食を食べ終えた後、武器屋に来た

「おう、久々だな」

武器屋の親父が言った

「そろそろ買い替えないといけないと思ひまして」

ハヤテが革袋から素材を出す

素材を見ると親父の目が変わった

「これ、どうしたんだ」

驚くのも無理は無かった

その素材達はこの数日間を取れる量と質ではなかったからだ

「ミユから分けてもらったのだ」

「ミユからか、そりゃこれだけ貰えてもおかしくないな」

うんうんと頷いて親父は納得した

「こんだけありゃあいいのが作れるぜ！」

「それじゃあお願いします」

「おう！任せな！」

親父は意気揚揚と武器屋の奥に行った

「と言うか…勝手に引っ越したけどいいの？」

ヒナギクは一人思ったことを言った

前は何を作るかを言ってから奥に向かって行ったのに、今回は違ったので不思議に思ったのだが、二人が普通にしているので別におかしくはないのかもしれないと思いつつ言ったのだった

「…あっ！」

今更しまったと言わんばかりのリアクションをする

「いったい何が出てくるんでしょうね？」

マリアが笑顔で言った

「ま、まあ気合い十分だったから大丈夫だろう」

「あとお金って、足りるのかしら？」

「…！」

二人は呆然とする

あの様子では新しいのを作る気満々だ

その場合、値段はかなりする

しかも、ミユから貰った素材は良いものばかり

武器の値段は計り知れない

「……お金無い……」（ナギが！）

（こんなことを！）

（言うなんて！）

まさかナギからこんな発言が出るとは、思いもよらなかった

普段の生活では絶対に言うことが無い台詞だ

「…ハヤテ、マリア、ヒナギク……どうしよう……」

涙目でうったえた

頬は僅かに紅潮している

（ナギ、こんなに可愛かったんですね／＼）

（ッ…ちよつとドキツとしちゃった／＼）

（すいませんお嬢様…もう少し早く気付いていたら…）

人によって感じ取るものは違うようだった

「ちよと、おまえさんら」

武器屋の中からおばあさんが出てきた

料金の事と思いき身構えてしまう

「？、何をしているんだい？」

「い、いえお気になさらず……」

「そうかい。おまえさんら防具が無いそうだね」

「え、あ、はい……」

予想外の質問に面を食らってしまふ

「……………よし、私がつくつてやるから奥に来な」

「……………は？」

これまた予想外な言葉だった

おばあさんに奥に案内される

奥には体付きのいい男達が鍛冶仕事をしている

「こつちの部屋だよ」

案内された部屋に入ると、そこは先程までの暑苦しい部屋ではなく、すつきりとしていて、端にある机には布やら、針やらハサミやらが置いてあつた

「これから服のサイズをはかるから順番に来な」

おばあさんがメジャーを取り出して言った

もう言われた通りにするしかないと言うことになり、最初はヒナギクから測ることになった

部屋の奥に行き、ちゃんと仕切られた場所に行く

「んじゃ測るから」

「…はい、わかりました……」

ヒナギクは服を脱ぎ、下着だけになる

「……………意外と……意外となんですか？」

おばあさんが言い終わる前にヒナギクが言葉を遮った

綺麗な笑顔で

「まあ、これからだよ」

「……………はい」

ヒナギクは力なく返事をした

そして採寸が無事に終わる

次はマリアだった

何故かヒナギクが落ち込んでいるのが気になり、その理由が知りたかった

「お願いしますね」

「それじゃあ測るよ」

マリアも服を脱ぎ、下着だけになる

「ん〜。おまえさんたちは綺麗な体をしているんだねえ」

「それはありがとうございます」

「さっきの子は惜しいんだけどねえ。きっと村一番の美人になれた

よ

「あはは…」

(ヒナギクさん…がんばってください)

疑問の解消と共に、ヒナギクを応援するマリアだった

次はナギの番だった

ナギも下着だけになり、測ってもらっ

順調に進んでいくと

「あまり変化が無いねえ」

思わずおばあさんが言ってしまった

「こ、これから凄い成長するから大きなお世話だ！／＼／＼」
ナギは力強く、そして自分に言い聞かせるように言った

最後はハヤテだ

「お願いします」

「はいはい、それじゃあ測るよ」

ハヤテも下着だけになる

「…思っていたよりもがっちりしているんだねえ」

おばあさんが感心していった

服の上からでは普通に見えるのだが、実際はかなりしついているので驚いたのだ

それに

「そんな顔なのにねえ」

「早く測ってください！」

ハヤテの声が響き渡った

測り終わるとハヤテ達は別の部屋に移された

それと、マリア以外は凹んでいた

「これから…きつと」

「まだだ、まだ…」

「はあ……………」

思い思いの言葉を呟いている

(なんでこうなったんでしょ)

マリアは一人気まずい空気のまま待つていた
すると、おばあさんが入ってきた

「おまえさんたち、防具は着たことがあるのかい？」

「……いえ、一度もありません」

誰も答えそうに無かったのでマリアが言った

「ふん、そうかい……」おばあさんは何かを悩んでいるのか、腕を組んで何かを考えている

「……よし。それじゃあ待っていてくれ。武器が出来る頃には終わるはずだから」

「はい、わかりました」

そう言つとおばあさんはどこかへ行った

(…気まずいですね…)

マリアは一人この雰囲気耐え続けた

一時間後…

流石にハヤテ達の凹みが治った

おばあさんが部屋に来た

「ほら、完成したよ」

持ってきたものは

今、ハヤテ達が着ている服だった

「あの…防具、ではないんですか？」

マリアがすぐ思ったことを言った

いくらマリアであってもそれが防具に見えないことぐらいわかる

「これはな、特別な生地で作られている物だから防具として役に立つ

はずだよ」

「なるほど」

「それに、防具もろくに着たことが無いなら、今までの動きやすい服のほうが良いだろう?」

納得する理由だった

防具を着て戦う事になればなれていないので動きが悪くなることは間違いない

それなら着慣れた物を着て戦った方がましだ

「だからあの質問をしたんですね」

「そういう事だ」

おばあさんが服をマリアに渡す

「あの、お金は…」

「勝手にやったことだからね。そんなものいらないよ」

あっさりと言った

「もう少しで課題が終わりそうなんだろう?なら応援したくなるだろう」

おばあさんは笑って言った

貰った服を着て、外に出ると親父が出てきた

「ほら、これが完成した武器だ!」

親父が自慢気に武器を差し出す

ハヤテにはバイオレットシザー

ナギにはヴァジユラ

マリアにはジェイドタイフーンが渡される

どれもかなりいい武器だ

いい武器〓いい値段

よってこの方程式が成り立つ

「…値段はいくらですか？」

恐る恐るハヤテは訊いた

「179000zだが？」

「……！！」「……」

終わった

ハヤテ達がそう思った瞬間だった

明らかにお金が足りない

ハヤテ達は悩んだ。今更悩んでも意味はないのだが

「すみません！」

ハヤテが頭を下げ、全力で謝る

「そんなにお金を持っていません！」

「……すみませんでした！」「……ナギ、ヒナギク、マリアも頭を下げて謝った

もうそれしかすることが無い

許してもらえなかったらどうしよう、そんな考えが四人の頭をよぎる

「…それは許せねえな」

「……！！」「……」

四人に電撃が走る

考えが的中してしまった

絶望が包み込む

「お金をもつてないってんなら……」

「……もつてないってんなら……」「……」

「…後でだな」

「………は？」

拍子抜けした答えだった

「ま、すぐにこれくらい稼げるだろお前たちなら」

何故だか自信満々に親父は言った

「ほ、本当にいいんですか？」

「ああ、きつちり払ってくれりゃあ問題ねえよ」

笑顔で言ってくれた

「「「「ありがとうございます！」「」」」」

四人は深く頭を下げた

新しい武器に新調したハヤテ達は村長のところにやってきた

「ほう、随分いい装備になったね」

「目見てそう言った」

「これもミュのおかげだ」

「ミュがねえ……」

「それよりも次はいつたいなんなのだ？」

「次は、火山のテオテスカトルだよ」

そう村長は言った

装備（後書き）

ナ「また強敵がきたな」

マ「あと、ようやく装備を強化出来ましたね」

ヒ「結構後半まできたのよね」

ナ「あと二つ、そしたらミラ……」

マ「頑張って勝ちましょうね」

ヒ「はい」

ナ「当たり前だ」

ナ・マ・ヒ

「次回もよろしくお願いします」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9997g/>

ハヤテのごとく！inモンハン

2011年6月18日10時34分発行